

第7回 保育所保育実践研究・報告集

平成 25 年 3 月



社会福祉法人 日本保育協会

はじめに

保育所に対する地域の要望は様々であるが、子育ての専門機関、専門の職員が常駐する場所は地域では保育所において他にない。保育所における日々の保育実践の中から課題を見つけ、複数の職員の手でそれを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善することが保育の質を高めることに繋がる。

この「保育所保育実践研究・報告」は、課題についての「研究論文」と「報告と考察」の2つの方向性により、保育者の実践について募集したものである。第7回目を迎え、会員各位のご協力により、12件の提出をいただいたことに感謝申し上げます。また、業務多忙の中、応募された皆様に対し、敬意を表する次第である。また今回から、課題研究の取り組みを評価することとし、各賞の区分の見直しを行い、従来3区分であったものを5区分に変更した。

なお、この事業はあくまで保育実践の研究・報告について募集したものであり、各施設における保育内容の評価を目的としたものではないことを申し上げます。

更に検討を加え、第8回の募集を予定している。内容が充実していくことを期待し、併せて積極的に保育研究を行っていただくことを願うものである。

平成25年3月31日

「保育所保育実践研究・報告」企画・審査委員会

第7回「保育所保育実践研究・報告」事業の概要

1. 目 的

日本保育協会では、保育所保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究・報告を募集します。

応募いただいた研究・報告は審査を経て表彰し、報告集やホームページ、「保育界」等で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

2. 主 催 社会福祉法人 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

3. 対 象 日本保育協会会員保育所の所長、職員（個人研究、保育所内グループ研究、地域のグループ研究等）及び保育科学研究所研究会員（保育所との共同研究を含む）

4. 部 門

（1）課題研究部門

以下からテーマを選び、保育所での課題や取り組みについてまとめてください。関心を持ったきっかけ、疑問などの課題又はどのような仮説を立てたのか、保育にどのように取り組んだのか、そこからどのような発見、気づきがあったかを、出来るだけ掘り下げてください。必ずしも問題解決の成果や成功例を求めているわけではなく、課題の発見とその解決に向けたプロセスをまとめてください。保育所保育指針をもとに、具体的にどのように実践されているかを示す機会としてお考えください。

① 人との関わり

子どもが人への信頼感や主体性、社会性を形成していくために保育者の役割は大切です。

子どもと人との関係性をつないでいくための関わりについて取り組みをお寄せください。

② 遊びと学び

遊びや日々の生活においても子どもが学ぶ機会はたくさんあります。日常的な遊びや生活が学びにつながっていくことについての取り組みをお寄せください。

③ 災害時の対応

地震や台風、大雨などによる災害に、保育所ではどのような想定をし、対策を行っているかについて取り組みの状況や計画をお寄せください。

（2）実践報告部門

テーマは自由です。日誌に記載された日常の実践や、地域・保護者に向けて実施した調査結果など、保育実践・事例報告・調査報告等を対象とします。日々の記録の中から得られた事柄や傾向の変化など、客観的な記録・報告をもとにした考察に注目するものです。

（例） ・保育所での実践事例（感染症・食中毒への対応、特別な配慮の必要な子どもの保育、乳児保育での課題、苦情解決の取り組み、組織力向上のための人材育成、入所の際の配慮、保育日誌の工夫・改善等）

・保育所（地域）での調査など

・保育所として実施した子育てに関する特別活動、子育て家庭への支援・連携など

5. 審査において評価する内容

応募作の評価は企画審査委員会が行います。目的や課題を明確に示し、それに対しどのように取り組んでいったかという経過等について、事実を基に客観的・具体的に記述され、その結果に対して考察がなされていることが大切です。また、問題提起が明確か、論旨が通っているか、オリジナリティはあるか、データは適切か等についても評価を行います。

第7回「保育所保育実践研究・報告」入賞作一覧

○優秀研究賞（課題研究部門）

該当なし

○研究奨励賞（課題研究部門）

- ・課題研究② 遊びと学び
「アナログ保育とデジタル保育による遊びと学びの融合！
未来のATOM創造プロジェクトで興味関心意欲を育てたい」
杉本 正和（つるみね保育園・鹿児島県）

○優秀報告賞（実践報告部門）

- ・実践報告
「『遊びの中で育つもの』ードキドキ、わくわく、今日の遊びはなんだろうー」
半田 睦枝（秋和保育園・長野県）

○実践奨励賞

- ・実践報告
「感染症対策委員会を立ち上げて」
向井 敦子（宮園保育園・東京都）
- ・実践報告
「『エピソード記述』を通しての保育の質の向上の経過」
石田 幸美（菜の花保育園・山梨県）
- ・実践報告
「アゲハ蝶の飼育・観察から劇あそびへ！」
中屋 裕子（浪花保育園・福井県）
- ・実践報告
「おむつはずしについて考える～子どものペースに合わせたおむつはずしのチャンス～」
小倉 裕子（建昌保育園・鹿児島県）

○奨励賞

- ・課題研究① 人との関わり
「子どもと保護者との関係をつなぐ、保護者養育力向上をめざして」
伊能 恵子（昭島ナオミ保育園・東京都）
- ・課題研究① 人との関わり
「人との関わりを通して、人権を尊重する心を育てる保育を推進するために」
大神 敬一（多々良保育園・福岡市）
- ・課題研究① 人との関わり
「子どもは親の信を感じて成長を始める」
渡辺 太郎（寒田ひめやま保育園・大分県）
- ・課題研究② 遊びと学び
「木製手作り玩具」
糸 健太郎（キッズタウンにしおおい・東京都）
- ・課題研究② 遊びと学び
「未満児における遊びと保育環境について～実践から見てきた子どもの育ち～」
知念 幸江（第2愛心保育園・沖縄県）
- ・実践報告
「自立を育む楽しいキャンプ」
宮田 芳子（筑水保育園・福岡県）

目 次

はじめに

第7回「保育所保育実践研究・報告」事業の概要

第7回「保育所保育実践研究・報告」入賞作一覧

1. 入賞作の紹介	1
(1) 研究奨励賞	1
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究② 遊びと学び	
「アナログ保育とデジタル保育による遊びと学びの融合！ 未来のATOM創造プロジェクトで興味関心意欲を育てたい」	
杉本 正和（つるみね保育園・鹿児島県）	3
(2) 優秀報告賞	15
〈実践報告部門〉	
・ 「『遊びの中で育つもの』—ドキドキ、わくわく、今日の遊びはなんだろう—」	
半田 睦枝（秋和保育園・長野県）	17
(3) 実践奨励賞	29
〈実践報告部門〉	
・ 「感染症対策委員会を立ち上げて」	
向井 敦子（宮園保育園・東京都）	31
・ 「『エピソード記述』を通しての保育の質の向上の経過」	
石田 幸美（菜の花保育園・山梨県）	42
・ 「アゲハ蝶の飼育・観察から劇あそびへ！」	
中屋 裕子（浪花保育園・福井県）	49
・ 「おむつはずしについて考える ～子どものペースに合わせたおむつはずしのチャンス～」	
小倉 裕子（建昌保育園・鹿児島県）	59
(4) 奨励賞	75
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究① 人との関わり	
「子どもと保護者との関係をつなぐ、保護者養育力向上をめざして」	
伊能 恵子（昭島ナオミ保育園・東京都）	77

・課題研究① 人との関わり 「人との関わりを通して、人権を尊重する心を育てる保育を推進するために」 大神 敬一（多々良保育園・福岡市）	87
・課題研究① 人との関わり 「子どもは親の信を感じて成長を始める」 渡辺 太郎（寒田ひめやま保育園・大分県）	94
・課題研究② 遊びと学び 「木製手作り玩具」 糸 健太郎（キッズタウンにしおおい・東京都）	100
・課題研究② 遊びと学び 「未満児における遊びと保育環境について ～実践から見えてきた子どもの育ち～」 知念 幸江（第2 愛心保育園・沖縄県）	108
〈実践報告部門〉	
・「自立を育む楽しいキャンプ」 宮田 芳子（筑水保育園・福岡県）	115

2. 総評及び講評123

総 評	125
-----------	-----

委員長 野 坂 勉

講 評（作品別）.....	126
---------------	-----

「保育所保育実践研究・報告」企画審査委員会

委員長 野 坂 勉（大正大学名誉教授）

藤 澤 良 知（実践女子大学名誉教授）

小 林 芳 文（和光大学教授）

井 桁 容 子（東京家政大学ナースリールーム主任）

酒 井 かず子（金目保育園園長）

日 吉 輝 幸（穴水第一平和保育所所長）

渋 谷 一 美（堀兼みつばさ保育園主任）

1. 入賞作の紹介

(1) 研究奨励賞

〈課題研究部門〉

課題研究② 遊びと学び

「アナログ保育とデジタル保育による遊びと学びの融合！

未来のアトム創造プロジェクトで興味関心意欲を育てたい」

杉本正和（つるみね保育園・鹿児島県）

課題研究② 遊びと学び

「アナログ保育とデジタル保育による遊びと学びの融合！ ～未来のアトム創造プロジェクトで興味関心意欲を育てたい～」

鹿児島県・つるみね保育園 杉本 正和

はじめに（課題と仮説）

子どもたちの遊びと学びは表裏一体であると感じている。大人は、「遊ぶときは遊び、学ぶときは学ぶ」と区別しているが、子どもたちは、「遊びながら学び、学びながら遊ぶ」という感覚ではないだろうか？そこで、遊びと学びを融合させた保育を創造できれば、子どもたちの発達段階に応じた取り組みが展開できるのではないだろうか？と考え、実践と検証を重ねているのが、つるみね保育園オリジナルのアナログ保育とデジタル保育、未来のアトム創造プロジェクトである。

これまで、29年間、教育と保育で、子どもたちを支援しながら感じてきた体験上の課題と仮説を、どうにか検証したいと考えてきた。子どもたちが、トンネルや山がこわれないように砂場で遊んでいる時、かくれ場所を見つけている時など、友だちと交流しながら笑顔が見られ、歓声が響いている。心と脳と体のバランスがとれ、遊びも学びも充実している時だと思う。このような場面を、さまざまな領域で、計画的に継続的に体験させてあげることによって、子どもたちに、よりよい変容が見られるのではないだろうかと構想し、実践を続けていることをまとめたのが、今回の論文である。

さて、つるみね保育園は、鹿児島県の大隅半島のほぼ中央に位置し、「のびのび ほのぼの 元気いっぱい 笑顔いっぱい いつるみねっ子」のキャッチフレーズのもと、「安心・安全・愛情いっぱいの3つのあを大切に作る保育」を貫く、創立40年の定員50名の保育園である。近隣の2つの小学校が廃校予定になっているほど、過疎化・少子化・高齢化の進む地域で利便性も悪い。保育園バスや送迎ステーションを備え、保護者の送迎負担を軽減して定員を確保しているが、近い将来、存続の危機に直面するだろうという危機感を持っている。

マイナス思考だけでなく、見渡す限りの田んぼや畑や山、住宅地がない環境を、プラス面に考えてみようとの思いが、アナログ保育とデジタル保育の創造につながっていると思う。独自の定義付けで、「アナログ保育とは、園庭や室内での遊び、読み聞かせ、わらべ歌、手遊び歌など、ふれあったり交流したり汗を流したりする普段の伝統的な保育」、また、「デジタル保育とは、タブレット機器、DVD、CD、TV、パソコンなどのデジタル機器を

利用して、子どもたちの五感に刺激を与える先進的な保育」と捉えている。

私は、教育や保育に関する理論や実践は、①一過性で終わるのではなく、何年も継続できること。②どんな規模の施設でも、どこの地域でも、どの職員であっても実践できる、わかりやすい内容であること。③子どもたちの興味関心意欲を大きく育てられること。この3つが大切だと考えている。今回の取り組みは、他園での実践がなく、理論的にも、まだ不十分であるが、子どもたちのとびっきりの笑顔と、キラキラと輝く瞳を見ることがができる保育であることには自信を得ている。

伝統的な保育の良さを見直し、先進的な技術を保育に生かすことに挑戦し、子どもたちの遊びと学びを融合しようと実践を続けている当園の取り組みを、多くの方々に検証していただく機会となれば幸いである。

1. 未来のアトム創造プロジェクト（資料①②）

♪心優し ラララ 科学の子 十万馬力だ 鉄腕アトム♪

約半世紀前に、手塚治虫が鉄腕アトムを描いたことはよく知られているが、この曲の作詞者が絵本作家の谷川俊太郎であることを知る人は少ないと思う。このわずかなフレーズに、子どもの理想像が表現されていると感じた。特に、最近のイジメ問題を見聞きするたびに、「優しく（心優し）、賢く（科学の子）、たくましく（十万馬力）」育てる重要性を強く感じている。これは、どの保護者も同様であると考え、保育園と家庭が連携した、「未来のアトム創造プロジェクト」を構築した。後述する様々な保育や取り組みを通して、子どもたちの心と脳と体を豊かに成長させていると手応えを感じている。

資料①「やさしく かしく たくましく」未来のアトム創造プロジェクト

つるみね保育園 未来のアトム創造プロジェクト

<p style="text-align: center;">アナログ保育</p> <p>科学タイム (週1) 体操ランニングタイム (毎日) のびのびタイム (隔週) ほのぼのタイム (隔週) わらべ歌タイム (週1) イングリッシュタイム (月2) ひらがなタイム (月2) 日舞タイム (月1) 読み聞かせタイム (月1) 保育環境・通常の保育 朝の会・帰りの会・行事</p>	<p style="text-align: center;">やさしく かしく たくましく</p>  <p style="text-align: center;">目指す心身 優しさ 正しさ 逞しさ 強さ 明るさ 賢明さ</p>	<p style="text-align: center;">デジタル保育</p> <p>i Padタイム (月1) アトムタイム (月1)</p> <p style="text-align: center;">タブレット機器 DVD CD TV パソコン</p>
--	--	---

家庭と連携して未来のアトムを育てたい！

♪心やさし ラララ 科学の子 十万馬力だ 鉄腕アトム♪

やさしく かしく たくましく

心と体と脳が育つ 6ヶ条

<p>よく寝る</p> <p>早寝、昼寝が成長を支えます！ 科学的にも実証されています。</p>	<p>よく食べる</p> <p>バランスよく、好き嫌いをなく、 きっちり3食を。</p>	<p>よく遊ぶ</p> <p>コミュニケーション、ルールを学び、 体力や調整力も伸ばします。</p>
<p>よく聞く</p> <p>学力の基本は、この力です！ しっかり聞く子は伸びます。</p>	<p>よく見る</p> <p>集中して観察できる力を！ 見て感動する力を！</p>	<p>よく話す</p> <p>子どもたちの話を聞いてあげる ことを心がけましょう！ 話すことで思考力が伸びます。</p>




**つるみね保育園
未来のアトム創造プロジェクト**

約60年前に発表された鉄腕アトムが、現代の子どもの理想像だと、つるみね保育園では考えています。

2. 保育環境の創造（写真①②③④⑤⑥⑦）

どんな保育に取り組むにしても、まずは、保育環境を優先しなければならない。安全かつ魅力ある保育環境を整備することは、園長にとって、もっとも、やりがいのある重要な仕事だと感じている。当園は、四季の移り変わりを感じ、旬の物を食すという、自然との関わりという点では、たいへん恵まれている。大きなイチョウの下での遊び、栗拾い、みかん狩り、芋掘り、落花生掘りなどは、毎年、繰り返される保育である。また、広い遊び場、多様な遊具、木陰での遊びなども特色である。近年は、もっともっと、のびのびほのぼのと安心して遊べる環境を創造してあげたいと願い、人工芝園庭、築山人工芝スキー場、第2園庭、150mランニングコース、アトムの家の新築、鉄製遊具の大規模リニューアル

などにも取り組んでいる。魅力あふれる保育環境を写真で検証していただきたい。

写真① 人口芝園庭



写真② 築山人工芝スキー場



写真③④⑤ 自然環境



写真⑥ 150mランニングコース



写真⑦ 木陰に配置された豊富な遊具



3. アナログ保育

当園では、従来の保育全般をアナログ保育と考え、砂場遊び、虫探し、どろんこ遊びなど、汗にまみれ、どろんこにまみれながら、毎日、2～3回は着替えをするような保育を展開しているが、当園の保育理念を実現させるためには、全職員が共通理解した保育を共通実践する必要がある。そこで、重点としたい保育活動を、「〇〇タイム」という名称をつけ、年間を通して計画的に取り組んでいる。アナログ保育では、9つのタイムを設定し、多様な個性に対応できるように、さまざまな体験を通して豊かな心と体を育てている。

①科学タイム（資料③）（写真⑧⑨⑩⑪）

手作り感のある科学的な遊びを体験させ、アトムのような科学の子を育てたいとして、週始めに15分間実践しているのが、「科学タイム」である。これは、10年以上続け、すでに500回を超えた、「園長先生と遊ぼう」の時間を発展させ、科学的な内容を精選し実践している。例えば、氷と塩を使つての試験管アイス作り、ペットボトルでの渦巻きや浮沈子遊び、糸電話遊び、段ボール空気砲、磁石遊び、挿し木体験などであり、子どもたちの驚きの表情や笑顔を見ることが、私自身の楽しみにもなっている。詳細な年間計画は資料③を参照していただき、実際の様子は写真で想像していただきたい。

資料③ 科学タイムの年間計画

時期	テーマ・内容	時期	テーマ・内容
4月	じしゃくで遊ぼう ・くっつけて遊ぼう ・魚つり遊びをしよう	10月	水で遊ぼう ・ペットボトルで、うずまきを作ろう ・紫キャベツの色水で遊ぼう
5月	バイオテクノロジーにチャレンジ① ・いろんな花や樹木の挿し木をしよう ブルーベリー、コリウス、ペチュニアなど	11月	ゴム風船で遊ぼう ・エアホッケーで遊ぼう ・バルーンで犬を作ろう
6月	空気で遊ぼう ・紙飛行機を飛ばそう ・紙風船で遊ぼう ・空気でつぼうで遊ぼう	12月	バイオテクノロジーにチャレンジ② ・皇帝ダリアの挿し木にチャレンジしよう
7月	シャボン玉で遊ぼう ・いろんな道具で、シャボン玉を作ろう ・大きなシャボン玉を作ろう	1月	凧を飛ばそう ・折り紙で、ネズミ凧を作ろう ・グニャグニャ凧を作ろう
8月	色で遊ぼう ・赤、青、黄の絵の具で、色作りを楽しもう ・ボディペインティングで楽しもう	2月	静電気で遊ぼう ・髪の毛を持ち上げてみよう ・スズランテープで遊ぼう
9月	塩で遊ぼう ・塩水を作って遊ぼう ・アイスクャンディを作って食べよう	3月	音で遊ぼう ・糸電話で遊ぼう ・あき缶笛を作って鳴らそう

その他にも取り組んでいる内容

- ・鏡の反射 ・万華鏡 ・竹トンボ ・こまを回そう ・だるま落とし ・メビウスの輪
- ・新聞紙ツリー ・入浴剤で遊ぼう ・浮沈子遊び など

写真⑧⑨⑩⑪ 科学タイムの実践の様子



浮沈子



皇帝ダリアの挿し木



氷と塩でアイスクャンディ作り



大きなシャボン玉

②のびのびタイム (写真⑫⑬)

隔週で40分間実施する運動遊びの時間である。担任の枠をはずし、運動が得意な職員が、3～5歳児を対象に指導。さまざまな運動を体験させ、身体の調整能力を育てる。

③ほのぼのタイム (写真⑭⑮)

隔週で40分間実施する音楽遊びの時間である。担任の枠をはずし、音楽が得意な職員が、3～5歳児を対象に指導。歌、踊り、器楽、音楽レクリエーションなどの活動である。

④わらべ歌タイム (写真⑯⑰)

毎週水曜日15分間、全園児で実施している。通りゃんせ、かごめかごめ、けんけんぱ、

絵描き歌など、「不易流行」考えて、伝承遊びも重視し、楽しく取り組んでいる。

写真⑫⑬ のびのびタイム（運動タイム）



写真⑭⑮ ほのぼのタイム（音楽タイム）



写真⑯⑰ わらべ歌タイム



♪通りゃんせ♪



♪けんけんぱ♪

⑤体操ランニングタイム（写真⑱）

毎日の朝の活動である。楽しくリズム体操をしたあと、環境を生かした150mのクロスカントリー式のランニングコースを走る。BGMは「鉄腕アトム」の曲である。

⑥イングリッシュタイム（写真⑲）

外国人と交流する目的で、隔週で実施している。言葉や文化の違いを感じるだけでも大きな成果が上がっていると感じる。最近、実施したハロウインは、園児も職員も初体験であったが、とても楽しく実施でき、外国文化の良さも実感できた。

写真⑱ 体操ランニングタイム



写真⑲ イングリッシュタイム



⑦その他のタイム

ほかにも、日舞タイム、読み聞かせタイム、ひらがなタイムを実施している。

4. デジタル保育（写真⑳㉑㉒）

デジタル保育は、2つのタイムが中心である。ひとつは、「アトムタイム」。毎月1回24分間のDVDアトム全集の映写会である。もうひとつが、「iPadタイム」。これが今回の研究において、最も特色のある保育である。iPadの先進的な技術を保育に生かすことを構想した結果、プロジェクターで大画面に投影し、みんなが公平に操作する方法が、最も楽しさを共有できると判断した。私は、「泣く子も笑うiPad」という表現をよく使うが、タブレット機器は、低年齢児でも操作が容易で、皆、高い興味関心を示す。毎回、意欲的に取り組み、全園児に大人気の時間だが、あえて、毎月1回40分間の実施としている。それは、それは、あまりにも、子どもたちの五感に強烈な刺激を与えているからである。あくまでも、当園で重視するのは、アナログ保育である。そのため、「99%のアナログ保育、1%のデジタル保育」を、全職員の合言葉にしている。

以下、iPadのアプリを、大きく4種類に分け、紹介する。「iPadタイム」では、絵本アプリ→お楽しみアプリ（映像・音声・知育）の流れで実施している。これらの保育で生か

せるアプリは、全世界で開発されており、その種類の豊富さには驚かされる。

写真⑳㉑㉒ iPadタイム



(1) 絵本アプリ (写真㉓)

驚くようなしかけが満載であり、絵本の世界に飛び込んでいるような錯覚をしてしまう。メリットも多く、何回見ても新品のまま、1冊の値段が、無料～100円、片付け場所に困らない、種類が豊富であることなど、実践すればするほど良さを感じてもらえると思う。

(2) 映像アプリ (写真㉔㉕)

写真、ビデオ、ライブ中継と、映像関係のアプリは、子どもたちの大歓声を引き出すことができる。科学の進歩を感じるアプリが、多数、開発されている。

(3) 音声アプリ (写真㉖)

音声アプリは、4つの種類（英語、音楽、楽器、言葉）に分けられる。特に、英語の発音は効果が高く、まるで、外国人が、その場にいるような感覚で使える。

(4) 知育アプリ (写真㉗)

パズルや言葉遊びなど、各年齢に応じて、楽しみながら頭を働かすアプリが多種多彩である。タブレット機器が開発された影響が大きく、保育の可能性が広がったと感じている。

5. 仮説の検証及び今後のビジョン

アナログ保育とデジタル保育を創造し、11のタイムを保育課程に位置づけ、計画的に実践してきたことで、「子どもたちの笑顔の幅が広がってきた！」と自己評価している。たしかに、楽しい、おもしろいといった感情だけではなく、驚きや好奇心など、興味関心意欲が表情に満ちあふれるようになってきている。このことが、「子どもたちは、遊びながら学び、学びながら遊ぶ」という仮説の検証のひとつであると考えている。遊びと学びを融合

させたいという課題から、アナログ保育とデジタル保育、「未来のアトム創造プロジェクト」を創造し、発達段階に適応した新しい保育が確立できたと思う。この研究は、普及性・発展性・継続性に大きな可能性を感じているので、実践園を増やし、検証のための事例を蓄積し、自己分析だけにならないように尽力したいと思う。そして、アナログ保育からアナログ教育へ、デジタル保育からデジタル教育へと系統的に発展させたいという、壮大なビジョンを持ち続け、研究を深化させていく覚悟である。

6. おわりに (写真⑳㉑)

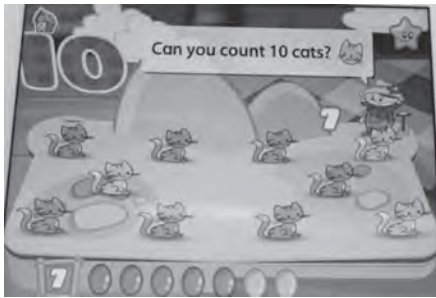
当園オリジナルのデジタル保育とアナログ保育を構想し、保育課程に位置づけ、実践を始めて、ほぼ1年が経過する。この実践で、子どもたちの成長に、大きな成果が得られるという確信も持てるようになった。また、「未来のアトム創造プロジェクト」で、明確な方向性を示したことで、保育園と家庭が連携した子育てを実践できるようになった。迷うことなく、今後も、このプロジェクトの充実発展に全力を注ぎたい。「やさしいね、きっと、アトムになれるよ!」「アトムは運動もがんばるよ!」などの職員の声かけも響くようになった。子どもたちも、アトムポーズを決め、「がんばるぞー」と、大きな声で応えるようになった。きっと、アトムの強さや優しさを意識しながら成長を続けていくと思う。

今日も、人工芝園庭で、♪10万馬力だ〜鉄腕アトム〜♪と、純真な笑顔で口ずさむ子どもたちがいる。イジメ問題が複雑化し、心の教育が問われる現代こそ、「未来のアトム創造プロジェクト」は、保育や教育の分野で、新しい示唆を与えられると考えている。遊びながら学び、学びながら遊ぶ子どもたちに、もっともっと、いろんな世界があることを知らせ、興味関心意欲を大きく育ててあげられる保育園でありたいと思う。今後も、アナログ保育とデジタル保育による、遊びと学びの融合を実践検証できるように、私や職員は、お茶の水博士となり、未来のアトム誕生を夢見ながら研鑽を続けていきたい。

参考図書

「夢いっぱい科学あそび」阿部昌浩 出版社：メイト 1999.2.1

写真⑳㉑㉒㉓㉔ アプリの例



写真㉕㉖ 笑顔でアトムポーズ



(2) 優秀報告賞

〈実践報告部門〉

『『遊びの中で育つもの』

—ドキドキ、わくわく、今日の遊びはなんだろう—

半 田 睦 枝 (秋和保育園・福岡県)

「遊びの中で育つもの」
—ドキドキ、わくわく、今日の遊びはなんだろう—

長野県・秋和保育園 半田 睦枝

I 問題定義と目的

日ごろは豊かな自然の中で四季を肌で感じながら全身で遊ぶことを楽しんでいる。室内では異年齢の仲間との遊びを通し心の育ちを大切に様々な遊びを取り入れ活動をしている。しかし、遊びの中で聞こえてくる会話を注意深く聞いてみるとゲームに登場するキャラクターや場面が遊びにつながっている事に気づいた。日常の何気ない遊びが自然に密着することや、子どもながらの発想力によるものではなく、映像や造られたものからくるイメージの展開の中での遊びを目にする。これらの状況を捉え現状を把握し自ら考え、発想遊び力のある子どもの育ち、幼児の遊びから学ぶ重要な手がかりを探るためにこのテーマを設定した。

ゲームをするな、テレビを見るなど極論をいうのではなく、時代の中でそれらとどううまくつきあっていくかを考える事が親、保育者、大人のすべきことではないか。そもそも遊びとは何か、その意味を考察するために原点に返ることから始める必要があると考えた。毎日の生活の経験からの遊具のない遊びから、手作りおもちゃ作り、親子の遊び、個の遊び、少人数のグループ遊び、グループ遊びでの発見、ドキドキ、わくわく、イメージの共有、みんなで！と子ども達の遊びの変化、生活の変化に至るまでの取り組みを記録した。

1. 現状把握

①概要

長野県上田市の山々に囲まれた自然豊かな環境の中で開園された当保育園では延長保育、一時保育、子育て支援事業、など地域に密着した施設として運営されると共に、様々な地域から登園し仕事の都合により早朝または夕方延長を利用する様々な年齢の子どもたちが異年齢交流を通じて育ち合う遊びの環境がある。

②クラス運営

年長組 5 歳児（計28名、男児 9 名、女児19名） 2 人担任

③子どもの姿

- 1) 「〇〇にやっつけられて…」 「死んだけどまたすぐ生き返った」「ソフトにいるやつらはすぐに生き返るよ」「生き返らせるのかんちんだよ（簡単だよ）」。会話のみならず、遊びの場面でも相手に対して攻撃的であり、物を壊しても何も感じない、痛みを感じない、そんな子ども達の姿に違和感と危機感を持ち、子ども達と今何をすることが必要なのかとクラスで話し合った。
- 2) 鬼ごっこ、こおり鬼で遊びたいと数人の子どもたちが保育者に向けより遊びが始まるが遊びが続かない。ふと周囲を見ると何となく走り回っている、何を選択したらよいか遊びに入れない子の姿が見られ、遊びに意欲のない子どもたちの現状が明らかになった。また、保育者が関わると遊ぶことができるが、子どもたちのつながりの弱さはどこにあるのかと要因を探ることとした。

2. 調査期間と研究方法

①調査期間

平成23年2月から平成24年11月

②研究方法

1) アンケート調査（平成23年2月）

家庭のゲーム保有率、テレビ視聴率（時間）、アンケート記入後振り返りの意見、今後取り組みたいこと等の家庭の意識調査を行う。この調査をもとに保育者が遊びの現状把握をすすめた。

考察については別紙参照。

2) 遊びの様子記録

遊びや活動の場面での子どもの様子ややりとりを、あくまでも保育者は会話の中でヒントを与える関わりを心がけ、子どもの気づき、考える力を育てる遊びのパートナーである基本的な姿勢を持ち、記録しまとめた。

3. 事例検討と考察

『事例1』園庭にて

固定遊具を使用せず、「遊ぼう」と話す。「その他のおもちゃもなしだよ！」と話す。「えー？」と反応。しばし言葉がない。数秒後…数人の子が走り回る、それに続けと半数の子が一斉に走り出した。それでも動けずそれを見ている子が、2、3周走り込んだ後、後に続けと動き出す。全員で走り出した時、「ねえ、先生リレーやろう」「お友達にそう言ってみれば」①「よっしゃ」「みんな、リレーやろう」、呆然と立ちすくんでいた子ども達がようやく②自分達なりに自発的に遊びを始める。遊びに意欲のない、選択できなかった子も他児の遊びに引き込まれるようにクラスほとんどの子がリレーを楽しむ。③

始めは何となく始めたリレーもチームのメンバーをバランスよく入れ替えたり、走る順番の工夫を考えたり、全員で話し合い始める。年長児の遊ぶ姿を見て年中（4歳児）が「いれて」と仲間に入る。④年中児に「いいよ」「じゃあここ、おいで」「一緒にやろう」と会話が聞かれる。

①遊びのリーダー的存在が出現 ②遊びの目的が明確であると遊びに不安を持たずに参加できるタイプの子の姿が読み取れる ③保育者の提案から自発的に楽しもうとし遊びの工夫（気づき、考える）をする子の出現 ④異年齢の関わり、遊びの共有
〈考察〉

遊びにはリーダー的な存在が時に必要であることがわかった。

『事例2』水遊び

子ども達は砂遊びに夢中になる。個の砂遊びが集団化して大きな池と、水のながれる道ができあがった。トンネル、大きな山をつくって「みてみて」と大歓声を上げている。保育者が、バケツにたくさんの水を入れ園庭に置く。バケツ脇に2本の竹。①「せんせいこれなに？」不思議そうな顔、「バケツに…」「なんだこれ」「……」興味はあるがなんだかわからない、竹を手に取り、「これ穴が開いてる、だめだよ、水を入れてもこぼれちゃう」それを見ていた男児、「これ、みずでっぼうだよ」「なにそれ？」保育者「正解、竹のみずでっぼうだよ、みんなのおじいちゃんおばあちゃんのその昔から遊んでいたおもちゃだよ」②子ども「やりたい！」先生も遊んでみたくて作ったんだけど」と紹介した。初めて出会うおもちゃに笑顔と驚きと大歓声わきあがった。

たけみずでっぼう【1】

③翌日、「みずでっぼうやる？」「おはよう」の挨拶もそこそこに登園。「昨日の続きやろう」と子どもに囲まれた。「今日は自分でやりたい」と自分達でバケツの水くみを始めた。④竹の感触に「つるつるして持てない」「重い」となかなかうまくいかず「もういい」「もうやんない」「すべりだいやってくる」とあきらめる子、交代することができず⑤「一回やったら交代だよ」とトラブルになる子と気持ちのぶつかり合いが起こり一つのみずでっぼうをめぐる様々な子どもの姿現れた。保育者はこれをしばらく見守った後に竹のつくりを分解して見せた。⑥水が飛び出る仕組みを話している間に、ポンプ側の布が取れて水が出なくなる様子に疑問を思い、仕組みについて考えはじめている。どうしたら遠くに水がこぼれずに飛ばせるだろうと顔つきが変わっていった。

たけみずでっぼう【2】

翌々日、「早く、先生に来て！」水をたくさん入れたバケツを重そうに二人の子どもが運ぶ。大きな声で叫ぶ。「お待ちせしました」と着いた先には長蛇の列。⑦順番を待つ子どもたち。昨日とは、空気が違った。「こっちだよ」と手を挙げた先には、的役の子、思わず保育者も的に、「1点」「やった、3点」「私ね9点も取れたよ」「笑いながら、的になっていっぱい当たったよ」的役、打ち手、交代を自然にしながら⑧自分達でゲームルールも考え遊びを発展していく。ワイワイ遊んでいると年中、年少組の子、「やりたいな」

「入れて」「いいよ、一緒にやろう」「ここに並んで」、でもどうやってもできない年中児、⑨そっと手を添える年長児、今まで自分が楽しければという気持ちばかりが見られた子どもの気持ちの変化、育ちが見られた瞬間であった。

①見慣れないおもちゃへの興味の芽生え ②意欲 ③今日は何をしようと目的を明確にしての登園 ④未経験によるあきらめ放棄 ⑤自己中心的な遊び方 ⑥仕組みや成り立ちの研究心、次への意欲の芽生え ⑦「いっしょにあそぼう」と他を意識する ⑧遊びの発展、意見のやり取り、受容と共感 ⑨心の育ち

〈考察〉

事例2の中で、与えられたおもちゃが当たり前前に遊ぶことのできるおもちゃでないことに気づき、子ども達の興味関心の強さが明確になる、また、引く力、押す力、傾き、自分でバランスをとり飛ばすなど、活動に対しての行動の変化がはっきりとみられた。

みずでっぼうはあえて1本のみとして、それを巡っての子どもたちのやりとりや遊びの姿を追った。人数の割に一つのおもちゃだけで環境を設定するには疑問点もあるがそれを巡っての活動の中で育つもの、そうでないものを客観的に見ることを目的とした。結果、みずでっぼうの取り合い、自分のことばかり考えていた姿は一度も見られなかった。一つのみずでっぼうを巡り、遊びの広がり、人との関わり、他を思う心の育ちが随所に見られた。個ではなく集団での遊びに変化し、たった一つのおもちゃから遊び方だけでなく、心の育ち、相手を思う気持ち、それぞれの立場で何をしたらいいのかを考える力が少しずつ身に付き始めたことを実感した。

『事例3』 みんなでつくろう

「このみずでっぼう。①自分たちで作って一人1つ欲しいよ。」

「でもね…、こんなの作れないんじゃないかな」「こんなのかんたんだよ」「えー?」「どうしよう」さあ困ったと子ども達が話している。「そうだね、竹もないし、のこぎりだつて使えないね」そんな会話が続く。「そうか」「何?」「今度、お母さんたち、保育園にくるって言っていたよ」「じゃ、その時作れば」と保育参観の予定に気づく子がいる。「先生いい?」保育者「でも、どうしたらいいんだろう、やりたいこと、みんながそう感じた事ならいいかも」②「園長先生に聞いてみよう」保育者「そうだね、園長先生に自分で聞いてみたら」保育者が言い終わる間もなく事務室へ。「先生いって、園長先生お母さんに出来るか聞いてごらんだって」「でも、何を作るかは秘密…なんだよね」③自分がやりたいこと発見、わくわくする。④材料、道具、何が必要かを考える。

①自分のおもちゃを研究して作りたい、おもちゃ作りの研究心と自分の物をという意識の芽生え ②行動を起こす時にどうしていけばいいのか、社会の中での自分の確認 ③創造への意欲、目的（したいことの明確化） ④材料の選択

〈考察〉

研究心からの「作ってみたい」「自分のものがあつたらいいな」という気持ちの芽生えが強く感じられた。自発的に「～したい」と目を輝かせて気持ちを伝える子どもたちの姿を目の当たりにして今保育者が何をするのか保育者自身も自分の動きを見直した。是非みずでっぼう作りをやり遂げたいと保育者同士で話しあい、保育者の自宅にある竹やぶから大小様々な竹を切り出しに行くことにした。

『事例4』 参観日「みずでっぼうづくり」

晴天（日よけメッシュテントを園庭に張り製作準備をする。）

①「先生今日暑いよ、何、作るんです?」「やったことないし、ダメだよ、先生困った」とお母さん方。平日のため参加はほとんどお母さんで、のこぎりも持ったことがないと始めから弱気であった。数人のお父さんはやる気満々。おばあちゃんの参加もありスタートした。汗だくになって製作、子ども達も真剣に取り組む。太さの違う竹を親子で吟味する、真剣なまなざしで竹に向かっていた。②「ここ押さえて」「これくらい?」「よっしゃ」「いいな、これで」「僕が、私が運んでくるよ」と親子の会話が聞かれる。

①経験不足からの不安、暑い中での作業に始めから意欲のない親の姿 ②お互いの意見を出し合う場面、意見のぶるかり合い。

〈考察〉

同じ目的に向かう親子の関わり、話し合う経験ができた。参観日の活動のお知らせにのこぎりが持ち物にありそれだけでも不安であったようである。使ったことのないもの、経験のないこと、自信のないものは何だか意欲が湧かない、まるで今の年長児の姿と一致。この意欲の無さが子どもたちの育ちにも関わっているのではないかと推測した。子どもを取り巻く大人たちの姿をもう一度見直す事、それを保育者がどう援助していくことが必要か、今後の課題ともいえる。



『事例5』できあがって

用意した的にいざ発射…あれ??なかなか当たらず悪戦苦闘。布の巻き方、穴の調節に何度も挑戦。活動が終わっても…納得がいかない、飛ばずに泣き出す子、出来上がりに満足せず不機嫌なおうちの方。うまく出来、的に当たり大喜びする家族もいれば、うまく出来なかった親子に対しての気持ちをくみ喜びを露わに出来ない親子、しばらく重い空気が…その場に漂った。

保育者から

『今日、みなさんに何を経験していただきたかったかというと、成功体験ではないのです。既製の材料でなく始めから作り上げる難しさ、子どもさんと考える時間の大切さ、作り上げる喜び、できない時の悔しさを体験してほしかったのです。現在は物に恵まれ、できたもので遊ぶ、遊ぶことに苦労しない、バーチャル世界でリセットしたら元に戻る、工夫や考えなくても遊ぶことのできる世の中です。保育者もちろんその世の中で生活しています。成功した3人の子どもさんに発表していただいた時、作れなかった子どもがいるのになんてことをするのだという声も聞こえてきました。出来ないことがいけないことでしょうか?そこから先を考えてみて欲しいのです。出来た見本を目標に次に進める強さを子どもさんに育てて欲しいのです。もちろん私たちもそうなりたいと思っています。その強さはこれから将来、子どもさんの宝になると思います。

〈考察〉

事例5からは苦悩する親子の包み隠さない本来の気持ちや姿が浮き彫りになった。保育者に向ける疑問の眼差しが一転、静かにうなづく姿になり印象的であった。結果が可、否で判断するだけでなくそれらのプロセスや背景にあるものに目を向け、現実をとらえながら今後どう育ち合うかを今のそれぞれの子どもの成長、発達を促すことの重要性に保護者、保育者が気づいた。



『事例6』 保護者の心の変化 その日の帰り（参観日終了後）

「先生、竹ちょうだい！」振り向くと余った竹に保護者の輪が出来た。「こんなの簡単
って思ってやってみたら出来なくて、悔しいから持ち帰って家で子どもと旦那で作ら
いんだよ」「兄弟の分もちょうだい」「リベンジ、今は出来なくても、次は研究してくるよ」
手に手に竹を抱えて帰る姿が印象的であった。後日、「おじいちゃん達が意地になっ
てあれや、これやって飛んだよ！先生！」「飛ぶようになったよ、パパが作ってくれた」「失
敗しちゃったからもう一本ちょうだい」それぞれに近況報告が何日も続いた。

保育園では…毎日出来上がったみずでっぼうで歓声を上げて遊ぶ姿があった。

〈考察〉

挑戦の気持ちの芽生え。関係するすべての家族が共有する意味。このおもちゃを巡って
新たな親の心の変化があり、それが子どもの生活にも変化をもたらした。そして一言。「先
生の最後の話、その通りだね」と母より保育者への感想が向けられた。このことから家庭
での生活との連続性を感じ取ることが出来た。

『事例7』 新たなおもちゃ昔のおもちゃ…竹とんぼ（祖父母参観日）

遊びの達人登場（理事長先生）

竹に興味を持った子どもたちが、「竹でできたおもちゃは他には何だろう」と話がはず
んだ、用意しておいた本物の竹とんぼを保育者が飛ばして見せた。「いいな」「やらせて」
興味津々。「先生これ、作ったらどう？」「今度ばあちゃん保育園に来るんだよね」「おじ
いちゃん、おばあちゃんと一緒に作りたいな」「そうだ」「いいね」①「…でもカッター使
えないね…残念。何か使って作れないかな。」身近な材料で考える。②牛乳パック、スト
ローを廃材コーナーで発見。参観日当日、和やかな雰囲気の中制作が進んだ。③おじい
ちゃん、おばあちゃん達も懐かしい遊びを思い出しながら「これは簡単」と大喜び。身
近な素材ででき出来上がったストロートンボは大人気であった。

昔のおもちゃについて子どもたちの興味が広がる中、秋の遠足にでかけた。行き先は
上田城址公園、上田城の歴史を知らながら今昔を実際に目にしてお堀の周りをひとまわ
りする。その後、保育者は昔のおもちゃを各場所に置き宝探しゲームの活動を設定した。
④子どもたちは昔のおもちゃを木の陰や、土蔵の裏、石垣から発見する。「どうしてここ
に？」と不思議に思いながら。ビー玉、おはじき、紙風船、ベーゴマ、竹とんぼ、⑤な
どのおもちゃ？！「このおもちゃは何？」どうしてもわからないおもちゃを手を持ち帰る、
保育園で謎解きをした。発見現場に添えられた手紙には「ひっくりかえしてあそぶんじ
ゃよ」とヒントがあり、それをもとに来る日も来る日も「なんだろう」と話す子どもたち。
でもどうしてもわからない。「かるたにしか見えないんだけど…」数週間が経った。⑥遊
びの達人（理事長先生）登場。名前、遊び方を伝授していただいた。『めんこ（ぱっちゃん）』
と知り理事長先生の姿を見ては「すげーほんとに理事長先生、遊びの達人だ」と取り囲
んで遊んでいた。

①研究、探究心の広がり ②相談、意見交換 ③幅広い世代の交流からの学びと喜びの共有 ④わくわく、不思議体験 ⑤考える力、探究心 ⑥憧れと尊敬
〈考察〉

園外での予期しない出来事に心を踊らせ何気なく歩いていた子も発見することに夢中になり、遠足は楽しいものとなり、遠足行事だけでなくその後の活動に連続することとなった。また、祖父母参観では父母参観の親子の関わりではあまり見られなかった微笑ましいやり取り、優しく見守る眼差し、同じ目線で心から遊び込む祖父母の姿に大きな力を感じる保育者2人であった。ここにも遊び力をつける上での大きなヒントがあると考えた。このことから環境を変えることは遊びの中で大きな育ちにつながる要因であると言えるであろう。また、人が自分にはない力を持ち合わせていることを知るにより広く人を見る力が備わり、尊敬する気持ちやそうになりたいという目標も明確になり生きる力につながっていくことを確信した。現在、むかしのおもちゃの遊びと並行して活動を進めているおもちゃの国の王様との交流（空想の世界）は、イメージ力を育て現年齢でしかできない発想を用いて、物語の構成、絵画構成に役立っている。今後もこの二つの活動を深め総合的な育ちを促していきたい。



4. 事例研究から読み取れる考えられる遊び力の弱さ

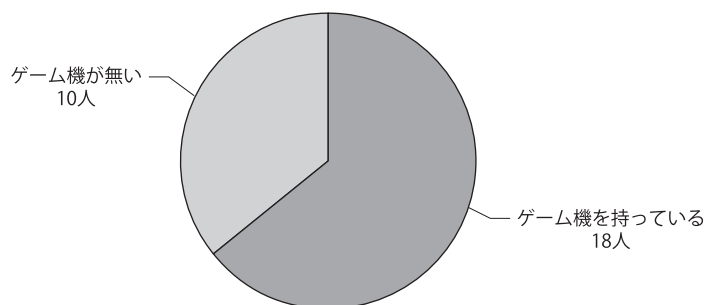
1. 経験不足による自信の無さ (事例1)
2. 遊びの偏り、遊びの範囲の狭さ (事例2)
3. 自ら生きようとする力の弱さ (事例3、4)
4. 整ったおもちゃの豊かさ (事例4、5、6)
5. 親子関係からくるもの (事例4、5)
6. 核家族化による遊びの伝承の不足 (事例7)

II まとめの考察

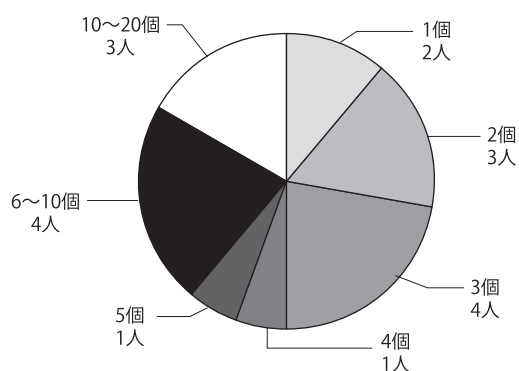
与えられた遊び、既存の遊びの中での楽しみ方から、本来持つ子どもの遊び力の低下を感じこれらをどう捉え、遊びを充実し発見、工夫、毎日ドキドキ、わくわくした生活をどのようにしていったら送れるのだろうかと考えた。遊びの原点に戻り、おもちゃのない遊びから、既製のおもちゃを少数使って遊ぶ。手作りのおもちゃを自ら工夫し、考えて作り上げること、様々な世代の人と関わり、遊びを肌で感じる。これらの経験から遊び力が確実に身についてきていると考える。現在、給食の時間にテレビゲームの話題で食事が進まない子も今ではまったくゲームの話をしなくなり会話はその日の遊びの内容が盛り込まれるようになった。戦隊ものになりきり遊ぶ子もまだいるものの、相手をむやみに攻撃することや自分だけが強いんだという意識は少なくなったように感じた。相手のことを思いやり譲ったり意見を聞きあったりする姿もたくさん見られるようになった。物の大切さ、命の大切さ、発見すること、イメージすること、共有すること、協力すること、分かちあう事、少しずつではあるが確実に力をつけて成長をしていることを感じる。今回の研究から読み取れるものをとらえ、信頼関係から発生する安心する環境の中でおもしろいと思える遊びとの出会い、遊びを通して味わう満足感、やってみようの意欲につながる次への思い、地域社会のつながりを（周囲の大人力をいただき）深め、自ら考え発見のある生活を充実させることが遊び力の弱さを強さに変えていけるものと信じた。この研究を通して遊びの持つ意味、遊びから育つものが未知数あることが明らかになった。今後も遊びの広がりが子どもの育ちにつながることを願う。

〈別紙〉 アンケート集計

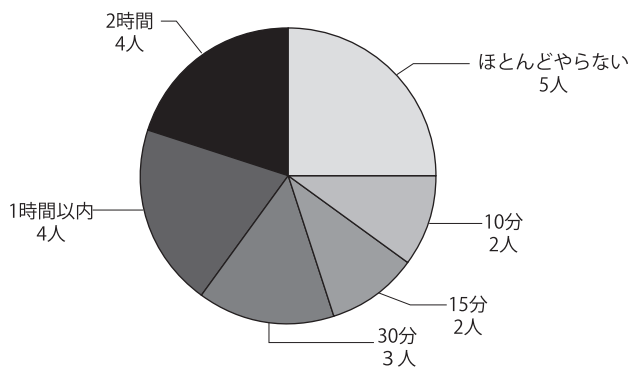
ゲーム所持者数



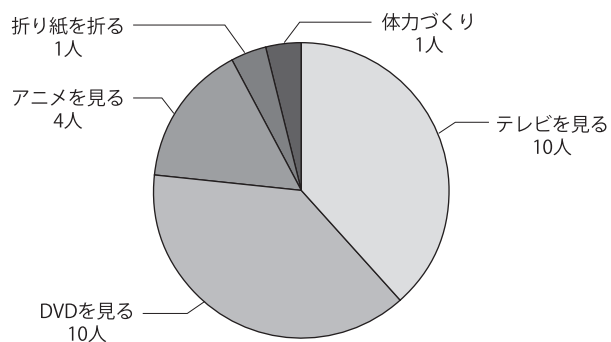
ゲームソフトの所持数



ゲーム使用時間



ゲーム機のない家庭の過ごし方



- ① ゲームには関心はないが、パソコン、携帯に興味があり、テレビ、DVDをかなり見たがる。時間を決めてやめさせている。
- ② DVDの視聴時間をしっかりと決めている。
- ③ ルールの徹底。
- ④ 会話を大切にしたいのでゲームを持たせない。しかし親が所持しているので矛盾を感じている。
- ⑤ 戦いのあるシーンは見せたくない、楽しく、明るい番組を選んでいる。

保護者の思い

- ① 時間を決めて、やるべきことをやってから好きなことをするように気をつけたい。
- ② 普段何気なくテレビをつけていますが、以前ノーメディアデーをしたとき会話が弾みすごくよかったのでたまにはテレビを一日中つけない日があってもいいなと思うが、いつものくせで実行できません、家族の会話を楽しみたいと思います。
- ③ 子どもがテレビを見ないでいるのは簡単ですが、親の私たちが難しいと感じた。ラジオに変えてみようかと思っています。
- ④ 目が悪くなると困るので長時間見せないよう時間制限を考えます。
- ⑤ テレビ番組はできるだけ子どもの好きなものより興味をわかせる動物や乗り物系を見せた方がいいのかと考えています。
- ⑥ ゲームやテレビ視聴よりもお絵かきや折り紙をして楽しんでいます。
- ⑦ 休日は体力づくりでマラソンをしています。父親がマラソン競技参加を楽しみにしているので一緒にしています。

〈考察〉

28世帯の家庭で調査 ゲーム所持の状況が見えた。ゲームソフトの数の多さ、テレビ視聴の多さがはっきりした。子どものみならず、親がそれらを使用しての生活がアンケートよりうかがえた。家庭での遊びの見直しに、保育園での遊びをヒントにしていただけたらとも考えた。

(3) 実践奨励賞

〈実践報告部門〉

「感染症対策委員会を立ち上げて」

向井敦子（宮園保育園・東京都）

『『エピソード記述』を通しての保育の質の向上の経過』

石田幸美（菜の花保育園・山梨県）

「アゲハ蝶の飼育・観察から劇あそびへ」

中屋裕子（浪花保育園・福井県）

「おむつはずしについて考える

～子どものペースに合わせたおむつはずしのチャンス～」

小倉裕子（建昌保育園・鹿児島県）

「感染症対策委員会を立ち上げて」

東京都・宮園保育園 向井 敦子

保育園での感染症は、集団生活をしている乳幼児の健康を守るため軽視できないものです。日々進化する感染症状況に、すみやかに対応してきたつもりですが、感染症の対策をするたびに看護師と保育士の間「感染症」は看護師の仕事!!と線引きされているような違和感を感じていました。

例えば、宮園保育園には、嘔吐の対応として、嘔吐処理セットというものがあり、セットのなかには処理に必要なものが一式入っているのですが、嘔吐した子どもが一人もいないのに、別の事に使ったようで、セットの中のビニール袋がなくなっていたり、マスクがなかったりしていました。いざ、嘔吐処理に使う時に必要なものがなければ、それだけでどれだけ汚染区域を広げることになるかと考えると、危機感のなさを感じますし、手洗いなどの指導も普段子どもと関わりが深い保育士のほうから情報をもらって、それにあった指導をしたいのに、事前の内容確認もなく時間さえ10分でおねがいします。という状態で、「私がやりたいから時間をさいてもらった」という感じになってしまっていました。もちろん、保育士たちもそんなつもりはなく、看護師の仕事にどこまで関わっていいのか、手や口をだしていいのか、わからないのだと思います。

それでも、感染症の取り組みとは、集団生活の保育園ではとても大切なことですし、看護師1人で感染症予防をして、全ての子ども健康を守るのは難しいことです。手洗い指導1つとっても「その場だけの楽しい会」ではなくて、前後の関わりが重要で、その前後の関わりが充実するためには、職員が感染症に対してどれだけ興味をもっているか?が大切です。自分たちが子供を感染症から守っていくという意識があれば、職種関係なく皆が同じ気持ちで取り組めるし、さらに共通認識をもって子どもと接することで、継続した手洗い指導になると考えています。

今の体制を変えなければ、いつまでたっても「これは、看護師の仕事」のままになってしまいます。職員の意識改革になにかいい案はないか…と考えていた時、「感染症対策委員」という言葉を知りました。言葉しか聞いていないのでどんな活動をすればいいのかわからないまま、委員会活動にする事で一人ひとりが、自覚をもって感染症対策に取り組むので

はないか!!)と思い、職員の意識向上につながることを目標に「感染症対策委員」を立ち上げ、今年で3年目になりました。1年交代で、職種関係なく4名が関わります。

この3年間の活動の中で少しずつ職員や子ども達の意識に変化がみられてきました。

委員会活動のポイントは「現場の声を聞き逃さない」という事にあります。

例えば「子どもが手を洗わなくて困ってます」という声があがれば、まずは理由を探ります。

冬で水が冷たいから？　じゃあ、歌が1曲おわるまで手洗いするように歌を作ろうか？　だったり、早く遊びたくて面倒だから？　じゃあ、楽しみにできるように、石鹸を作って自分の作った石鹸で手洗いするようにしようか？というように考えていきます。

私一人でやるのは簡単ですが、色々なアイデアがでてくるのが委員会のいい所です。各クラスの状況と年齢にあった指導を考えられます。

何かをしたり、作ったりするだけが役割でなく、そこにたどり着くまでに色々な発想で考えて、今の子どもたちに一番ベストな方法を、職員、子どもに様々な手段で伝えるようにしています。

ここで、今まで感染症対策委員でしてきた取り組みのいくつかを紹介します。

1. 嘔吐処理の最後、手袋をはずす時にどれだけ手が汚染されるか？の実験

職員には嘔吐処理の練習とだけ伝え、対策委員が1対1についてチェックします。嘔吐物に手洗いチェッカーを混ぜておき、嘔吐処理が終了したら場所を変えて、ブラックライトで手についた汚れを見てみる。という抜き打ち実験です。皆、手に付いた汚れに驚きが隠せないようでした。



2. 子どもと一緒に石鹸を作り自分の作った石鹸を使った手洗い指導

好きな香り、形の石鹸ができると、手洗いも楽しくできるようです。石鹸は、年齢やクラスの状況を見て難易度を決めています。



3. 手洗い、うがい、エチケットなどの劇

一番対策委員が力を発揮してくれる所です。子どもに分かりやすく、今の子どもに一番

伝えたい内容を様々なアイデアで考えてくれます。

宮園では、対策委員の4人だけでなく、あえて可能な限りの職員を巻き込んで劇などしています。

例えば、今年度のエチケットマンという劇では、係以外にピアノが得意な先生に手洗いの歌の楽譜を作って、ピアノを弾いて貰ったり、事務・主任にはビデオ・写真を撮ってもらい、幼児担任は全員参加で質問に答えて貰ったりしました。



これは、活動した内容をその日だけの楽しい会で終わらせないで、日々の生活でも全職員が共通認識をもって広げてもらいたいという思いからです。

4. 用務に作ってもらったうがい用教材を使ったうがい指導



5. 衛生チェック表

0歳、1・2歳、幼児と内容の違うものが3冊ありますので、感染症対策委員が中心となって、週1回チェックしています。振り返りができて、気がひきしまる。という意見がありました。

6. おむつ交換マニュアル作り

法人マニュアルはあるものの、冊子をわざわざ開いて見る人はいないこと、宮園の設備とは細かい部分で違いがある為、感染症対策委員で関わって、誰が見てもわかる各クラスのマニュアルを作成しました。

まずは、各クラスにおろして今の手順を書いてもらい、その後クラスで話し合いをしてもらいました。どのタイミングで手袋をしてる？など実際におむつ交換をしている現場の声を書き出してもらい、足りない物があれば必要物品に加えたりして、最終的には、感染症委員がチェックしてまとめます。職員を巻き込んで行なう作業は、作る過程を経ることによって、感染症に対する視点が身についたり、意識を高めたりできるので、他のマニュアルにも挑戦してみたいと思っています。

7. 驚いたことに、こんなこともありました。

23年10月朝の自由遊びの時間、保健室に指導用においてあったバイ菌のカードで5歳児が遊んでいました。

様子を見てみると、カードを持って「うがいをしないからバイ菌がのどに入るぞ…」などやりとりしているので、そっきょうで子どもが考える劇を自分たちで発表する会をしました。私は口出しせず、発表するための交渉とだんどりだけしてあげました。好き嫌いでご飯を食べずにねていたら、バイ菌がやって来て熱がでてしまいました。病院で注射したら熱は下がったけど、これからはちゃんとご飯を食べます。という3分くらいの短い劇ですが、一生懸命考えて、喧嘩しながら役を決めての発表でした。ただ、バイ菌で遊んでいるだけで終わらせるのではなく、子ども達目線での感染症対策ができたことは他児や担任にもいい影響をあたえました。感染症対策の活動も、何かをしなければ!!と考えるばかりではなく、日々の生活の中で子どもや職員が興味を示している瞬間を見逃さず、チャンスを作ってあげたり、色々な視点で指導につなげることも大切なのだと実感した1日でした。



そして、24年度7月になり職員から3、4歳児の手洗いについて声があがりました。

石鹸をつけて流すだけだったり、水で遊ぶ、など適当に形だけの手洗いをしている子どもが目立つので困っているとのこと。職員からは、毎回毎回手洗いするように言われているのですが、あまり心に響いていないようです。

そこで、子ども目線の指導ができれば、3、4歳児も手洗いに興味をもってくれるのではないか?と思い、感染症対策委員の活動としてまずは、5歳児すみれ組に相談することからはじめました。

7月30日「たんぼぼ組さんをつくし組さんが、最近手洗いをちゃんとしてくれなくて困ってるんだけど、すみれ組さんから教えてもらった方がやる気できるかな…」

即、「いいよ!」の声がでて、検討の結果、劇をすることが決定し、8人がやってみたい!と手を上げました

8月に入りすぐ劇の準備を始めたのですが、夏休みのためなかなか8人集まらず、全員揃ったのは8月後半でした。それまでの間登園していた人数で劇の内容を決め、衣装作り、背景作り、台本作りまで全て子ども達だけで行い、私は担任と時間の交渉だけしました。夏は子ども達の大好きなプール遊びもあるため、劇をする子どもの負担にならないように、可能な限り毎日、朝の15~20分又は夕方に練習をすることにしました。

どんな話にする?

「女の子がお腹痛くなって、注射して治る話がいい!」「Tちゃんマン(T君)がバイキ

ンをやっつける話がいい!」「バイキンの女王様の話にしたい!!」

まずは、やりたい事を自由に出し合ったところ、次々に意見がでてきます。「これでは、まとまらないかな?」と思って見ていると、バラバラとでた案を皆が納得するように、希望を全部入れて内容を作りあげたのです。「字を書くのは時間がかかるから、先生がかいてね」と言いながら、全員納得のいく劇の内容ができました。やりたい事が決まっていたので、配役もスムーズに決まりました。

簡単な内容（実際の劇の写真を使って紹介します）



宮園幼稚園のRちゃんは、手洗いをしないで
おやつを食べました。その日の夕方、お迎えに
来たママと帰る途中でお腹が痛くなります。
ママと病院に行き、注射をしてもらって家に
帰りました。



パパが会社から帰ってきました。
ママからRちゃんの病気の話聞いたパパは、
Rちゃんを病気から守る為に、Tちゃんマンに
変身することにしました。



Tちゃんマン着替え中！登場曲を歌って踊り、
「Tちゃんマーン！！」の合図を送ると…

「Rちゃんをいじめてるのは、どこの
どいつだ！パパがゆるさないぞ!!」
とTちゃんマンかっこよく登場します。



そこで、Rちゃんのお腹の中にいたバイキンの
女王様とバイキン達が「Rちゃんのお腹の中で
暴れまくるぞ〜！！」と歌いながら登場します。



バイキン達対Tちゃんマンの戦い。
バイキン達はTちゃんマンのあまりの
強さに、走って逃げて行きました。



次の日、幼稚園でRちゃんはきちんと手を洗っています。先生がみんなに、
Rちゃんがお腹が痛くなった話をして、手洗いの大切さを伝えてくれます。
そして、最後に新しく自分達で作った手洗いの歌・うがいの歌を歌
って踊ります。

内容が決まると幼稚園の先生役が決まっていなかったことに気が付いた子ども達。迷うこと
なく「これはすみれ組の劇だよ！すみれ組の担任が劇にでないのはおかしいと思う」と声
があがり全員一致ですみれ組の担任も劇に参加することになりました。

衣装作り～自分の衣装は自分で作ろう～

子どもが必要といった材料を揃えてあげると、自分の衣装は自分で作ると意欲的な子ども達。そのあと、場面毎に必要なものを考えて作ることにしました。パパ役のT君はネクタイ、バイキン役の子ども達は新聞紙を細く丸めて触覚と槍を作り、看護師役の子どもは白色の画用紙を切ってナースキャップを作りました。ママ役の子は、保育園にあるおままごとのコーナーからスカートとエプロンを持って来て、「私はこれでいい」と言って他の子の衣装作りを手伝ったり、背景作りをして、2日で衣装を作りあげました。

そして練習

8人全員が揃ったのは8月後半になってからでしたが、それまでは、お互いの台詞をカバーしたり、夏休み明けで初めて劇に参加するメンバーには事前に内容や台詞を教えておいてくれたり、劇のメンバーという自覚がはっきりと伝わりました。練習を始めたころは、バイキン役の子ども達は恥ずかしくてモジモジしてしまい台詞がはっきりいえませんでした。練習を見ていた先生から「台詞を歌にしたらどう？」とアドバイスをもらい、子ども達のアイデアでバイキンの台詞をアンパンマンの曲にのせて替え歌にして、踊りも自分達で考えたところ、自分で考えた！という自信もでたようで、元気に歌って踊る堂々としたバイキン役になりました。その後「Tちゃんマンの登場も歌と踊りがいい」とか、セットが変わる時自分達がわかりやすいように工夫をしたり、日を重ねるたびに一つトラブルがでて、自分達で解決することを繰り返すたびに子ども達だけで考えたとは思えないほどの劇が完成しました。

そして、忘れてはいけないのは、この活動を通して職員の関心に変化が見られてきたことです。今までなら（看護師と子どもが何かしてるみたいだけど、何をしてるのかはわからない）という職員もいたと思います。今回は劇の子ども達に声をかけてくれたり、練習を交代で見に来てアドバイスをくれたりして応援してくれました。それが励みになり子ども達はさらに意欲的になります。

職員一人ひとりが、今年の感染症対策はどんなことをするんだろう！と活動に興味を持ち、協力体制も十分となったことで、劇の子ども達だけではなく、園全体で感染症対策に取り組んでいるという実感がありました。

子ども達は家庭でも劇の話をしているようで保護者からも「劇せっかく頑張っているからやらせてあげたい。当日休ませないようにするので日程を教えてください」という電話を頂いたり「家でもバイキンのダンス練習してます。」という話もありました。普段看護師から保護者への感染症対策は、ほけんだよりや保護者会など限られた中での発信が多いのですが、子どもから親へ伝わる感染症対策はタイムリーに直接伝わるので、家族の興味や関心を得られることに改めて気付きました。

9月11日を劇の発表日に決定

9月に入り、自信がつくと共に練習が楽しくて「今日は何時に練習する?」「早く練習しよう!」と自分達から誘いにきます。いよいよ劇前日、感染症対策委員としてすみれ組19人と今回の劇について話をしました。「今回の劇の初めのあいさつは、これからすみれ組の劇が始まります。」という言葉です。劇のメンバーで練習しているのは8人だけど、すみれ組の皆の劇という意味です。全員が参加者なんだよ!劇に皆の代表でているお友達はとても頑張っています。先生は、劇にでていないお友達にもできることがあると思います。どう思う?」と問いかけると「手洗いを教えてあげる」「劇のとき座ってちゃんと見てくれるように声をかける」など、心強い声があがりました。

発表当日

子ども達はいつからか自分達でやり始めた円陣を組んで「頑張ろうね!エイ・エイオー!」と調子をあげて舞台上に登場しました。こちらの予想以上に伸び伸びと劇をこなす子ども達。そして劇の途中、話声がどこかから聞こえると「ちゃんと見て」と声をかけるすみれ組さん。優しく見守る職員達。皆で3・4歳児の子ども達に手洗いを教えて、小さい子ども達を感染症から守ろうとしている気持ちが伝わり、暖かい気持ちになりました。

劇終了後

その場だけの楽しい劇で終わらないように、3・4歳児が手洗いをする時に、すみれ組さんが2名自主的に手洗い場の横に立ち、手洗いを見てくれます。大人が見ている時より厳しく「水だしすぎ!」など注意したりしながら手洗いを教えてくれます。

また、4歳クラスの男の子たちからは「あんな風に手洗いのやつやってみたいな」「すみれさんになったらできるかな?」とうれしい声が聴かれました。これも次へのステップとなります。

劇から1ヶ月過ぎ

感染症対策委員として、再度すみれ組と話をしました。「劇が終わってからずっとたんぽぽさんとつくしさんの手洗いをみてくれてるけど、ちゃんと洗えてるみたい?」と聞くと「水をだしすぎる」「うがいをしていないのに、したって言う」「適当に洗ってる」「石鹸つけない」など次々に注意したという話がでてきました。

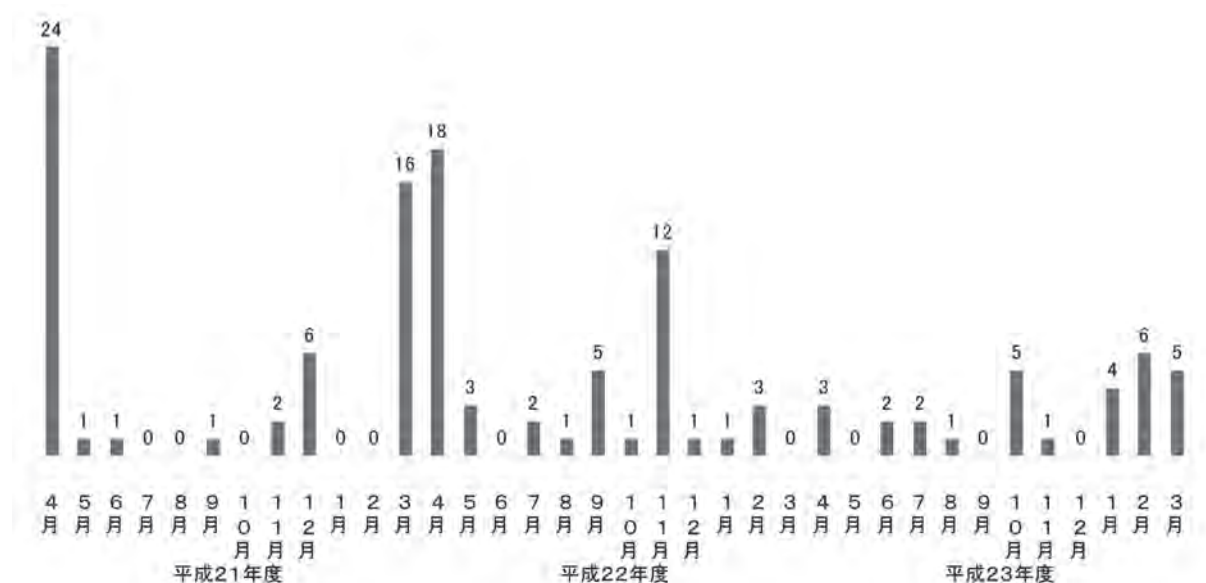
「せっかく劇で教えてくれたのにね。どうしようか?」とあえて問いかけると、「何回も何回も教えればいい!」と頼もしい声。「じゃあ、何回も教えればすみれさんがいないときも、ちゃんと洗えるかな?」もちろん全てすみれ組任せというつもりはありません。あえてこの質問をしたのは、劇が全てではなく、その後の子ども達の興味や変化が大切で、自然に手洗いが習慣になるように、なって欲しい!そのことが、少しずつでも子ども(す

みれ組)を通して保護者、職員、他の子ども達に伝わって欲しいという願いからです。

「私たちがいない時は、字を書いて、教えればいい」と1人がいうと「字は読めないんじゃない?」とさらに1人言い「じゃあ絵を描いて水道に貼ろう」という具合にポスター作りが決まりました。現在、朝や夕方自由時間を使って思い思いに3・4歳児に伝えたい手洗いのポスターを作製中です。完成したら園内の手洗い場に貼りたいと思っています。

【結果】

平成21年から23年の家庭・園での嘔吐下痢の発生状況をグラフにしてみました。



グラフを見てわかる通り、21年度3月、22年度4月、に嘔吐下痢の大流行があり、保健所の立ち入り検査がありました。そして、22年度5月に感染症対策委員を立ち上げたのですが、その年の11月には再び嘔吐・下痢の大流行がありました。感染症対策は頑張っているのになぜ?という思いがありましたが、立ち入りに入って下さった保健所の方から0歳児の手洗い場の環境と蛇口についての指摘・指導がありました。蛇口や環境があまり良くない事は以前から気になってはいましたが、設備はそう簡単に変えられないという思いもあり、見て見ぬふりでやってきたところがありました。

でもその時点で、感染症対策委員が立ち上がって活動しているという意識と、同じ失敗はくりかえせないという思いが園長や職員にあり、早速蛇口の交換をして、手洗い場の環境も変えました。それ以降、嘔吐・下痢の大流行はみられていません。

活動しているから完全に防げるものではない事は、わかっています。ただ何かあったらすぐ対応できる体制があり、同じ失敗を繰り返さない為に工夫できる力となっています。

【考察】

今回のすみれ組の劇では、子ども達を通して職員や保護者の感染症に対する意識を高め、子ども達にも大きな影響を与えたと思います。大きな結果はでなくても、日々の積み重ねで継続した感染症対策ができ、そのことが、園での嘔吐・下痢の大流行を抑えられていると考えます。

それは、宮園保育園が「感染症対策」＝看護師の仕事という状況から、委員会活動を通して少しずつですが、園全体で取り組む感染症対策に変わってきた事を現わしています。子どもや自分を守る為に感染症を広げないようにしよう！予防しよう！など一人ひとりが気付き、考えて、意見を出してそして行動していけるようになることを目標に、これからも引き続き活動していきたいと思います。

【概要】

社会福祉法人 高峰福祉会
宮園保育園

東京都中野区中野 1-21-6

0歳児	つぼみ組	9名
1歳児	もも組	18名
2歳児	ちゅうりっぷ組	18名
3歳児	たんぼぼ組	19名
4歳児	つくし組	18名
5歳児	すみれ組	19名

保育目標

自主性のある子
想像力の豊かな子
誰にでも挨拶ができる子
思いやりのある子
何でも食べる元気な子

保育方針

毎日の保育は年齢別で行っていますが、幼児クラスは異年齢がいつでも交流できるよう、オープンな環境の中で生活しています。

保育園も家庭や地域社会の延長と考え、同じ年齢の子どもたちとばかり遊ぶのではなく、お兄さんやお姉さんと一緒に遊んだり生活しながら、たがいに磨きあい、子どもたち自身の「育ち」の力を伸ばしていけるようにと保育しています。

『エピソード記述』を通しての保育の質の向上の経過

山梨県・菜の花保育園 石田 幸美

I. はじめに

我が園では、平成21年に施行された保育指針の「保育士の自己評価」ア)【保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの実践を振り返り、自己評価をすることを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない】という努力義務と、平成21年3月に厚生労働省から通知された「保育所における自己評価のガイドライン」の【保育所の自己評価は保育士等職員一人一人の自己評価が基盤となって行われます。その際保育の記録や各自の自己評価を、研修やカンファレンス（事例検討や協議等）を通して確認し合う中で取り組みの結果や保育所の組織としての機能を高めながら課題意識をもって次の保育の計画に活かしていくことや、保育所の組織として機能を高めていくことが必要です。】と記されている文面を保育実践に活用する為に、5年前から「エピソード記述」に取り組んでいる。とはいえ、その必要性は理解しているものの保育士の記録物は多く、実際子どもと向き合う時間以外の時間を利用せざるを得ない状況下で、「いつ記録するのか？」ということが大きな課題であった。このことについて奥山ら（2006）は、【日々の保育記録は「思い出し記録」であり、保育終了後の大きな仕事の一つである。しかし幼児の活動記録を保育者の問題意識や保育観・幼児観の見直しにつながるものとするためには、記録を読み返し、保育者自身の意識や課題をエピソードに書き加えていく過程が必要となる。また他者と課題を共有し、多様な見方や考え方を交換する場が必要であり、それによって初めて保育実践研究に生きるエピソードとなる。】¹⁾と述べている。また、その必要性については、岡花ら（2009）には【エピソード記述は、幼児の行動をその場の“点”ではなく幼児の歴史を踏まえた“線”で捉える可能性を広げる。“線”で捉えるとは、幼児のいくつかの行動のつながりが見え、繋がりの中で、意味が見えてくることであろう。エピソード記述を蓄積するなかで、それまで見えなかった子どもの行動の連続性を“線”で捉え、内面まで含んで捉えることができる。】²⁾と述べてられている。これらを筆者自身が読み、我が園で実践したいという強い思いを現場保育者に伝える事によって、記述は開始された。時間のない中で記述の継続については、保育者のモチベーションを保つ為、記述に対するコメントをこまめに書いたり、少しの時間でも、肯定的な声掛けを職員に繰り返していった。また、良いと思われる書籍などを紹介して行くことで、保育者自身のモチベーションも上がり、現在までの継続に至っている。実際にエピソードを書く事によって、保育者自身の記述力や保護者対応能力、更に子どもに対する観察力、対応力の向上が

感じられる。この実践報告では、エピソード記述を継続することによって園全体がどのように活性化され、保育の質が向上していったかについて記させていただく。

II. 実践の経過（第1期）大学ノートへの記入（平成20年6月～平成21年3月）

記述を始めたのは平成20年で、記述に参加したのは保育士13名である。

まずは「気負わず書く」という事を目的に、通常の日誌の半分を利用し、自由記載としたが、記述も少なかったため、3か月後には個人用の大学ノートに変更し記述をお願いした。自由記載、自由提出であった。その一つを紹介する。

保育者Aの記述

Kくん5歳（平成20年12月）

10時のお片付け後、朝の会で保育者が見えるように前に座りB先生が個別で付き解り易く伝えているが、確認がどこまでできているかが分からず、終わった後に再度保育者側から聞くようにした。やはり長文となると理解できない事がある。

主任からのコメント

長文となる部分は個別に対応する時間を設け自信をつけていくのが良いと思います。

Aの返事

解りました。やってみます。

このように、保育者の記入は、子どもの気になる部分に焦点が当てられそれに園長、または主任が答えていくというやりとりで保育者の子どもとの関わりにおける相談と改善策を共に考えるというところに留まっていた。提出は保育者によって違いがあり、週2、3回の提出者もいれば月1回の提出者もあり、差があった。半年程経過して職員会議で、記述についての自由討議をしたところ、提出の少ない職員は「書かねばならない感があり負担を感じる」「人に読まれていると思うと自信がなく途中まで書いても提出できない」「何を書いていいかわからない」などの意見であった。それに対して提出も多い職員からは「評価されると思わずに子どものありのままの姿を描けば良い」「どんなものを書いているのかお互い見合うのも大事ではないか？」などの意見が出た。それと同時に私の方からはエピソード記述を取り上げた書籍【鯨岡（2007）】³⁾や論文を紹介した。結果的には以下のような話し合いのまとめとなった。①エピソード記述の大切さがよく理解できたので、今後は積極的に書いてみる。②鯨岡（2007）の中のフォームを利用し、〈タイトル〉〈背景〉〈エピソード〉〈考察〉と分けて書くようにする。③各自が記入した「エピソード記述」を職員室に置き時間がある時に読み、情報の共有化を図る。ということとなり実践を行っていった。また、職員の意識の変化を知るためにアンケートを利用した。

(第2期) フォーム改善と職員周知の様子【H21年4月～】

第1期の話し合いの後、職員の提出率は良く、週1回は必ず全ての職員の提出がなされるようになった。第2期の目的はフォームを改善した事により「読み手にも解りやすい記述をする事」と「情報の共有化」を目的とした。その中のエピソードを紹介する。

保育者Bの記述

<p>エピソード名〈思いは同じ〉 H22年2月 3歳児 いつも落ち着きのあるRちゃん、お世話大好きだが自己主張も強くトラブルも多いSちゃん、Mちゃん、まだ幼さの残るEちゃん</p>
<p>〈背景〉 午前の外遊びにて、Eちゃんが泣いているのに気が付き側に行った。どうやらEちゃんはMちゃんと遊びたかったようだがMちゃんが一人で遊びたいと行ってしまったらしい。</p>
<p>〈エピソード〉 Sちゃんは保育者のように状況を聞き込みをしている。 S「うんうん、それで?」「そっかあ…○ちゃんがやったんだね」とEちゃんの言葉を繰り返している。 そこにEちゃんとトラブルを起こしたMちゃんがやってきた。 S「Mちゃんどうしたの? Sに言ってごらん。」と事情聴取は続く。 Mちゃんが状況を話す中、相手Eちゃんは黙って見ていた。 そこにRちゃんが近づき、小声で話しかけた。 R「Eちゃん、Rと遊びたいの?」E「……………」 R「Mちゃんが一人で遊びたいなら、他の子を誘えばいいんだよ。もしそれがダメだったらRを誘えば大丈夫だよ。わかった?」と優しい言葉で話しかけ、Eちゃんも安心したようにうなづいた。Sちゃんは、そんな2人の姿に気付かず、ひたすら状況を聞き解決策を考え、すっかり保育者になりきっていた。</p>
<p>〈考察〉 私はすぐ側でこの4人の会話を聞いていたのだが、とてもおもしろかった。SちゃんもRちゃんも困っていた2人を助けてあげようとする気持ちは同じなのだが、関わり方は全く違う。どちらの姿も“素敵だなあ…”と感じていた。 子ども同士のトラブルに、別の子どもが入って解決できる事もあるのでそんな機会を意図的に増やしていこうと思ったひと時であった。</p>
<p>〈主任のコメント〉 先生の言われるように2人共素敵ですね。そして、その一所懸命な姿を想像すると楽しくもありました。子どもは子どもでその社会の中で必死に生きている姿が描き出されたエピソードだと思います。人の思いを繰り返す中で受け止めて、なんとか解決しようとする2人の姿に、もうすぐ年中児になるんだという自覚と保育者が良いモデルとなっている事を感じました。</p>

このように、保育の一場面を切り取り、客観視して記述する力がついてきた。このエピソードからは子ども同士が、自分たちで解決しようとする事の大切さに気づいた保育者B

の思いが感じられた。子どもの会話を程よい距離で観察し、この程度はこの年齢で解決できそうだと判断し子どもに任せたところ、その展開のおもしろさを感じ客観視して記述したものと職員間でも好評であった。その後第2回目の会議では、以下のような意見が出た。

①上記のようにフォームを変えた事で、記述自体が書きやすくなり、読み手にも解りやすくなった。

②書いていて楽しさも感じる。

③職員室に置き読みたい人が読むといっても、読む時間がない。パート職員は時間が限られている為、読めない。

④書く子どもが偏ってしまう。

という意見がでた。そこで③と④についての改善案として③→コピーをしてクラス回覧をする。④→書いた子どもは名簿にチェックをして均一に記述できるよう努力する。以上2点の改善をおこなったところ、3回目の会議では、職員回覧と均一化が図れるようになった。同時に「エピソード記述」を始めて2年目になった時点で、1回目に行ったアンケートから、どの程度意識が変わったのかという点において同じ内容のアンケートを取った結果を精査すると、記述の大切さを知った。記述力、客観的に見る力、自分自身の書いた記述を振り返り考察する力がついた事など、保育者の個々のレベルが上がっている事が検証できた。また、次の課題として筆者から記述に対するカンファレンスの必要性を上げた。そこでは岡花ら（2009）【カンファレンスのなかで他の保育者の視点や、その場面を見ていなかった第三者と対話するなかで、確かだと思っていた「子ども理解」が揺さぶられ、自分自身の背後に隠れていた問題意識や恣意性というものが浮き上がってくる。そして一定期間置いて、以前の「感受する態度」も含めた上で「脱自的に見る態度」（鯨岡、2007）で読み直し、リライトする事で、自らの保育観を含めた枠組みを見直す事ができたと考えられる。】²⁾を紹介し、定期的なカンファレンスを行う事にした。

（第3期）職員カンファレンス（H23年12月～）

ここでは「職員カンファレンスを行い、新たな気づきを共有すること」を目的とした。カンファレンスは、2か月に1度のペースで立候補した職員の「エピソード記述」を取り上げ、①記述の仕方②記述の内容③タイトルの付け方等についてカンファレンスを行ったところ新たな問題が浮かび上がってきた。立候補したのは提出回数の多く経験年数の長い保育者2名であった。会議においては、共感的な意見のみに留まり異論する事が少なく、終了後に筆者に「こう思うのですが…」と意見する保育者もあり、本音での討論が行えないことである。そこで「エピソード記述」に対して保育者同士が躊躇せず意見を出し合えることが、保育の質の向上のためには必要である感じ、事前記述式の用紙提出の後、カンファレンスを行った。それは一つの「エピソード」について複数の職員が色々な視点から

対象児を理解していこうという取り組みであることが筆者のねらいであった。そして更に次の段階として記述した本人が子どもとの関わりをリライトしていくまでを目的としていた。カンファレンスで実際に使用した記述は〈考察〉部分を除いた、以下のものであった。

保育者Cの記述

エピソード名「落ち着いて参加するためには」 H24.5.30
〈背景〉 Dについて 普段室内遊びをしている時でも、大声を出したり、友達にぶつかっていたりする事が多い。今日は課外事業の英語の為、更にいつも以上の興奮した様子で参加した。
〈エピソード〉 始まる前から少し興奮していたが、今日は同年齢のEとべったりくっつき前半はすみっこで参加したり走り回ったりしていた。しかし、動きのあるダンスに変わってくるとみんなの輪に入るものの、無意識なのか近くにいる友達を誰かれかまわず押してしまったため声をかけた。 目を合わせ、友達を推さない、よけて走るよう伝えた。するとCも「うん」と答えたが、また5分後くらいに同じ事を言われていた。また、それが落ち着いたかと思うと力加減が解らないのか輪になった際に強く引っ張ってしまったり、勝手な行動をとったりしたため、英語の先生にも声をかけられてしまった。その後は保育士が手をつないで参加した。

これに対して各保育者の考察をそれぞれ記述してもらい発表後、5、6人のグループ討議で同じものはまとめ、〈本児の特性〉〈一年後の理想とする姿〉〈そのために必要だと思われる今後の関わり〉について話し合ってもらった。その2週間後保育者Cのリライトした考察が以下の通りである。

保育者Cの第2考察

〈第2考察〉 前回のカンファレンスを踏まえ、今回は先に約束事をしておいたからかビックリするぐらいにとっても落ち着いて参加する姿が見られた。やはり、言うと言わないでは、かなり本児にとって意識の持ち方が違うのだなと感じた。けれど、本児の場合は一度言われてもすぐ忘れて同じ事を繰り返してしまう姿も多いため、今回のような対応を次回再度行い、通用するかは分からないが、約束を守ろうとする姿勢が見られたことは大きな成長だなと感じた。もうひとつ、カンファレンスの中で、その日の家庭の状況を聞かれたとき、Dが朝もハイテンションで大好きな母親から叱られてしまった事もあったことに気づいた。自分自身朝の忙しさから、家庭のスタート部分を聞いていたのに理解してあげられず、モヤモヤした気持ちのまま活動に行かせてしまったのではないかと時間をおいてからその考えに至った。このことから、子どもの家庭での状況も理解した上での一日の保育を行う大切さも同時に感じた。
--

このように職員各々が一人の子どもの姿に真剣に向き合い考えていく過程において更に職員の統一感が生まれ、第2考察からも保育者Cが落ち着いて自分の保育での関わりを客観視する力がついたように思う。しかし、このように全員の子どものことを皆で考えていきたいのだが、どうしても時間にも限りがあり、気になる子の関わりについてとなってしまうが、職員全員で忌憚のない意見を出し合い、討論し合っていくことが園保育の統一意識に繋がり保育の質も向上したと改めて感じた。

Ⅲ. 「エピソード記述」の新たな展開【H24年8月～】

ここまで取り組みを継続してきたことで、記述や提出は増え、園内の保育の活性化や質の向上につながってはきたが、保育者の記述業務が多いことは改善できていなかった。その為筆者は、今まで継続してきた「エピソード記述」が日々の保育記録として活用できないものか？という思いに至り、保育日誌のフォームを工夫し、1、2歳児クラスで、毎日記述する保育日誌として活用した。(図1の通りである) それまでの保育日誌に比べ、子ども達の様子が生き生きと描写され、保育日誌としても、とても斬新で質の高いものとなっている為、このまま継続していこうと考えている。

Ⅳ. まとめ

このように、「エピソード記述」の5年間の継続を通して、職員全体で話し合い、一つ一つの課題に取り組んでいくことで、園の保育理念に沿った保育が浸透し、保育の質も向上してきたことを感じている。また、初めは書くことが苦手という課題からスタートした保育者も、今では短時間での記入も可能になり、同時に書いたエピソードを考察するということが楽しくなってきたと言っている。

私たち保育者は、子どもと関わる中で、常に時間に追われ、子どもの生活全般における関わりや、トラブルや怪我の対応等、瞬時に頭を切り替え、その場その時に解決しなければならないこともある。しかし、保育をより大きな視点でとらえた場合、子どもの心の育ちに目を向け、今日の自分の保育実践と照らし合わせて記録し、振り返り、落ち着いた時間に考え、明日の保育を組み立て、それを実践に活かすことこそが保育の質の向上への近道だと実感している。「エピソード記述」を今後も継続し、更なる保育の質の向上に努めていきたい。

引用文献

- 1) 奥山順子・佐藤敦子(2006) 保育の質的向上を目指す保育実践研究の方向—保育者によるエピソード記述を中心とした園内研修の試み— 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要、第28号
- 2) 岡花折一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春(2009)「エピソード記述」による保育実践の省察—保育の質を高める為の実践記録とカンファレンスの検討—広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要、(第37号)、229-237
- 3) 鯨岡 峻・鯨岡和子(2007)「保育のためのエピソード記述入門」 ミネルヴァ書房

図1 1、2歳児の日記

<p>前週のこどもの姿 着脱時、パンツとズボンはほぼ一人でやってみようとするようになってきているが室内活動に少し落ち着きがない。 今週のねらい ・ひとつの動作を、保育者と一緒に丁寧に最後まで行ってみる。</p>	<p>保護者支援 ・汗をかきやすい時期なので、衣服の着替え、調節など個々に合わせ対応していく。</p>
<p>平成24年7月〇日 () 天気 ○ 出席12名 欠席0 記録者 保育者A</p>	
<p>今日のねらい ・室内の環境設定を変化する。・帽子を一人で最後までかぶる。</p>	
<p>保育の内容と気づき ・室内の用具、教具に物足りなさを感じるようになってきたのか、遊びに集中することが少なくなってきたため、主任、保育者Gと相談し環境を変えた。中央の棚が無くなったことで走り回るかと思ったが、そんな事もなく朝から好きな遊びをそれぞれが見つけて遊ぶほどだった。夕方は、内容を少し変え、積み木やぬいぐるみコーナーを設け、様子を見ていくようにする。また、戸外に出る際、改めて帽子のかぶり方に重点をおき関わった。帽子を自分のマークの箱から取り出すものの、「先生、できない、やって～」と保育者の元へすぐ訴えに来る。私は「やってじゃなくて 見てるからやってごらん、ほらこんな風に…」と一度ゆっくりとやって見せた。すると一人が鏡の前で上手にできた。「上手にかぶれたね～」と認めると「僕も…私も…」とやりはじめた。このようにちょっとしたきっかけで、自分でやってみようとする力も出て、実際にできるので、先へと急ぎ焦ることがないように、まずは一つ一つの行動が身について習慣となるようにゆっくり繰り返し関わっていきたくと改めて感じた。 室内の環境は以下の通りです。(図記入があった)</p>	
<p>欠席児 ○○</p>	<p>健康観察 ・水分を小まめに補給する。 ・虫よけスプレー使用</p>
<p>職員体制 G 7:00～16:00 N (バ) 8:00～13:00 A 9:00～18:00 O (バ) 15:30～18:30</p>	<p>主任のコメント 下線部、大事です。そんな気持ちで関わってください。広がった部分の環境を心配していましたが、良かったです。子どもの様子を見て、お部屋の環境に少し変化をもたらす事は、子どもが落ち着いて遊び楽しく一日を過ごすために大事ですね。</p>

「アゲハ蝶の飼育・観察から劇あそびへ！」

福井県・浪花保育園 中屋 裕子

はじめに

子どもと直接体験した時に引き出される、豊かな表現は、間接体験だけでは出てこない生きた言葉がたくさん聞かれます。これは、私が保育士になって2年目の時、あげはの観察を通して、年長児クラスで取り組んだ、感動体験から劇あそびまでの総合活動を取り上げた実践記録です。

1. 感動体験～あげは誕生まで～

4月、園庭の山椒の葉っぱにあげはの卵を見つけ鉢ごとクラスに持ちこむと、虫好きの多いクラスということもあり、虫きちたちを中心に山椒の葉っぱに関心が集まりました。図鑑を片手に「おお！このあげはの卵、だんだん透明になってきたで、そろそろ生まれそうや」、「初めは真っ黒なんやで」と、毎日眺めている虫きちたちに感化され、最初は気持ち悪がっていた子や遠くから見ていただけの子も、徐々に興味を持ち始めました。

生まれたての幼虫は本当に真っ黒で、「なんか、糸くずみたいだね」と表現したり、「首をこうやって動かして、バックオーライして葉っぱ食べてるんや」と幼虫の動きを真似したり毎日観察しては、気がついたことを報告してくれるようになりました。そのうち、「あ！！サンちゃんうんちした！！ごはん(葉っぱ)の上にしたぞ」「コロちゃんたくさん食べるんやで」とそれぞれに名前を付けるようになり、愛着を持ちながら育てるようになりました(写真1)。

(写真1) グループで1匹の幼虫を育てる



幼虫が脱皮すると、その大きさや模様の変化にも気が付き、「あら、おかしいぞ！クロちゃんがクロシロちゃんになった」、「なんだか大きくなってきたし…図鑑を見てみよう！」と、図鑑と見比べます。息を殺しながら脱皮の瞬間を見たときは、「あっ！緑色になった!!」「たくさん食べると、大きくなって窮屈になるから、皮を脱ぐんやな」「皮を脱ぐときは苦しそうやけど、脱いだらすっきりしたみたいや」と、たくさんの疑問・発見に出会いながら、あげはになるのを楽しみに待つようになりました。そのころには、子どもたちの観察力もすごく、「小さい時は小さいウンチ、大きくなったで大きいウンチになった」、「大きいウンチは四角いな」、「ちっちゃいウンチは茶色い、大きいウンチは白・緑・黒が混ざってる」と、こちらが驚くような発見も多くなっていきました（写真2）。

（写真2）ようちゅう新聞には、子どもたちのつぶやきが綴られていく



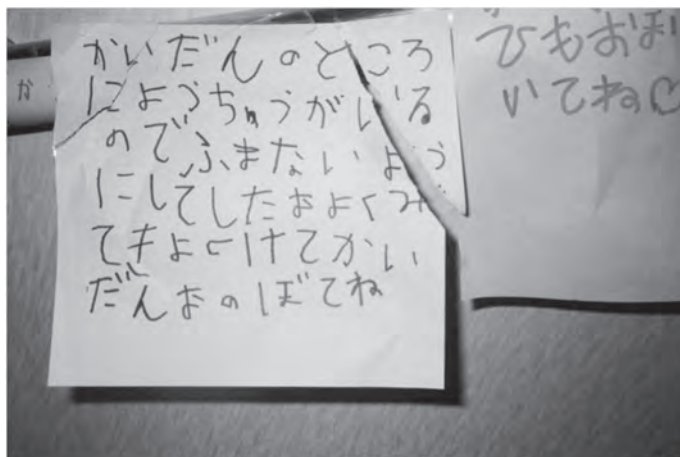
ある日の朝、葉っぱの上にはいた青虫がいないことに気がつく、部屋中大騒ぎになりました。「コロちゃんどこにいった?」、「散歩に行ったんじゃない?」、「散歩に行ったんなら踏まれてしまうよ」、「踏まれたら潰れてしまうな」、「探しに行こう」と、子どもたちは青虫を探しだしました。目につくところにはいないことがわかると、這いつくばって部屋中を探し、とうとうピアノの足にくっついていた青虫を発見しました。青虫は少し丸くなって固まっており動きません。「なんか、疲れたのかな…」、「動かんけど…おーい、コロちゃん大丈夫か?」と、そっと声をかける子どもたち。そこへ、青虫発見のうわさを聞きつけて集まってきたクラスの子どもの中から、「さなぎの準備してるんかもしれん」と、声が上がりました。図鑑を手に「ほら、一緒な形や」と見比べています。ひと安心すると今度は、「こんなところにいたら、蹴っ飛ばされてしまうかもしれんなあ…」と、心配の声。「どうしよう…蹴っ飛ばされたらさなぎになれないよ…。そこで、みんなで相談すると、◎さなぎに触れないように囲いをする。◎さなぎがいることをみんなに知らせる、と意見が出ました。ピアノの足にはプリンカップで囲いがつき、ピアノには大きな張り紙が

張られました。『ここにさなぎがいます。けらないでください』その日から、青虫がいなくなるたびに、青虫探検隊が出動し、さなぎ探しが始まりました。机の下、棚の裏、電話線、時にはお部屋を抜け出し、廊下のござ立ての脇や、階段の手すりにもさなぎができていて、見つけるたびに囲いと張り紙が増えていきます。「小さい組さんにもわかるように絵もつけよう」、「矢印も付けるといいんじゃない？」と、青虫を思う優しい気持ちが育っていることを嬉しく思いました（写真3・4）。

(写真3) 階段の手すりには、さなぎを守るための囲いと張り紙ができる



(写真4)



最初の青虫がさなぎになってから約2週間、散歩に行つて帰つてくると、天井に一羽のあげは蝶が止まっているのを発見しました。「あつ！！あげはになったんや！！」と、ジャンプしながら手をたたいて喜び、「どのさなぎから生まれたんや？」と、大興奮の子どもたち。さなぎを見て回ると、ピアノの足のさなぎが割れていました。「このさなぎから生まれたんか…」、「どうやって生まれたんかなあ〜？」あげはの誕生を喜ぶとともに、子どもたちとあげはの誕生の瞬間を見たいと思うようになりました。それから何度も誕生の

瞬間を見逃しました。誕生の瞬間を見たいと毎日観察していると、些細な変化に気づくようになります。その日は、クラス一の虫きちが「今日はさなぎが透けて模様が出てきたから、もうすぐちょうちょになるよ」と、みんなに教えてくれました。そこでその日はすべての活動を止めて、みんなで息を殺してあげはが誕生するのを見守っていました。これまで何度もあげはが生まれる瞬間を見逃してきたので、静寂の中に絶対に見たいという気持ちの高まりが見られました。

さなぎの背中がすっと割れ、あげはは頭からゆっくり、ゆっくりと出てきました。濡れた状態のあげはは図鑑で見るのとは違い、しわしわでくしゃくしゃに固まっているようです。そこからゆっくりと羽を広げる様子を見てみると、子どもたちの中から「がんばれ…」と囁くような声が聞こえてきました。ふと子どもたちの表情に目をやると、大きく見開いた瞳がきらきらと輝き、興奮で胸が膨らみ、大きく息をしているのがわかります。まさに、クラスの全員の気持ちがあげはの誕生に向かい、直接体験を通し感動を共有した瞬間でした（写真5）。

（写真5）あげは誕生の瞬間を見守る子どもたち



2. あそびの入り口

幼虫の成長と共に自発の中で、ごっこ遊びが盛んにおこなわれるようになりました。特に盛り上がったのは、『さなぎごっこ』と『蝶と蜘蛛の鬼ごっこ』です。『さなぎごっこ』は、かくれんぼのような遊びで、青虫が色々なところでさなぎになっているのを発見した時の様子を再現していて、鬼役の青虫探検隊がさなぎを探するという遊びです。『蝶と蜘蛛の鬼ごっこ』は、色々な鬼ごっこのバリエーションで遊ばれ、時には部屋の一角にゴムを張り巡らせまるで蜘蛛の巣のようにして、捕まえた蝶を閉じ込めたり、またそれを助けるものが出てきたり、連日形を変えて盛り上がっていきました。

そんな子供たちの様子を見て、この感動体験を劇化したいと思うようになり、3月に行

われる発表会に向け徐々に作り上げていくことにしました（写真6・7）。

（写真6）フープで蝶の羽を作って「蜘蛛と蝶の鬼ごっこ」



（写真7）あ…つかまっちゃった



3. 劇化するにあたり

場面遊びが盛り上がっていると、なかなかそこから抜け出せない苦勞もありました。特に、見たことや感じたことを言葉や文字で表現することは上手でも、身体で感じて身体で表現することの難しさや表現の硬さを感じ、それをいかに解いていくかが最大の課題となりました。言葉では、「蝶ってふわふわ飛んでいて、風に吹かれて気持ちよさそう」と自分なりの言葉で表現できるのに、身体表現は硬く羽を動かしていてもとても蝶には見えません。そこで、子どもがその子らしい表現を楽しみながら友達と一緒に表現する喜びを感じていけるように、具体的に情景や状況を作っていくことにしました。

例：保育者「蝶の羽ってどんなの？」

子ども「ひらひらしている、やわらか〜い。薄いんや」と手を動かす。

保育者「そうだね、すご〜くやわらかそうな羽だね。みんなの手はもう手じゃない

よ。だんだんやわらかい羽になってきたよ。さあ、魔法をかけるよ蝶さん
蝶さん春風の中に飛んで行け〜」

保育者「雨が降ってきた…だんだん羽が重くなってきたよ！あ！雷だ！！羽が片方
破れちゃった！」

わかりやすく具体的な情景や状況を作っていくことで、子どもの表現が引き出せるようにしていきました。こちらの言葉がけの変化で、子どもの表現はどんどん変わっていきました。「○○ちゃんの蝶は本当に気持ちよさそうやな」、「○○君の毒蜘蛛、怖そうで顔も手も蜘蛛になってるわ」など、友達を認めたり認められたりしながら、少しずつ自信をつけ、より本物らしく表現しようとする意欲が芽生えてきました。自信を持つと子どもたちの表現は生き生きとしていきます。表情が柔らかくなり役になりきって表現する姿には、目を見張るものがあり、だんだん表現することが楽しくなっていく様子でした。

子どもたちの表現が自分のものになっていくと、それぞれの個性を生かした配役が少しずつ固まっていきました。同時に脚本作りも進んでいきました。脚本は、実際に経験したことをベースに、子どもたちがつぶやいた事を台詞に入れ込み、脚本を作っていくことにしました。子どもたちと脚本を作るにあたり、イメージを膨らませる手助けとして、絵本や紙芝居（「あおむしだれのこ？」、「あげはのルン」、「あおむしのへんしん」）を提供していきました。物語を読み聞かせしたことで、実際に経験したことから想像を膨らませ、外の世界で暮らす青虫や、蝶になって外の世界に飛び立っていったあげはが、いろんな天敵に出会う様子、助けられる場面など、イメージ豊かに思い描くようになりました。

子どもたちとの直接体験とその時のつぶやきを入れ込んだ脚本も整理され、『蝶の産卵』、『幼虫の変化』、『青虫と天敵』、『蝶の誕生』、『蜘蛛に捕まる』、『蝶の死』の6場面で構成することにしました。幼虫のリアルな動きを再現する場面、蝶やカマキリ・毒蜘蛛の役になりきって自分なりの表現をのびのびと楽しむ場面、心情豊かに見せる場面や歌で聴かせる場面など、演出を効果的にする方法を考え、起承転結を意識して1場面ずつ場面遊びをしながら、劇あそびを進めていきました。

劇あそびを進めていく中で、観察したことをよりリアルに蝶の一生を本物に近い方法で表現したいという子どもたちの願いが見えてきました。脱皮の場面遊びの中では、「今日は黒い服やで本当の脱皮みたいや」、「脱皮のところは本当に服を脱ごう」と子どもたちが自分の服を脱いでいる様子をそのまま使い、「触角は、オレンジ色やで指にオレンジのものをつけよう」、「あげはの羽は、柔らかくてふわふわしたものがいいんじゃない」と、言った会話をもとに小道具作りも進めていきました。脚本作りの中でも子どもたちのつぶやきから、リアルな場面作りを心がけました。「蝶の中には、羽が折れてしまったものもいたし、死んでしまったかわいそうな蝶もいたよ」という子どもの言葉をうけ、ハッピーエンドの結末をやめ、死を取り入れることにしました。蜘蛛の巣に引っ掛かりもがき苦しむ場面から、徐々に力を無くしていくあげはの表現は本当に見事で、役になりきっているの

が伝わってきます。

また、表現を助けるために効果音や歌を有効に取り入れることにしました。怖さ、喜び、悲しみなどの表現は、効果音を入れることでより深まったり思いが募ったりして表現の幅が出てきました。子どもたちが出来る効果音は、子どもたちの役割として取り入れたり、毒蜘蛛やカマキリの歌は、子どもたちの言葉にメロディーをつけたり、子どもたちと相談しながら作り上げていきました。主題歌や劇の中に出てくる歌は、一人が口ずさむと自然とみんなが歌うほどお気に入り、ピアノで音をひろって歌を弾く子も出て来るほどでした。

発表会当日、たくさんのお客さんが見ている中で、子どもたちは緊張しながらも自分の役割に責任を持ち、力を合わせて一つのを創り上げていきました。保護者は子どもたちの成長に感激し、一人ひとりが主役として仲間と共に創り上げていく劇の世界に引き込まれ、涙している方も多く見られました（写真8）。

（写真8）手も足も顔も毒蜘蛛になりきっている子どもたち



～保護者の感想～

【年中の時は、自分勝手にわがままだった我が子が、お友達と一緒に団結して劇を作り上げてる姿に感動しました。四月にあげはの観察をして、親からみてもクラスが一つになっているなと感じていた。一年間通した創作劇で本当によかったと思う。子どもたちのおかげで命の大切さをまなびました。】

【「あげはものがたり」の劇は、いつもにないテーマに驚き、あげはの一生を通じて、生と死、はかない虫の命の尊さを子どもたちが真剣にとらえていることに感動しました。

今年は、春から虫や生き物の飼育を通じて、幼虫が成虫になるところ、九官鳥の九ちゃんの死など、生き物の生と死を見てきたので、このテーマができたのだと思います。こういう経験をしたことで、ただ虫を捕まえばいいのではなく、虫も小さな命を精一杯生きて

いるのだということに気が付いてくれると嬉しいです】(写真9)

(写真9) 外の世界へ羽ばたこうとしているあげは



4. 個の育ち

自分を表現するのが苦手なKちゃん。配役決めの時に「私はお話しする人(ナレーター)でいい」と、いていたKちゃんを蝶役に誘ったところ、家に帰って「やっと蝶になったんや」と、おうちの人に話してくれたと聞いた時、自分を表現するのが苦手な子への配慮こそ丁寧にすべきだと考えさせられました。Kちゃんは、ナレーターと蝶の2役をすることになり、蝶を表現することで少しずつ表情や動きにも柔らかさが見られるようになりました。友達から「Kちゃんの蝶柔らかそうに本当に飛んでみたいや」と、認められると嬉しそうに微笑み、他のあそびの中でも「先生見てて!」「私もやりたいで入れて!!」と自己表現をするようになりました。表現遊びを通して自分の殻を破り心から笑っているKちゃんをみて、表現活動の素晴らしさを学びました。

5. 集団の育ち

発表会が終わってからも、子どもたち同士で配役を変えながら自発的に劇あそびを楽しみ、発表会ごっこが行われました。その余韻に浸る中、卒業制作で「あげは物語」の紙芝居をつくることを提案すると、子どもたちは意欲的に取り組んでいきました。製作が苦手なMくんも、「僕は、葉っぱをつくるでな」と、素材を集めてきて葉っぱの筋を一つ一つ丁寧に付けたり、自分が一番で、なかなかお友達のいいところを認められなかったIちゃんも、「私はお花作るね。〇〇ちゃんは何が作れる?」、「□□ちゃんつくし作るの上手やで、つくしつくってや」と、自然と友だちのことを認め協力したりしながら進めていきました。お花は、花びらを一枚一枚切って工夫している子もいれば、こんな素材で作ってみたいと

素材を探してくる子、図鑑を見ながらより本物らしく作り上げようとする子など、今までになく自分たちで作っているんだという集団創造の世界が見られました。友だちに認められるという事は、子どもたちの自信につながります。劇あそびを通して、認め、認められる集団になっていった事を感じました。

6. 考察・評価

今回取り上げた題材は、子どもたちにとって身近なもので、興味の持ち方を見ても劇あそびの題材にすることはごく自然なことでした。子どもたちは生き物の一生を観察することで、小さな生き物にも尊い命がある事に気が付き、愛着をもって育てていました。あげはは成長するごとに姿を変えるので観察していても面白く、その一生を目の当たりにすることで、子どもたちの興味関心は高まっていきました。直接体験したことは、子どもたちの言葉を豊かにし、絵本や図鑑を見るだけでは出てこなかった感動の言葉に溢れていました。その感動をクラス全体で共有し劇あそびへと発展していきました。

しかし、あそびから劇へと発展していく過程の中で、子どもの気持ちを大切にしながら劇を創造していくことは、容易ではありませんでした。保育者自身が既成概念にとらわれず、自由な発想と表現力をもち、創造性豊かに劇あそびを楽しまなければ、とたんに子どもの気持ちは離れていってしまいます。私自身は表現力もまだまだ未熟で、見られていると恥ずかしく、自分に自信がなかったのも、どのように表現を楽しんだらよいのか悩み、子どもたちも同じように、劇あそびになると硬くなってしまうのは、恥ずかしさがあるからだとわかってきました。私は自分を表現できるようになりたいと、思うようになりました。そこで、子どもたちがのびのびと自分を出しながら遊んでいた場面遊びの中に入り、心ゆくまでごっこ遊びを楽しむことにしました。あげはになって遊んでいる子に「なんてうまそうな卵だ、今日はあげはの幼虫の卵焼きにして食べよう！」と保育者が創造をかきたてるような言葉を投げかけると、子どもたちは惹きつけられワクワクしながら「私たちの卵を食べないで!!」と、応えあげはになりきって表現し始めました。私自身もだんだん楽しくなってきた、どんどんイメージが膨らんでいきました。保育者の言葉がけで、子どもたちの様子にも変化がみられ、表情の硬かった子どもたちは、少しずつ自分の殻を破り自由なごっこ遊びの中で、子どもたちなりに自由にイメージを膨らませ、表現を楽しむようになっていきました。そして、友達とイメージを共有しながら一緒に表現する喜びを感じるようになっていきました。

劇あそびは発表会に向けて創り上げていきますが、劇あそびが豊かになるということは、日々の保育の中で表現の経験活動が豊かに行われていなければいけません。今回の劇あそびを通して、子どもたちが感じたことを普段の保育の中で自由に表現したり遊んだり、話し合える場が保障されていることは、自己表現・自己表出を促すのにとても大切だということを感じました。それは、1年間を通してだけでなく、乳児期からの積み重ねの中で

培われていくものともいえるでしょう。子どもたちが自信を持って自己表現できる環境をつくっていくことが保育者の大切な役割です。自己表出やコミュニケーション力を培う力は、乳幼児期の豊かな総合活動にあるといえるのではないのでしょうか。

「おむつはずしについて考える」 ～子どものペースに合わせたおむつはずしのチャンス～

鹿児島県・建昌保育園 小倉 裕子

【問題と目的】

建昌福祉会では職員の資質向上を目的として、専門部会「実践研究委員会」が平成23年度に発足した。実践研究テーマを選定する際、0・1・2歳児を持つ保護者が仕事と育児の両立の中で「何が一番困りを持っているのだろうか？」と考えた。

働く保護者の悩みは、保育園で過ごす時間がほとんどなので、保育者とどうやって連携を取ったらよいのか悩んでしまう。一日の排泄のこと、どんな風にどのような状態だったのか事細かに報告し合うこともなかなか難しく、開始する時期などもあいまいになりがちになってしまう。子どもと一緒に過ごす時間が少なく生活の一部始終が見えているわけではないから、どんな風にトイレトレーニングをしたらよいかわからない。家で失敗したときに、ゆっくりしたいのに家事が増え時間がとられイライラしてしまうなどがあった。

そこで、保護者と保育士がともに、排泄の発達を共通理解し、子どものペースに合わせた「おむつはずし」について研究することにした。

幼児期に行われるトイレトレーニングは、子どもにとって自分の行動に自信を持つとともに、保護者・保育者への信頼を育む重要な過程だと考えられる。また、保護者にとっても、子どもの成長を実感でき、育児の上での節目ともなっている。ところが、保護者によっては、より早くおむつをはずしたいという気持ちから、子どもの発達状態を十分に把握せずにトイレトレーニングを行った結果、思うように進まず母子ともにストレスに悩まされる場合がある。本来、おむつは無理にはずさなくても体と心の成長とともに自然とはずれるものである。私たち大人ができることは、子どもの生まれ持った発達の力が充分に出しきれるようにちょっとお手伝いをしてあげられるだけである。それが、トイレでできるようになるのは、保育園生活の中でお友だちができるようになったのを見て学んでいくからだと思われる。排泄に関わる行為は、言葉の名前を覚える、お箸で食べるようになることと同じように、大人とのコミュニケーションの中から身につけていくものだと考える。あくまでも、主役は子どもであることを忘れずに、個々の発達のペースに合わせて進めるトイレトレーニングを保護者と保育者がともに進めていくことを目的とする。

【実践Ⅰ】1歳児のトイレトレーニング

～個人差に合わせた保育者の援助～（平成23年度）

《方法》

1) 子どもと家庭の実態把握

・調査対象

1歳児29名（男児16名 女児13名）

平成21年4月～平成22年3月生まれを対象

・実態調査

個人面談・懇談などからの家庭の様子

・アンケート調査（平成23年6月・9月・平成24年1月に実施）

2) 保育園生活での排泄状況の把握と援助

①対象児

②対象児をトイレ（オマル）に慣れさせる（6・7月）

- ・朝のおやつ後・給食後・午睡後にトイレに行く
- ・排泄の成功時間を子ども一人ひとり記録にとる

③トイレトレーニングに工夫を加える（8・9・10月）

- ・トイレに座る回数を増やす（朝のおやつ後、給食前・後、午睡前・後）
- ・トイレにゆっくり座る時間をもつ
- ・トイレトレーニングが成功している子どもを中心にパンツで過ごす時間をもつ
- ・子ども一人ひとりの排泄成功時間、回数を記録にとる

④個人差を把握し、子どもに合わせた援助を行う（11・12・1月）

- ・全体を3パターンに分けて援助を行う
- ・パターン別に代表1名を個別トレーニング表に記録をとる

【結果と考察】

1) の調査では、家庭のトレーニング状況把握のため、子どもの実態調査を行った。トイレトレーニングを行っている家庭は、6月の調査開始時は40%だった。

2) の取り組みでは、トレーニングを始めるにあたって保育士の援助に、・無理強いをしないこと・成功したらたくさん褒めること・失敗しても叱らず励ますこと・他の子どもと比較しないこと・子ども一人ひとりの排泄間隔をつかむことを職員共通の取り組みとし、保育園生活での排泄チェック表の記入（6月から10月）をもとに、排泄成功記録を作成した。

この排泄成功記録（6月最初の2週間から10月最後の2週間）の結果から、全体を以下の3パターンに分類した。

《パターン1》

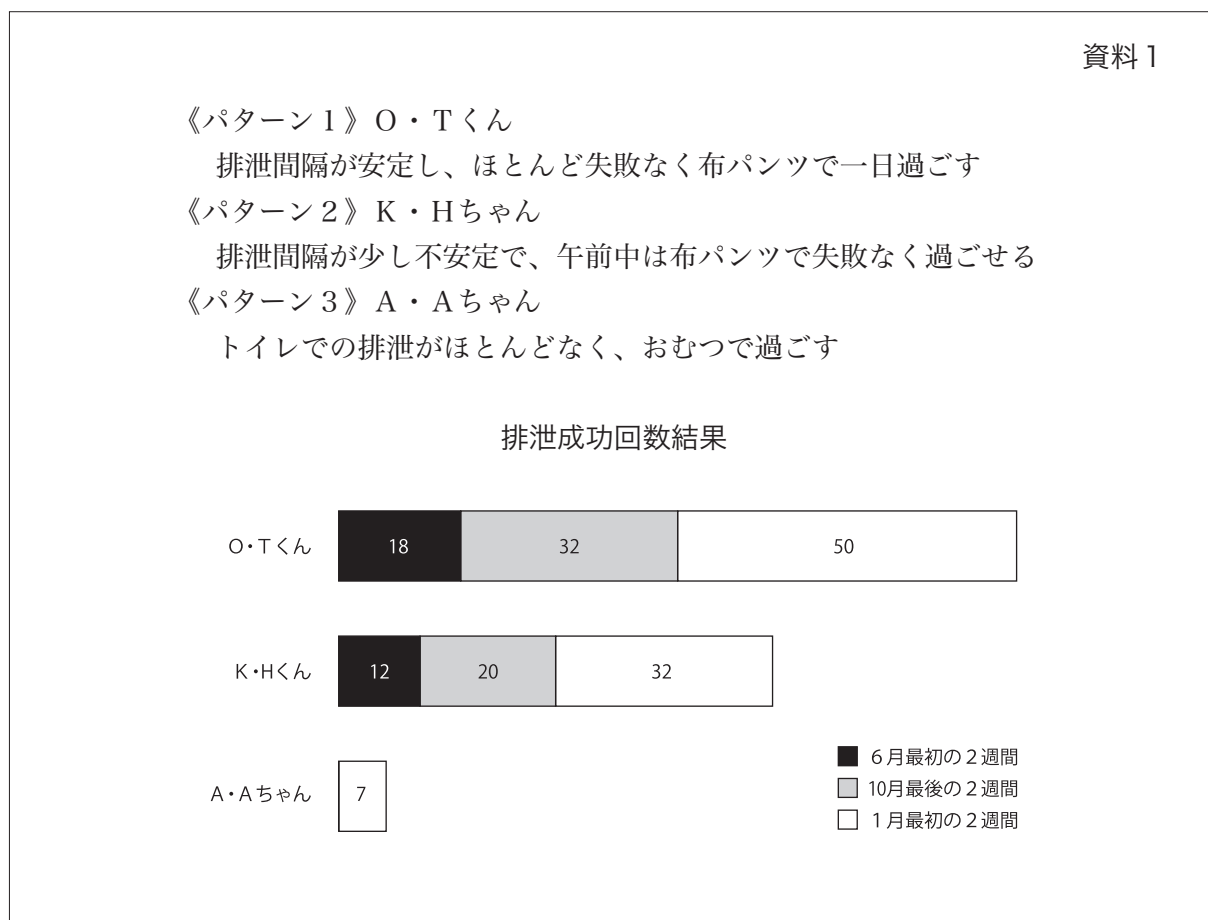
排泄間隔が安定し、ほとんど失敗なく布パンツで1日過ごせる子ども

《パターン2》

排泄間隔が少し不安定で、午前中は布パンツで失敗なく過ごせる子ども
《パターン3》

トイレでの排泄がほとんどなく、おむつで過ごす子ども

パターン別に代表1名を選定し、グラフ化したものが資料1である。



※■のグラフが6月最初の2週間、■のグラフが10月最後の2週間、□のグラフが1月最初の2週間の排泄成功結果。

※パターン1（O・Tくん）、パターン2（K・Hちゃん）、パターン3（A・Aちゃん）を例にあげる。

O・TくとK・Hちゃんは排尿成功への変化がみられるが、A・Aちゃんは排尿変化がみられなかった。全体的に、トイレトレーニングが順調に進んでいることがうかがえる。しかし、A・Aちゃんのように変化がみられない子どももいることから、個人差があることが示された。

個別に目標を立て、個別トレーニング表に記録をとったものが資料2である。子ども一人ひとりに合わせた援助が行うことにより、O・Tくんは失敗なく1日パンツで過ごすことができるようになり、トイレで成功する自信につながった。K・Hちゃんは、言葉やし

ぐさで自分の意思を伝えられるようになってきたが、排泄間隔が不安定である。保育者がしぐさを見逃さずトイレに誘うようにすると、午前中はパンツで過ごすことができるようになった。A・Aちゃんは、「おしっこでないね。しなくなったらまた来ようね。」とトイレへの興味を引き出す声かけを行うと、12月までは、排尿成功が1度もなかったが、1月には排尿成功が見られるようになった。

援助の結果、6月開始時→10月時→1月終了時は、パターン1は36%→64%→100%、パターン2は24%→40%→64%、パターン3は0%→0%→14%に排泄成功が増加した。このように個別で目標を立て、援助を行うことで排泄成功が増え、パンツで過ごせる子どもが多くなってきた。調査終了時のトイレトレーニングを行っている家庭は80%と関心が大きくなった。また、半数の子どもがパンツに移行し、親の心のゆとりが感じられた。

課題として、トイレトレーニングについて登降園時に話を十分に行っていたと思っていたが、口頭では伝えることができない保護者がいることが分かった。次年度に向けてはクラス便りなど書面を活用して保護者対応の充実を図ることにした。

資料2

個別トイレトレーニング		名前	○・Tくん
【6-7月の目標】 朝トイレ(オムル)に慣れる			
【トレーニング方法】 ○朝のおやつ後・朝食後・午睡後に必ずトイレに誘う			
月	日	経過	
6	13	トイレに座ると、おしっこが出る。	
		※給食後、オムルにおしっこがよくでていた。	
7	1	トイレに座ると、必ずおしっこが出る。	
		※給食後や、午睡後にオムルにおしっこが出ている。	
【8月・10月の目標】 ○トイレでの排便ができるようになる ◎トイレでの排便に喜びを覚える ◎布パンツで過ごす			
【トレーニング方法】 ○トイレに座る時間を増やす(朝のおやつ後・給食前と後・午睡前と後) ○トイレに座る時間を長くもつ ○布パンツで過ごす時間をもつ			
月	日	経過	
9	1	午前中毎日パンツで過ごす。	
	9	給食後、トイレでウンチが出るようになった。 ※午前中毎日パンツで失敗がほとんどなく、過ごせた。	
9	1	午前中毎日パンツで過ごす。	
	2	給食後、トイレでウンチが出る。 ※午前中はパンツで失敗なく過ごせた。排便もトイレでできるようになった。	
10	2	夕方のおやつまで毎日パンツで過ごす。	
	4	夕方のおやつまで毎日パンツで失敗なく過ごせた。 ※夕方のおやつまで毎日パンツでほとんど失敗なく過ごせた。	
【11月の目標】 幼稚園までパンツで過ごせるようになる。			
【トレーニング方法】 ○保育園までパンツで過ごす。 ○O・Tくんの排便間隔(朝のおやつ後・給食前と後・午睡前と後・帰園前)に合わせてトイレに誘う。			
月	日	経過	
11	21	給食後、トイレで排便あり。	
	24	午睡前、トイレで排便あり。	
	25	給食後、トイレで排便あり。	
	28	給食後、トイレで排便あり。	
	30	給食後、トイレで排便あり。	
※11月は毎日パンツで1日失敗なく過ごせた。			

個別トイレトレーニング No.2		名前	○・Tくん
【12月の目標】 朝1日パンツで失敗なく過ごす			
【トレーニング方法】 ○1日パンツで過ごす。 ○O・Tくんの排便間隔に合わせてトイレに誘う。 【朝のおやつ後・給食前と後・午睡前と後・16時半~17時半】			
月	日	経過	
12	16	午睡後排便失敗。	
	22	給食後排便失敗。	
12			
12			
12			
12			
12			
12			
12			
【1月の目標】 朝1日パンツで失敗なく過ごす。			
【トレーニング方法】 ○1日パンツで過ごす。 ○O・Tくんの排便間隔に合わせてトイレに誘う。 【朝のおやつ後・給食前と後・午睡前と後・16時半~17時半】			
月	日	経過	
1	17	午睡後排便失敗。	
		※17日は排便失敗なくパンツで1日過ごせた。	
【経過】 排便間隔が変わり、園での排便はほとんどなくなり、家庭で排便がある。 6月から1月を通して、家庭でもトイレトレーニングを行っていたこともあり、排便失敗もほとんどなく、排便に楽しめることができた。 排便があるときは、「しっし」や「うんち」と保育者に伝え、排便間隔をつかむこともすすんでいき、O・Tくんに合わせてトイレに誘うことができた。11月からほとんど失敗なく1日パンツで過ごすようになり、トイレトレーニングは成功している。			

個別トイレットトレーニング
 (パターン2) 名前 K・Hちゃん

【5-7月の目標】		◎トイレ(オマル)に慣れる ◎トイレに行くことが習慣づく
【トレーニング方法】		◎朝のおやつ後・給食後・午睡後に必ずトイレに送る
月	日	経過
6	13	・トイレに座ると、おしっこが出るようになった。
		※給食後、オムツにおしっこがよく出ていた。
7	1	・トイレに座ると、おしっこが出ることも多い。
		※給食後や、午睡後にオムツにおしっこが出ていた。
【8月・10月の目標】		◎トイレでの排泄ができるようになる ◎トイレでの排泄に喜びを見える ◎布パンツで過ごす
【トレーニング方法】		◎トイレに座る回数を増やす(朝のおやつ後・給食前と後・午睡前と後) ◎トイレにゆっくり座る時間をもちつ ◎布パンツで過ごす時間をもちつ
月	日	経過
8	1	・午前中毎日パンツで過ごす。
	2	・トイレに誘うとほとんどおしっこが出るようになる。
9	1	※午前中にパンツで過ごすのが、給食後の失敗が多かった。
	13	・「しっしっ」と言って、おしっこの漏らしを言葉で伝えるようになった。 ※午前中はパンツで失敗なく過ごせる日が増えた。
10	4	・「うんち」と言って、トイレに行き、排便が見られるようになる。
		※おしっこの漏らしは言葉で保育者に伝える。 ※午前中はパンツでほとんど失敗なく過ごせるようになってきた。
【11月の目標】		◎午前中失敗なくパンツで過ごせるようになる。
【トレーニング方法】		◎午前中、パンツで過ごす。 ◎K・Hちゃんの排泄ペースや、言葉に合わせてトイレに誘う。
月	日	経過
11	17	・給食後、パンツにおしっこを漏らす。
	18	・午前中、パンツで失敗なく過ごせた。
	21	・午前中、パンツで失敗なく過ごせた。午飯後、自らトイレに行き、おしっこが出た。
	22	・朝のおやつ後、トイレで排便あり。午前中、パンツで失敗なく過ごせた。
	24	・午前中、パンツで失敗なく過ごせた。
	25	・朝のおやつ後、オマルと言ったトイレに行き、ウンチが出た。午前中パンツで失敗なし。
	28	・給食前にパンツにおしっこを漏らす。給食後、トイレで排便あり。
	29	・午前中、パンツで失敗なく過ごせた。
	30	・給食後、パンツにおしっこを漏らす。トイレで排便あり。

個別トイレットトレーニング No.2
 名前 K・Hちゃん

【12月の目標】		◎午前中失敗なくパンツで過ごせるようになる。
【トレーニング方法】		◎午前中パンツで過ごす。 ◎K・Hちゃんの排泄ペースや、言葉に合わせてトイレに誘う。
月	日	経過
12	1	・給食前、パンツにおしっこを漏らす。
	6	・給食前、パンツにおしっこを漏らす。
	15	・給食後、パンツにおしっこを漏らす。
	16	・朝のおやつ後、パンツにおしっこを漏らす。
		※上記以外は午前中失敗なくパンツで過ごせた。 ※排便は給食後によくあり、トイレでの排泄に成功している。 ※排便失敗すると「してして」と言っておしっこを保育者に伝えるようになった。
【1月の目標】		◎午前中失敗なくパンツで過ごせるようになる。
【トレーニング方法】		◎午前中パンツで過ごす。 ◎午前中、パンツで過ごせた日は、午後もパンツで過ごす。 ◎K・Hちゃんの排泄ペースや、言葉に合わせてトイレに誘う。
月	日	経過
1	17	・給食前、パンツにおしっこを漏らす。
	24	・給食後、パンツにおしっこを漏らす。
	26	・給食後、パンツにおしっこを漏らす。
		※上記以外は午前中失敗なくパンツで過ごせた。 ※午前中失敗なくパンツで過ごせた日は午後もパンツで過ごすのが、午睡後失敗している。 ※排便は給食後や、おやつ後によくあり、トイレでの排泄にすべり成功している。
【結果】		トレーニング開始からトイレでの排泄がよくなった。成長とともにトイレでの失敗を言葉で伝えたり、おしっこはときどき「しっしっ」と言って排便前に伝えることもできるようになった。排便は自分でトイレに行ったり、「うんち」と言って保育者に伝え、トイレで失敗なく排便できるようになった。排泄の開始は日によって違い、言葉に合わせてトイレに誘うようにした。午前中はだいたい失敗なくパンツで過ごせるようになってきたが、まだ失敗もあるのでこのままトレーニングを続けていきたい。

個別トイレットトレーニング
 (パターン3) 名前 A・Aちゃん

【5-7月の目標】		◎トイレ(オマル)に慣れる ◎トイレに行くことが習慣づく
【トレーニング方法】		◎朝のおやつ後・給食後・午睡後に必ずトイレに送る
月	日	経過
6	20	・トイレに慣れず、トイレに行く時間をして待つことが多かった。
		・少しずつトイレに慣れ、オマルに慣れるようになる。
7		
【8月・10月の目標】		◎トイレでの排泄ができるようになる ◎トイレでの排泄に喜びを見える ◎布パンツで過ごす
【トレーニング方法】		◎トイレに座る回数を増やす(朝のおやつ後・給食前と後・午睡前と後) ◎トイレにゆっくり座る時間をもちつ ◎布パンツで過ごす時間をもちつ
月	日	経過
9	25	・午睡後にオマルでおしっこが出た。
		※オマルに座るが、排便は見られなかった。
10		※オマルに座るが、排便は見られなかった。
【11月の目標】		◎トイレで排泄を1度でもする
【トレーニング方法】		◎トイレにゆっくり座る時間をもちつ ◎トイレに無理なく誘う(朝のおやつ後・給食後・午睡後)
月	日	経過
11		
【結果】		※トイレでの排泄は1回もみられなかった。 ※他の子どももいると落ち着いてトイレに座れない様子が見られた。

個別トイレットトレーニング No.2
 名前 A・Aちゃん

【12月の目標】		◎トイレで排泄を1度でもする
【トレーニング方法】		◎トイレにゆっくり座る時間をもちつ ◎トイレに無理なく誘う(朝のおやつ後・給食後・午睡後)
月	日	経過
12		
【1月の目標】		◎トイレで排泄を1度でもする。
【トレーニング方法】		◎トイレに1人でゆっくり座る時間をもちつ ◎トイレに無理なく誘う(朝のおやつ後・給食後・午睡後)
月	日	経過
1	14	・給食後にトイレでおしっこが出た。
	16	・朝のおやつ後、トイレでおしっこが出た。
	17	・給食後にトイレでおしっこが出た。
	23	・朝のおやつ後、トイレでおしっこが出た。
	24	・朝のおやつ後と給食後にトイレでおしっこが出た。
	26	・朝のおやつ後、トイレでおしっこが出た。
【結果】		※1人でトイレにゆっくり座る時間をもちつ、トイレで排泄がみられるようになった。 ※トイレでの排泄を促めると、足踏でトイレに行くようになった。 12月までほとんど排便がなく、トレーニング方法に慣れたが、性格からして環境に慣れることに時間がかかると思っていたので、トイレに無理なく誘うことを心がけた。また、まわりにお友だちがいて着る姿が見られなかったので1人でトイレに座る時間をもちつ、着る姿がみられるようになってきた。子どもの性格を理解してトレーニング方法を考え、取り替えることが大切だということがあった。

【実践Ⅱ】おむつはずしについて考える

～子どものペースに合わせたおむつはずしのチャンス～（平成24年度）

1) 子どもと家庭の実態把握

・調査対象

2歳児9名（男児4名 女児5名 新入園児2名）

1歳児23名（男児7名 女児16名 新入園児13名）

0歳児8名（男児5名 女児3名 新入園児8名）

計 40名

平成21年12月～平成24年2月生まれ

・実態調査

個人面談・懇談などからの家庭の様子

・アンケート調査（平成24年6月・9月に実施）質問項目は以下の通り

《6月のアンケート項目》（アンケート配布）（資料3）

A-1 家庭での様子をチェック

- ・今現在、自宅でトイレトレーニングを行っている
- ・おまるを利用している
- ・トイレを利用している

B-1 子どもの発達をチェック

- ・一人で歩いたり座ったりできる
- ・自分でズボンや下着の上げ下げができる
- ・人のまねをしたがる
- ・単語が話せ、自分の意思で「イヤ」と言える
- ・簡単な指図に従うことができ、コミュニケーションがとれる
- ・排尿間隔が空くようになり、ある程度排尿時間の予測がつく
- ・子ども本人がトイレトレーニングに興味を持つ

C-1 親の心のゆとりをチェック

- ・子どもの性格を把握していて興味、意欲を誘導できる
- ・トイレトレーニングを行うための時間的余裕がある
- ・失敗しても叱らないで励まし、成功したら褒める心のゆとりがある

《9月のアンケート項目》（口頭によるアンケート調査）（資料4）

A-2 家庭での様子をチェック

- ・保育園では時間を決めてトイレに誘っていますがお子さんの様子はどうですか
- ・トイレやおまるに誘っていますか
- ・トレーニングパンツや布パンツを使用することがありますか

B-2 子どもの発達をチェック

- ・おしっこやうんちがしたいときや失敗したときにサインがありますか
- ・トイレでおしっこが出た後や出る前に知らせてくれることがありますか
- ・おしっこの間隔が定まってきましたか

C-2 親の心のゆとりをチェック

- ・「おしっこだね」「うんちがでたね」とお子さんに声をかけてあげることですか
- ・おむつ外しで困ったことなどはありますか
- ・クラス便りでのトイレトレーニングのワンポイントアドバイスがご家庭で何か参考になることがありましたか

2) 保育園生活での排泄状況の把握と援助

①対象児

②個別行動観察

- ・個別指導計画・発達チェックリスト・保育観察記録・個別観察記録の記述

③排泄チェック表の記入・排泄間隔の把握

④排泄チェックリストによる調査・分析

⑤トイレトレーニングの完了した園児の保育園生活の変化

【結果と考察】

1) の実態調査を記述式、口頭式アンケートで行った。A-1、A-2の家庭の様子では、6月から9月のトイレトレーニングの取り組みは、2歳児は75%→78%とあまり変化がないが、1歳においては、35%→61%と2倍近くに伸びた。これは、保育園での排尿成功を伝えることにより家庭での関心の高まり、取り組みが始められた結果である。B-1、B-2の子どもの発達の変化は、6月の2歳児ほどの項目においても数値が高く、トレーニングの始めの時期に達しているの見極めることができたが、子ども自身はトイレトレーニング自体に余り興味を示していなかった。9月には、おしっこが出ている感覚や排尿後の感覚を少しずつ実感し、親に伝えられる時期に達していた。1歳児は、おしっこやトイレのイメージが少しずつふくらみはじめ、9月には、排尿の間隔がまだ定まっていないが、生活の節目で誘うと成功が多くなった。C-1、C-2の親のゆとりでは、トイレトレーニングを行うための時間的余裕がないことがうかがえた。また、1・2歳児に比べ、0歳児の親はトイレトレーニングの意識が低かった。おむつはずしの悩みが2歳児に高かったのは、トレーニングを開始しているため失敗も多く、保護者にゆとりが持てないからであろう。アンケートを行うことにより、家庭での姿がよくわかり、保育園でのおむつはずれを進めていく上でとても重要であった。

以上、実態調査より、保護者がトイレトレーニングについて何らかの不安を抱えていることが示された。以下に示すように個人面談やアンケート調査の中でいくつかの質問があ

った。

家庭での悩みQ&A

Q 姉は早かったのに。男の子は取れにくい。

A きょうだいでも、一人ひとり違います。ゆったりとした気持ちで進めてください。

Q 「おまるにお座りしてみようか」といっても「イヤイヤ」ばかり。

A 無理に誘うのをやめて、しばらく様子を見てみましょうね。

時にはひと休みしてもいいかもしれませんね。

Q トイレを嫌がるのでシールをはったら、今度は遊んでばかり。

A トイレを飾りすぎると目移りしてしまい、おしっこに集中できなくなってしまいますよ。

Q トレーニングパンツはどんなものがいいですか。

A お下がりなどで大丈夫ですよ。もし、新しい物を準備されるのなら子どもが気に入った布パンツにすると濡らしたくないからトイレでしたり、失敗がわかっていいのではないのでしょうか。

2) 保育園生活での排泄状況とその支援の取り組みでは、トイレトレーニングの進行は、個人差が大きいだけでなく、生活上のさまざまな要因によっても大きく左右される。調査期間内（7ヵ月）に、母親の妊娠・出産、母親や子どもの病気・入院、転居等により、トレーニングの中断・後戻り等が生じたケースがあった。

トイレトレーニング中の保育園における誘導タイミングは

- 1 保育者が時間を決めて子どもをトイレに誘導する。
- 2 活動の合間にトイレに誘導する。
- 3 子どもの排尿シグナルを保育者が察知して誘導する。
- 4 ギリギリまでトイレに誘うのを待つ。
- 5 「おしっこ」などの言葉で予告があり、保育者が誘導、あるいは子どもが自分でトイレに行く。

などがあります。一方、トレーニングを開始した保護者の関心事は、子どもがいつ「おしっこ」と言い(予告)、トイレでの排尿に成功することだと思われる。

そこで保育者がトイレトレーニングの進行状況の目安にしている、子どもの排尿予告に現れる時期と回数の変化を追い、保育者が誘導して行う排尿回数との比較を試みた。

子どもが自分から「おしっこをしたい」ことを保育者に伝え、トイレでおしっこができた場合を「予告成功」、保育者が率先して子どもをトイレに連れて行き、トイレでおしっこができた場合を「誘導成功」と定義し、排泄チェックリストにより、調査・分析を行った。

排尿の「誘導成功率」「予告成功率」とこれらの合計である「トイレ合計成功率」の推移について、代表例を資料5（ア）～（オ）に示す。

ここで「予告成功率」の変化に注目すると、おむつはずしの進行は大きく5つのタイプに分けることができる。

(ア)「予告成功」が急に現れ、そのまま増加する場合 (13%)

- ・促されなくても尿意を感じたら、一人でトイレに行く。
- ・綿パンツで一日過ごせるようになった。

(イ)「誘導成功」が多くなり、「予告成功」がときどきある場合 (14%)

- ・自分からおしっこを教えてくるようになった。
- ・午睡中のおむつがぬれなくなってきた。

(ウ)「誘導成功」は多いが、「予告成功」がない場合 (16%)

- ・トイレでおしっこができるが、連れて行かないとおむつの中にしてしまう。
- ・排泄間隔があくようになってきた。

(エ)「誘導成功」が時々あるが、「予告成功」がない場合 (35%)

- ・排泄間隔が少し定まってきた。
- ・おしっこを失敗してもそのまま遊んでいる。

(オ)「誘導成功」はほとんどないが、トイレに興味を持ち始めた場合 (22%)

- ・誘うとおまるを嫌がらずに座ることができる。
- ・タイミングが合うとトイレでの成功がときどきある。

9月の口頭でのアンケート調査結果、おむつはずれ終了の子は2歳児5名となり、保育園生活の中でも大きな変化が現れてきた。また、10月下旬には、2歳児6名1歳児4名に増加した。そこで、おむつはずれの終了した子の保護者に①～④の項目で聞き取り調査を行った。①②について (資料6)

- ①トイレトレーニングを開始月齢
- ②トイレトレーニングの開始月
- ③トイレトレーニング完了までにかかった期間
- ④トイレトレーニングを始めた理由

家庭のトイレトレーニングの開始月齢は、その子のタイミングを見て1歳を過ぎたころから始める家庭もあり、幅の広さが見られた。開始月は気候のよくなる4月頃から始め、トイレトレーニング完了までにかかった期間は、1ヶ月という短期間の子もいたが、13ヶ月と長期間の子もいた。また、保育園が先に取り組みを始め、家庭での取り組みが後になるケースも2名あった。これらのケースは、母親の妊娠や出産により、保護者にゆとりがもてないため、保護者のタイミングで進めていくようにアドバイスをを行った。新入園児の中には、慣れない環境にとまどい失敗が多く見られ、おむつからパンツへの切り替えがスムーズに行えなかった子がいた。しかし、家に戻るとすぐにおむつからパンツに着替え、失敗がないケースもあった。

トイレトレーニングを始めた理由として「保育園でのトイレでの成功が高くなってきた

から」「おしっこ教えてくれるようになったから」「トイレに興味を示したから」「育児休暇に入り、時間的ゆとりが持てるようになったから」という声が多く聞かれた。

トイレトレーニングが完了した園児の保育園生活の変化（1～2か月前）を、（1）言語の発達（2）遊びの変化（3）社会性（4）運動・操作能力（5）排尿行動の5つに分類した。これらは、個別指導計画・発達チェックリスト・保育観察記録・個別観察記録の記述によるものである。

（1）言語の発達

- ・発音がはっきりしてくる。
- ・語彙が急に増える。
- ・二語文を話す。
- ・口まねをさかんにする。
- ・疑問文を言う。
- ・1～10くらいの数字を言う。
- ・身の回りの事象や経験したことを喜んで話す。

（2）遊びの変化

- ・ままごとごっこ遊びなどをする。
- ・絵本を1人で読む。（ページをめくる、絵を見て考える、しゃべるなど）

（3）社会性

- ・保育者やお友だちと同じことをしたがる。
- ・おもちゃの貸し借りができる。

（4）運動・操作能力

- ・高いところから飛び降りたがる。
- ・友だちと追いかけてっこをする。
- ・クレヨンなどでお絵かきをする。

（5）排尿行動

- ・トイレの誘導をすればおしっこができる。
- ・自分からトイレに行き座る。
- ・おむつやパンツを自分で脱いだりはいたりする。

このような成長の変化が見られるようになると、子どもが自分で「おしっこがしたい」と予告できる時期が近づいていることを保護者に伝えることができ、気持ちにゆとりをもってトイレトレーニングに取り組んでいけるのではないかと思う。

【まとめ】

平成23年度の研究は、データをたくさん取ることが子どもの実態を知ることにつながるという思いから、排泄チェック表を6月から翌年1月まで7ヶ月間にわたり毎日、調査し

た。6月から7月までは1日3回の記録をとり、8月から翌年1月までは、1日5回に回数を増やし記録した。その結果、子どもの様子を保育士が排泄チェック・個人トレーニング記録をつけることにより、保育園におけるトイレトレーニングの実施状況を調査・解析し、子どもの排泄発達やトレーニングの進め方にパターンがあることを知ることができた。

平成24年度の研究では、0・1・2歳児、6月から10月の一日の排泄チェック表の記録を行った。毎月5日間と設定することにより、保育士が無理なく、データを集めることができた。子どもの発達のペースに合わせて進めるおむつはずしを、保護者と保育者が共に進めていくことにより、「おしっこ」と言える排尿予告の増える時期があることが示された。この予告成功が急に伸びる時期について知ることが、排尿シグナルを観察することや、先を見通したトレーニングを進めるうえで、有効な手段となった。もともと子どもの排尿機能の発達には個人差がある。今回の調査からも排尿シグナルの現われ方、予告成功率の変化、予告ができるようになった月齢など、おむつはずれの進み方は子どもによって個人差が見られた。

保護者は、子どもの成長やトレーニングの進行などについて予測がつかないため、漠然とした不安を抱えながらトイレトレーニングをすることになりがちである。研究の取り組みで分かった、予告成功が急に伸びる時期の目安などを活用することによって、保護者と保育者がゆとりをもって、子どもの発達に沿ったトレーニングを進めていくことが可能となるであろう。

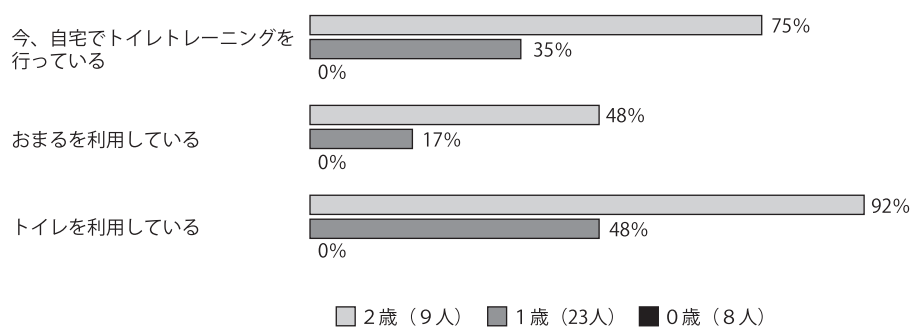
【今後の課題】

今回の研究で、保護者は排泄間隔が定まってくる頃に心のゆとりが出てきていることがわかった。そこで、誘導による成功が多くなってきた子の保護者に家庭での排泄チェック表をつけてもらうことにより、その子の発達状態を共通理解し、子どものペースに合わせたオムツはずしのチャンスを探していけるのではないかと考える。

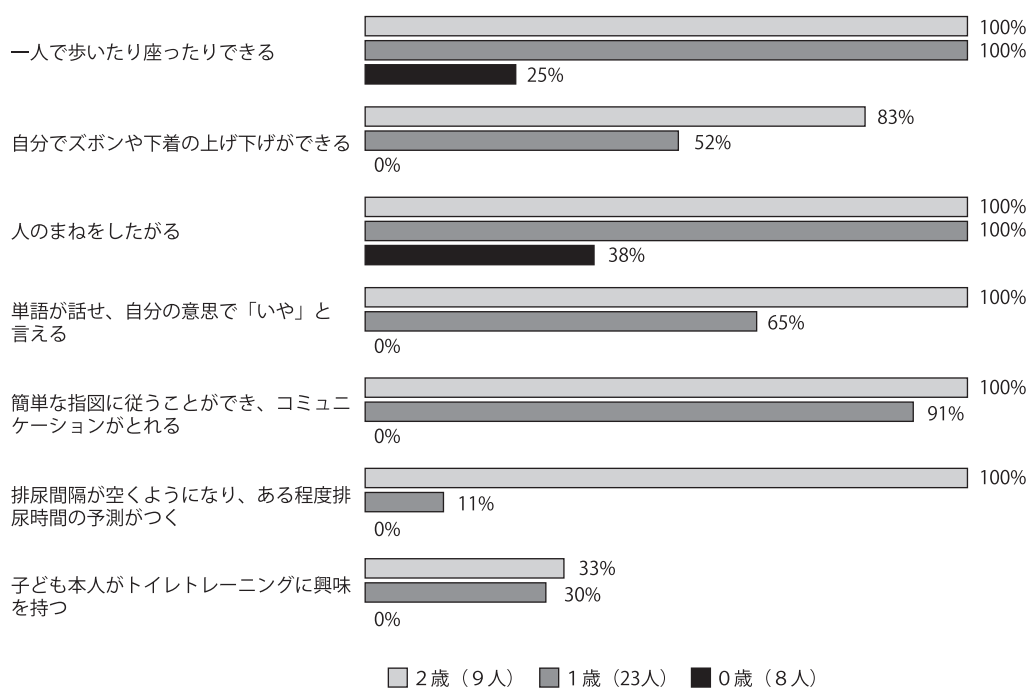
【参考文献】

- ・0・1・2歳児マニュアル 川原佐公 編著
- ・保育の友2009年10月 1歳児保育のヒントより 島内智秋
- ・1才2才のひよこクラブ2012年夏秋号 ベネッセコーポレーション
- ・AERA with Baby 朝日新聞出版
- ・「ママ、おしっこ」といえるまで 帆足英一
- ・月刊保育とカリキュラム2012年 ひかりのくに

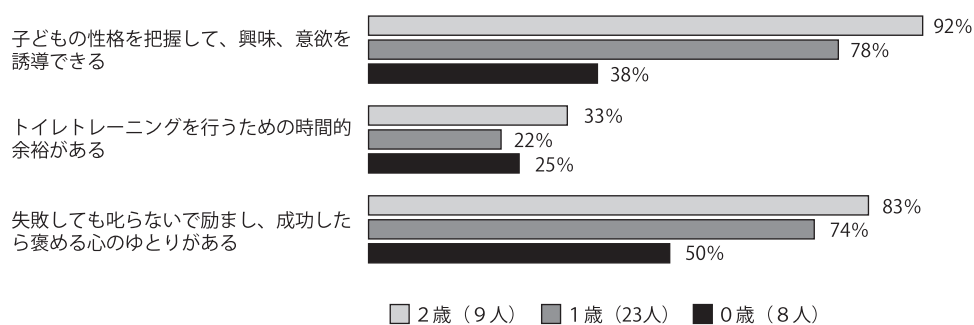
A-1 家庭での様子をチェック



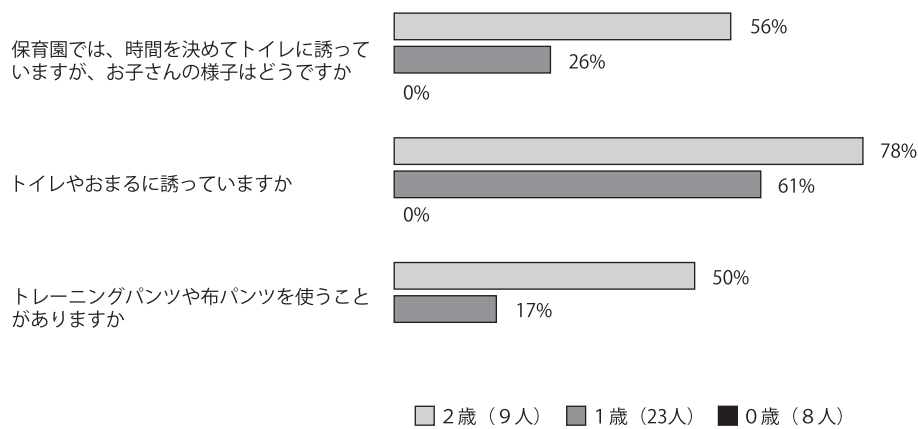
B-1 子どもの発達をチェック



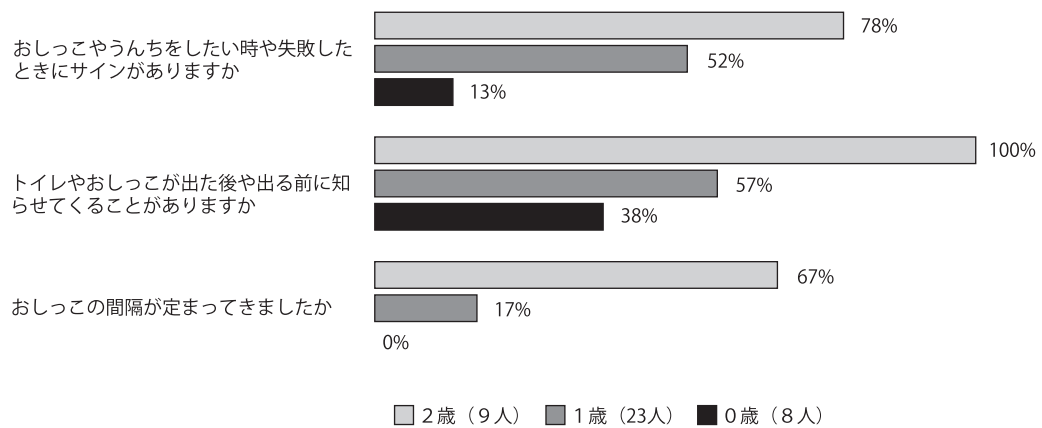
C-1 親のゆとりをチェック



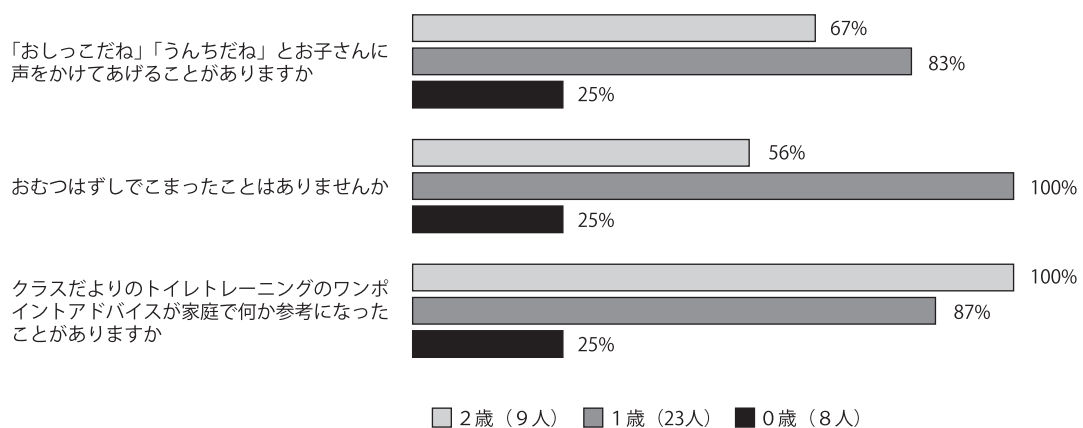
A-2 家庭での様子をチェック



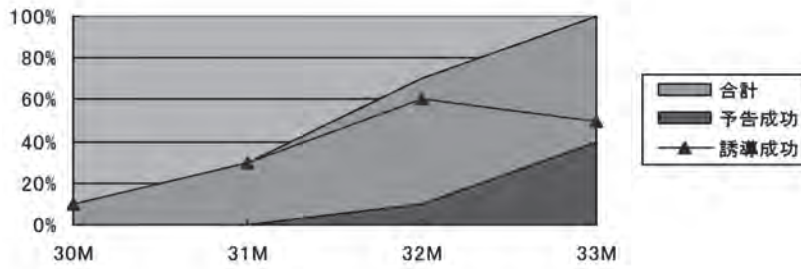
B-2 子どもの発達をチェック



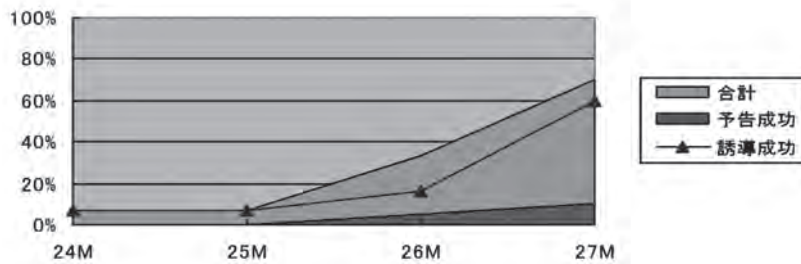
C-2 親のゆとりをチェック



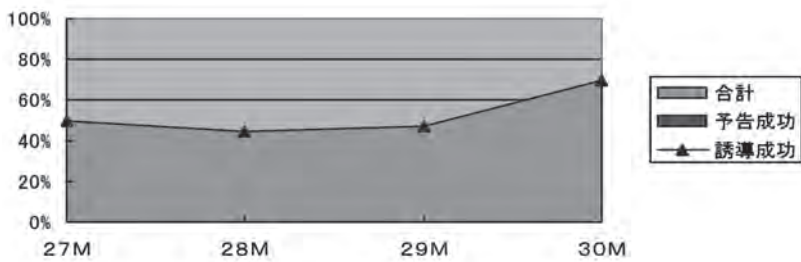
トレーニングの進行タイプ



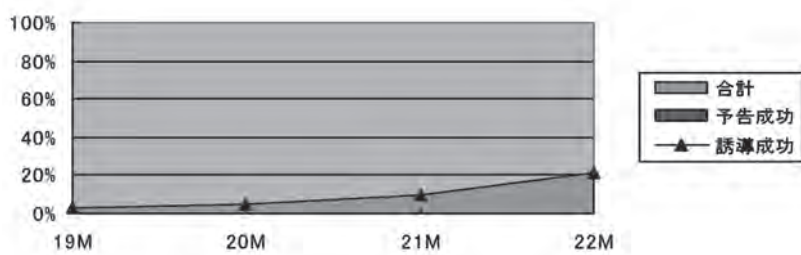
(ア) 予告成功が急に現れ
そのまま増加するタイプ
Y・Tちゃん
H22. 1月生まれ



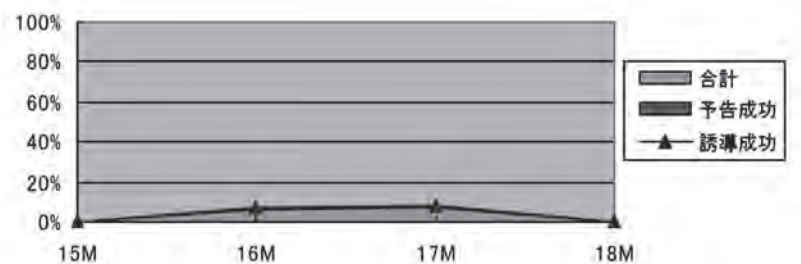
(イ) 誘導成功が多くなり
予告成功が時々あるタイプ
T・Hちゃん
H22. 7月生まれ



(ウ) 誘導成功が多くなり
予告成功がないタイプ
S・Yちゃん
H22. 4月生まれ

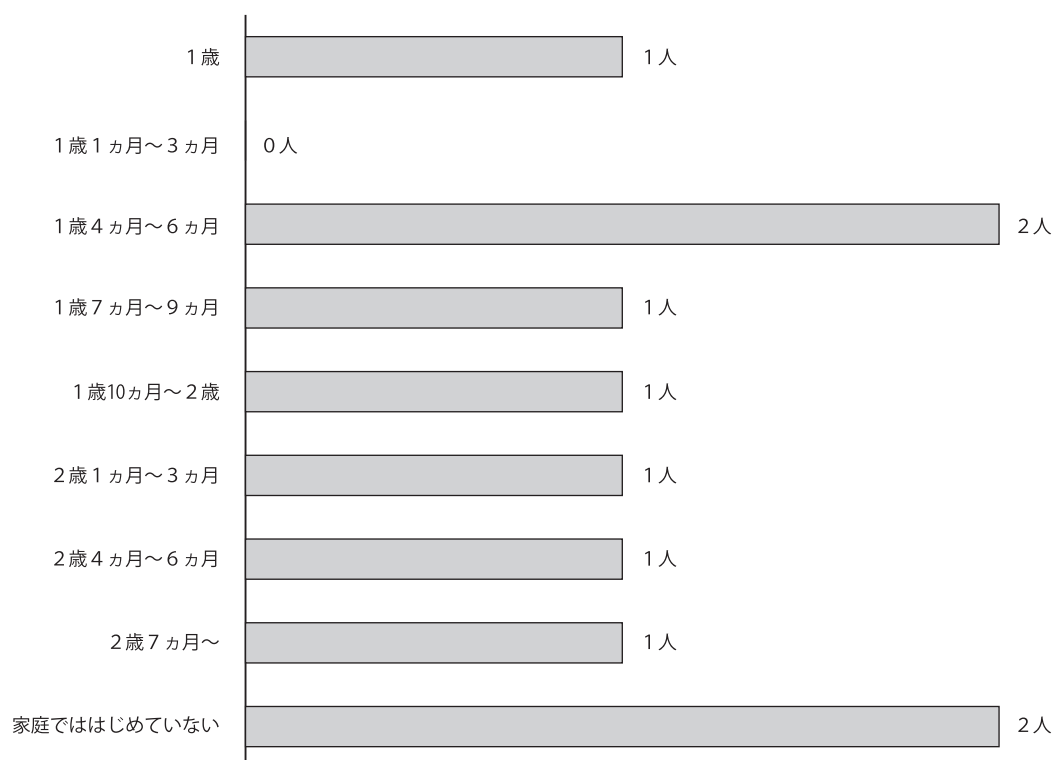


(エ) 誘導成功が少ないが
予告成功がないタイプ
K・Mちゃん
H22. 12月生まれ

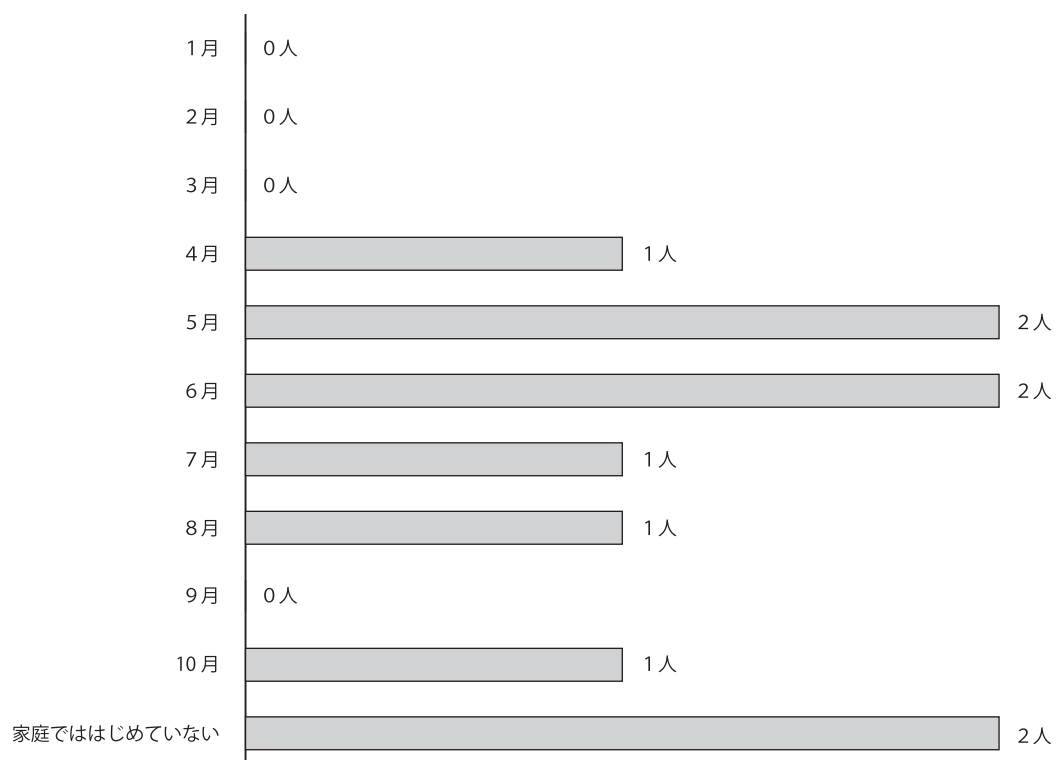


(オ) 誘導成功がほとんど
ないが、トイレに興味を
持ち始めたタイプ
J・Hちゃん
H23. 4月生まれ

トイレトレーニング開始月齢



トイレトレーニングの開始月



(4) 奨励賞〈課題研究・実践報告共通〉

課題研究① 人との関わり

「子どもと保護者との関係をつなぐ、保護者養育力向上をめざして」

伊能恵子（昭島ナオミ保育園・東京都）

課題研究① 人との関わり

「人との関わりを通して、人権を尊重する心を育てる保育を推進するために」

大神敬一（多々良保育園・福岡県）

課題研究① 人との関わり

「子どもは親の信を感じて成長を始める」

渡辺太郎（寒田ひめやま保育園・大分県）

課題研究② 遊びと学び

「木製手作り玩具」

糸健太郎（キッズタウンにしおおい・東京都）

課題研究② 遊びと学び

「未満児における遊びと保育環境について

～実践から見えてきた子どもの育ち～」

知念幸江（第2愛心保育園・沖縄県）

実践報告

「自立を育む楽しいキャンプ」

宮田芳子（筑水保育園・福岡県）

課題研究① 人との関わり

「子どもと保護者との関係をつなぐ、保護者養育力向上をめざして」

東京都・昭島ナオミ保育園 伊能 恵子

1. 研究目的及び背景

保育所の保育実践は全て『保育所保育指針』に基づいて行われている。この『保育所保育指針』（以後、『指針』と呼ぶ）によると、「子どもは、様々な環境との相互作用により発達していく」ものである。そして「特に大切なのは、人との関わりである」として、「愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して大人と子どもの相互の関わりが十分に行われることが重要である（波線部筆者）」（第2章）と説明している。この「大人」という文言には、保育所の職員のみならず、子どもに対し最も影響力のある保護者をも含んだ全ての「大人」が含まれている。ところが、昨今家庭養育力の低下が指摘され、保護者による虐待問題も後を絶たない現状にある。

当園における保育現場でも保護者から寄せられる「自分の子どもが可愛く思えない」といった相談や「うちの子が1位にならないなら、運動会に出場させたくない」といった苦情に近いような要望等が年々増加してきた。これらの相談や苦情、要望は、保護者自身の子どもとの関係性、或いは子どもを取り巻く仲間集団や環境との関係性を保護者が構築出来ていないことに起因しているのである。

そこで本稿では、『指針』の第6章「保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は特に重要なものである」といった主旨を踏まえ、子どもと保護者との関係性をつないでいくために、保育所が出来ることを考えたい。そのために『指針』における「(1) 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援は、子どもの保育との密接な関連の中で、子どもの送迎時の対応、相談や助言、連絡や通信、会合や行事など様々な機会を活用して行うこと」（波線部筆者）に沿って実践研究をすすめることにする。

2. 研究方法

子どもと保護者との関係性をつなぐにあたり、その関係性が健全であることをめざして行いたい。そのためにはまず、保護者のわが子を見る目が健全なものとなるように視点を定める。その手法として、ループリックを用いることにする。

そもそもルーブリックとはラテン語の“ruber”から派生した語で多様な資料や情報から子ども達の育ちの実現状況を知るために活用する得点化指針のことを言う。

アメリカの就学前教育現場では数十年前より盛んに用いられており、以来現在に至るまで、育ちの共有化をはかる手段として、ごく当たり前のように常用されているものである。⁽¹⁾

わが国日本においては、国立政策研究所を中心として「評価規準と評価資料と評価基準の3点セットをルーブリック」⁽²⁾と捉え何校かのモデル校で使用され、実践報告が出されている程度であり、保育所現場において活用されているとは言い難い現状にある。

当園では、このルーブリックを保育士による保育実践の自己評価及び共有化のためにすでに活用しているが（これについては日本教育新聞に掲載：①参照）、本稿では子どもと保護者との関係性を築くために用いたい。

①日本教育新聞社



(1) 当園のルーブリックについて

前掲の『指針』では、子どもが人と関わるための保育援助の窓口として、例えば第3章保育の内容1(2)イ「人間関係」領域が定められ、その中のねらいの1つは「②身近な人と親しみ関わりを深め、愛情や信頼感を持つ」とされている。このねらいが達成されるには、0歳児ではどういった姿が望ましく就学前の5歳児ではどういった姿が望ましいのかという、子どもの育ちを共有化する手段としてルーブリックを活用し、日案、週案、月案の全てが小学校へ送付する「保育所児童保育要録」へと連動されるよう、様式の開発を行った。（これについては『日本生活科・総合的学習教育学会第18号』に掲載：②参照）

本稿ではその一部を活用して開発した「保護者用保育要望録」「家庭養育力育成計画表・経過録」といった2つの様式を使用し、子どもと保護者との関係性をつなぐ実践研究を行いたい。

②『日本生活科・総合的学習教育学会 第18号』



①「保護者用保育要望録」

「保護者用保育要望録」とは、その名が示すとおり保護者が保育所の保育実践に要望を出すことの出来るシートである。ただし、その要望は保護者自身の子ども（以下、わが子と称す）に対する健全な育ちについての願いのみに視点を定めてある。

ここで、以下「表1：保護者用保育要望録」（③参照）の中に記載されている「内容（評価規準）」の欄について説明を加えたい。

③表1：保護者用保育要望録

さくら組（5歳児）氏名： _____ 平成 ____年 ____月 ____日生 担任： _____

内容		月	5月	11月	2月	3月
		内容 (評価基準)	要望等	要望等	要望等	要望等
養 護	生命保	①				
		②				
		③				
	情緒安	④				
		⑤				
教 育	健康	①				
		②				
	人間関係	①				
		②				
		③				
	言葉	①				
		②				
	表現	①				
		②				

人にとって「生まれてからの生活の場全てが教育の場であり、乳幼児期の経験や学習内容は（略）人生の中でも最も大切（波線部筆者）」⁽³⁾ であると言われている。こうした、「乳幼児期の経験や学習」が効果的に行われているか否かについて明確にしていくにあたり、何を経験し「何を学ぶべきか目標をあらかじめ定めた評価規準を作成する必要がある。」⁽⁴⁾ そこでこの欄には、卒園時に望ましい子どもの育ちの姿をめざし、0歳から5・6歳までの各年齢の各領域における、教育的な願いやねらいといった評価規準を明確にしたものを載せている。これは保育士が自己の保育実践を改善していくために使用するものと同様のものであり、「表1：保護者用保育要望録」では保護者がその評価規準を使用することになる。そのため表1のシートに沿ってわが子についての願いや要望を出していくことは、保育所在籍期間となる6年ないし7年間一貫して、保育所のめざす健全育成をわが子に当てはめ保育士と同じ視点で願い、要望していくことになる。同時にわが子との健全な関係性を構築する具体的な方法や、それについての課題を知ることにもなり、保護者のわが子へ向かう養育姿勢が健全になる。そして保護者の養育力向上も期待できるのである。さらに保育士側からすれば6年ないし7年間の子どもと保護者との健全な関係性構築のプロセスを知ることにも可能となる。

②「家庭養育力育成計画表・経過録」

次に「表1：保護者用保育要望録」に沿って保護者が望んだ、わが子の健全な育ちにむけて家庭においては具体的にどのようなわが子と関わっていくのかといった点に着目する。そのためには前掲の、表1における教育的な願いやねらい等を示す評価規準を達成する際、保護者が家庭でわが子とどのように関わっていくのか、すなわち健全な関係性の姿は何かを具体的に明示する必要がある。そこで作成したのが以下の「表2：家庭養育力育成計画表・経過録」(④参照)である。例えば5歳児の領域「人間関係」に着目すると、表1：「保護者用保育要望録」の「内容（評価規準）」欄には、『指針』の「(イ) 内容」を踏まえた評価規準として、例えば「①近い大人や友達等と積極的に関わり喜怒哀楽を共感し合い思いやる」といった文言が明記されている。一方、「表2：家庭養育力育成計画表・経過録」において同じ項目に着目すると「①お家の人やお友達を思いやれるように語りかけている。」となる。

この表2の「内容（評価規準）」欄においても入所時から保育所卒園時まで求めたい、わが子との健全な関係性を、各領域、各年齢において家庭でどのように構築していくのかといった、具体的な健全な関係性の構築方法について作成されたものである。ゆえに表2の「内容（評価規準等）」は0歳児用のものから、5歳児用のものまで存在している。ちなみに、これらの文言は全職員と0歳から5歳の子どもを持つ全保護者とともに作成したものであり、保護者会開催ごとに改善を重ねている。

以上のように「表2：家庭養育力育成計画表・経過録」を使用することはすなわち子ど

もに対する健全な関わり方を保護者が知ることになり、子どもと保護者との健全な関係性が常に構築されることになる。これにより保護者の養育実践が健全になり養育力がさらに向上する効果が期待できる。

④表2：家庭養育力育成計画表・経過録

さくら組（5歳児）氏名： 平成 年 月 日生 担任：

内容		月	5月	11月	2月	3月
指針	内 容 (評価基準)	家庭での 留意点	家庭での 留意点	家庭での 留意点	家庭での 留意点	
養 護	生命保	①				
		②				
		③				
	情緒安	④				
		⑤				
教 育	健康	①				
		②				
	人間関係	①				
		②				
		③				
	言葉	①				
		②				
	表現	①				
		②				

(2) 当園のルーブリックを用いることについて

前述した両者の表、すなわち当園のルーブリックを用いることは、いずれの年齢であっても、子どもとの健全な絆づくり、すなわち関係性構築のための目標を「表1：保護者用保育要望録」で設定し、次に「表2：家庭養育力育成計画表・経過録」にて家庭ではどのようにわが子との関係性を健全に築いていくのかといった具体的な実践を考えることになる。そしてこの両者を使用して実践研究することは、子どもと保護者との関係性構築の計画・実践・改善といったP.D.C.Aサイクルの経過を研究することにもなり、かつその結果を第三者と共有することが可能になるのである。

さらには『指針』でいう保護者支援の為の「会合や行事等様々な機会」として保護者会を設定し、四半期に一度定期的で開催する。そしてその場で両者の表の記載を組織的に一貫して行う。これらの工夫により、保育所在籍期間の6年間ないし7年間において子どもと保護者との健全な関係性が構築され、かつ6年間ないし7年分の組織的な保育援助の研究成果もみえてくることになる。

3. 研究結果及び成果

2. 研究方法にて述べた、ルーブリックをベースにした「表1：保護者用保育要望録」と「表2：家庭養育力育成計画表・経過録」を使用することにより、以下の研究結果及び成果が得られた。これらについて、(1) 事例「A君とママの成長」を通して、(2) その他の成果、(3) 今後の課題とに大別して、順に述べる。

(1) 事例「A君とママの成長」を通して

まず2. 研究方法にて述べた様式を使用して実践研究を行った結果について、事例「A君とママの成長」と題し、考察したい。

現在、小学校1年生に進学したA君の背景を述べると、A君は1歳児クラスに入所したが、その当時は父子家庭であった。そのため実家に預けられることの多いA君であった。その後まもなく再婚して新しい母親に下の子が生まれると、A君の背中や顔、首に大きなあざをつくって登園することが多くなり、市役所、子ども家庭支援センターの両者から虐待通報も寄せられ全関係機関が連携して見守る必要のある「要保護家庭」となった。その直後も火傷などをおって登園したり、A君の1日の全食事内容は保育園における昼食のみであるといった、不安定な状態が続いていた。

そこでA君ママにはとり急ぎ『指針』でいう、「会合や行事など様々な機会」(前掲)として設定している保護者会に出席してもらうことに努めた。その際、入園したばかりのA君の弟、K君へむけた「表1：保護者用保育要望録」及び「表2：家庭養育力向上計画表・経過録」を提示し、子どもとの関係性構築の重要性について示した。これをきっかけに、A君ママが弟K君の保護者会と共にA君の保護者会にも出席するようになった。

①A君ママの「保護者用保育要望録」の作成

初めて出席することになった保護者会の折に、A君ママが記入した結果が「表3：A君(3歳児)ママの保護者用保育要望録」(⑤参照)である。

この「表3：A君ママ(3歳児)の保護者用保育要望録」におけるチェックは、A君ママ自身がつけたものである。この表にチェックをつけるという行為は、A君の成長を応援していこうという姿勢が作られ始めたことを意味し、A君との健全な関係性を構築しようとし始めたと言える。A君ママが保護者会に初めて出席した11月の欄には、チェックを1つしか付けていなかったが、4ヶ月ほど経った3月にはチェックの数が3つになり、少しずつA君の育ちに関心を示すようになってきたと言えよう。

さらに具体的にみると、11月、2月では「養護」の領域欄における「生命保持」の項目、「②排泄：便所での排泄を1人で行なえるようになる」にのみチェックを付けていた。ところが、3月に至ると「教育」の項目欄「人間関係」領域の「③自分で出来ることは自分でする」

と「健康」領域の「②健康を保つ技術を身につける」と「⑤安全・危険がわかる」にチェックを付けている。すなわち、排泄に慣れてきたA君には健康を保つ技術を身につけて自分で出来ることは自分で、かつ安全・危険がわかるようになって欲しいといった親として安否を考えられる程、徐々にA君を受け入れ、A君との関係性を築き始めたのである。

⑤表3：A君（3歳児）ママの保護者用保育要望録

ちゅうりっぷ組（3歳児）氏名： A君 担任：

内容		月	5月	11月	2月	3月
指針	内容 (評価基準)	要望録	要望録	要望録	要望録	要望録
養 護	生命 保持	①		* 1		
		②		✓	✓	
		③				
		④				
	情緒 安	④				
		⑤				
教 育	健康	①				
		②				✓
		⑤				✓
	人間 関係	①				
		③				✓
	言葉	①				
②						

次に表4は、卒園間際までを収録した「A君ママ（5歳児）の保護者用保育要望録」（⑥参照）である。この中で注目すべきは、A君の成長に対する願いや要望の変化である。A君の4歳児期までは、身の回りの1つ1つの技術といった、A君が生きていくのに必須と言われる個人の能力に着目したものであった。ところが表4のA君が5歳児期になると「教育」の項目「人間関係」領域の「②友達など協同遊びの中で決まりを守ろうとする」や「言葉」領域の「②保育士や友達の話を注意して聞き、受け入れたうえで相手にわかるように話そうとする」といったA君が社会といった集団の仲間入りに必要な能力を焦点とした項目にチェックが付き始めたのである。その上、チェックの数の増加については一目瞭然である。

⑥表4：A君（5歳児）ママの保護者用保育要望録

さくら組（5歳児）氏名： A君 担任：

内容		月	5月	11月	2月	3月
指針	内容 (評価基準)		要望録	要望録	要望録	要望録
養 護	生命保持	①		✓	✓	✓
		②	✓			
		③				
		④				
	情緒安	④				
⑤						
教 育	健康	①				
		②				✓
	人間関係	①				✓
		②	✓	✓	✓	✓
		⑤	✓	✓	✓	✓
	言葉	①				
		②	✓	✓	✓	✓

続いて表5：「家庭養育力育成計画表・経過録」（⑦参照）を通したA君ママとA君との関係性が築かれていくプロセスに着目する。まず表4：「A君（5歳児）ママの保護者用保育要望録」と「表5：A君ママの家庭養育力育成計画表・経過録」を比較すると、例えば5月の欄までは「生命保持」の①にチェックがついていない。ところが、11月になると表4・表5の両方にチェックが付き始めている。この欄について詳しくみると表4では「①食事：楽しい雰囲気様々な食事を進んで食べようとする」となっており、表5では「①食事：楽しい雰囲気になるよう心掛け、様々な食材を提供している」という文言となっている。つまり表4では、A君に楽しく食事をしてもらいたいと願い、表5ではそれに向けて家庭で心掛け、実践していることにチェックをつけているのである。確かに5歳児クラスにおける11月前後から、A君が家庭で朝ごはん・夕ごはんを必ず食べて来るようになっていて欠食状態がほとんどなくなっていた。それを職員間で喜び合っていたのである。

また、他の欄について説明を加えれば、5月では領域「人間関係」の欄の表4⑤にチェックが付いているが表5には付いていない。すなわち、「⑤良い事・悪い事を自分で考え、自分で行動する」の項目について表4では要望として出してA君との関係において望んではいるが、表5の家庭においてはその関係性づくりを実践していないということになる。しかし11月になると表4における願いとしてのチェック項目と表5における家庭でのわが子に対する援助としてのチェック項目が一致し始めている。これはつまりA君との健全な関係性への願いと家庭での健全性へ向けた関係づくりの実践が一致し始め、A君ママ

が養育力を向上させ始めたということである。さらにいえば表3の11月、すなわちA君ママが保護者会に出席し始めた時のコメント欄の*1には「特になし」と書かれており、以降空欄であった。ところがA君が卒園間際の表5*2には「あと少ししかありませんー!!」と書かれ、*3には「ありがとうございました。小学校です!!」と、絵文字付きでコメントが書かれる程になった。もちろんA君ママにとってA君を本当にわが子として受け入れ、子育てが楽しいと思えるような成長を遂げ、A君との関係を構築し続け、かつ養育力を向上させていくには、時間を要するであろう。だが、「保護者用保育要望録」と「家庭養育力育成計画表・経過録」の記載継続等により市役所を経由した虐待通報がなくなり、A君の体の傷や日々の欠食状況がみられなくなったのは事実である。そして残りの半年間、関係機関とは連絡を取り合うのみとなり、無事卒園していったことは喜ばしい成果であり、この成長を小学校へとつなげていきたいと願っている。

⑦表5：A君（5歳児）ママの家庭養育力育成計画表・経過録

さくら組（5歳児）氏名： A君 担任：

内容		月		5月		11月		2月		3月	
		指針	内容 (評価基準)	家庭での 留意点	家庭での 留意点	家庭での 留意点	家庭での 留意点	家庭での 留意点	家庭での 留意点	家庭での 留意点	
養 護	生命 保持	①			✓		✓	*2	✓		*3
		②									
		③			✓						
		④	✓				✓		✓		
養 護	情緒 安	④									
		⑤									
教 育	健康	①									
		②									
	人間 関係	①			✓		✓		✓		
		②					✓		✓		
		⑤			✓		✓		✓		
	言葉	①									
②				✓		✓		✓			

(2) その他の成果

以上のような2つの様式を使用することにより保護者会出席の意義が明示されると出席率が98%となった。現在それを維持出来ていることは、本稿の研究に付随した成果であると言えよう。さらに、保育士側からみた成果とすれば、前述したように表1、表2の「内容（評価規準）」の欄は、保育士の使用するルーブリックと全て連動しているので在園期間の6年ないし7年間の保育実践を踏まえ、どのような経過をたどって各々の親子間の健

全な関係性が構築されたのか、さらにはどのように家庭における各保護者の養育力が向上されたのかをみることができる。そしてこうした保育士、保護者が共通のルーブリックを使用することは、保育所にとって子どもと保護者との関係性をつなぐばかりではなく、子ども・保護者・保育士の三者により保たれている保育実践の質をも向上させることになった。そして、職員間における保育実践や保護者支援についても、その実践が共有され保育所保育の一貫性が強化されたことも大きな成果であった。

また、第三者評価機関における質問項目の「お子さんの気持ちや様子・子育てなどについて職員と話したり、相談することが出来ますか」という質問に92%が「はい」と答え、「お子さんは保育所で大切にされていると思いますか」という質問には98%が「はい」と答えるという結果が得られていることも研究成果の1つと言えよう。そして保護者から寄せられた自由記述の「子どもの成長に非常に満足です。」や「親として学ばせてもらっています。」などをベースに第三者評価機関からは「保護者と園との価値観が共有されていると推測される」（平成23年度東京都福祉サービス第三者評価・評価結果報告書抜粋）とコメントされた。これらも外部から得られた成果であると言えよう。

以上、本稿の子どもと保護者との絆づくり・関係性をつなぐ取り組みが、保護者と園と子どもとをつなぐ結果になったことが喜びにあふれる成果であった。

（3）今後の課題

今後の課題としては、本稿で実践研究したルーブリックを今後共全職員そして全保護者と共に改善し続け、常に子どもとの健全なる関係性をいかに築き続けていくかということがある。また本稿では子どもと保護者との関係性をつないでいくにあたり、『指針』でいう「会合や行事など様々な機会」を活用したものを主として実践研究を行ったが、「子どもの送迎時の対応、相談や助言、連絡や通信」といったことも含めた実践研究については現在進行中であり、データ処理や分析方法等の面で課題となっている。これらの課題を踏まえながら、今後とも子どもと人との関係性を築く保育所保育の質向上を目指して励んでいきたい。

引用文献

- (1) James Barton and Angelo Collins, Portfolio Assessment, Dale Seymour Publications. 1997. p.19
- (2) 高浦勝義『ルーブリックを活用した授業づくりと評価①小学校編』教育開発研究所 平成18年 p.37
- (3) 前橋 明編著『乳幼児の健康』大学教育出版 2010年 p.11
- (4) 高浦勝義『絶対評価とルーブリックの理論と実際』黎明書房 2006年 p.77

課題研究① 人との関わり

「人との関わりを通して、 人権を尊重する心を育てる保育を推進するために」

福岡県・多々良保育園 大神 敬一

1 問題の提起

「保育所保育指針」において、「人権」という文言は、平成2年の改定時においては、保育の目標に「人権を大切にすることを育てる」ことが掲げられた。

そして、平成20年4月の改定時においては、保育指針は従来の局長通知から厚生労働大臣による告示となって、「子どもの人権の尊重」が保育園の社会的責任として明記された。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課発行の「保育所保育指針」解説書には、4. 保育所の社会的責任—(1) 子どもの人権の尊重—保育所は子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人一人の人格を尊重して保育を行わなければならない。—と記述してある。

また、福岡市においては、平成24年4月に、「福岡市人権保育指針」が福岡市こども未来局長から福岡市内の全保育園に通知された。

「福岡市人権保育指針」には、

- ・人と関わる力、豊かな感性など、生涯にわたる生きる力の基礎を育む保育を行うこと
 - ・自分や他の人を大切な存在として思う心や人権を大切にすること、人権の視点視点から行動する力の基礎を培うこと
 - ・すべての子どもたちが、お互いを尊重し、認め合える人間関係づくりに努めること
- 等々の人権保育の視点が示されている。

そして、「福岡市人権保育指針」末尾は、人権保育の推進・充実が図られるよう、保育園全体で組織的・計画的に取り組むを進めるとともに、職員は、豊かな人間性と人権感覚が身につくよう、研修の充実や自己研鑽に努めることが明記されている。

厚生労働大臣の告示で、「子どもの人権の尊重」が保育園の社会的責任と明記されているので、全国のそれぞれの保育園（保育所）で、「人権を尊重する保育」が、意図的・計画的・継続的に実践されていると思料するものである。

保育園における「人権を尊重する保育」は、それぞれの保育園の保育目標の達成を目指しながら、地域の実情や保育園の実態及び児童の発達段階に即して行われなければならないと考える。

そこで、保育現場では、「人権を尊重する保育」は、どのように具体化し、実践していけばいいかについて、実践事例をもとに問題提起をしてみたい。

2 テーマ設定の意図

保育現場における人権保育（人権を大切にし、尊重する保育）は、どんな観点で、どんなねらいのもとに、どのように指導していけばいいのかを明確にするために、本テーマを設定した。

3 テーマ解明のための検討内容

- ① 「人権を尊重する保育」の観点
- ② 「人権を尊重する保育」の主たるねらいと具体的な内容
- ③ 「人権を尊重する保育」の実践事例

4 「人権を尊重する保育」の具体策

- (1) まず、「人権を尊重する保育」について、論を展開するには、「人権とは…」の考え方を明確にしなくてはならないと思う。

「人権とは何か」と問われたら以下のように答えたい。

- ① 人権とは一人間が人間らしく生きる権利である。
- ② 人権とは一人間が幸せに生きる権利である。
- ③ 人権とは一人間が胸を張って納得して生きていく権利である。
- ④ 人権とは一人間が一生を全うする権利である。

- (2) 次に、「人権を尊重する保育」について、論を展開するには、「人権尊重の保育とは…」についても考え方を明確にしなくてはならない。人権尊重は人間尊重の概念で考えなくてはならないと思う。それは、究極的には「人間の尊厳と基本的人権」に関わる奥の深い、幅広い概念だと思うものである。つまり、かけがえのない存在としての人間を大切にしたい気持ちを育てる保育が、「人権を尊重する保育」である。

- (3) さらに、「人権を尊重する保育」を保育現場において展開するためには、その視点が示されなければならない。その視点は次の五点に集約できるのではないだろうか。

- ① 「命の大切さに気づかせる」保育
- ② 「自分やお友達の立場を理解して、ちがいと認め合う」保育
- ③ 「お友達の心の痛みを感じ取る」保育
- ④ 「自分の周りの人に感謝し、友達への思いやりの心を持つ」保育
- ⑤ 「言葉づかい等の基本的生活習慣を定着する」保育

- (4) 最も大切なことは、保育所保育指針の保育の内容との関連性の検討である。つまり、養護と教育の関わるねらい及び内容から逸脱しないように各保育現場で適切な保育の内容を構成していかなければならない。保育所保育指針に示された養護の内容は、「生

命の保持」と「情緒の安定」である。保育所保育指針に示された教育の内容は、「健康・安全」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域である。

「人権を尊重する保育」は、「養護」と「教育」のすべての分野において推進しなければならないのであるが、特に関連性のあるのは、「情緒の安定」「健康安全」「人間関係」「言葉」の領域であると考えられる。

5以下で、実践事例をもとに論を進める。

5 「人権を尊重する保育」の実践事例

- ① 主題「ことばづかい」
 - ② 主な活動—毎日の言葉遣いから気持ちの良い言葉について考えよう。
 - ③ 本時のねらい—保育園での言葉づかいをふりかえり、相手の心を思いやる優しい言葉づかいが明るくて楽しい人間関係を作るのに大切であることを理解させる。
 - ④ 子どもの実態と課題—別添資料①（保育指導案）参照
 - ⑤ 子どもの活動と保育者の配慮—別添資料①（保育指導案）参照
 - ⑥ 子どもの反応と指導の概要
 - (1) —うれしかったことば…一緒に遊ぼう。ありがとう。なかまにはいいよ。かわいいよ。だいすき。がんばれ。すごい。「○○ちゃんにいじわるするといかんよ」といって、自分をかばってくれた。「つかっていいよ」と貸してくれた。
 - (2) —悔しかったり、悲しかったことば…うるさい。サイテー。じゃまよ。仲間に入れんよ。あんたと遊べん。へんな人。ばかちん。きもい。でぶ。ちび。遊んでやらん。教えてやらん。さるみたい。
 - (3) —「ばか」「まぬけ」こんなことばはいやだな—についての反応は全員が賛同し、自分が言われたら「悲しくなる。」「泣きたい。」「悔しい。」等々の気持ちを表明してくれた。
 - (4) —全員が「いやなことばは、おそらにとんでいくと、いいな。」との作者のことばに、納得し、共感していた。
- *そこで、本時の指導のポイントである「日頃の保育園での言葉づかいで、何気なく口にした言葉で、お友達が悲しくなったり、いやな気持ちになったりしてキズつくことがある。」「乱暴な言葉は、乱暴な行為を生み出す元にもなる。」ので、「日頃から温かくて、優しく、思いやりのある言葉かけをして、楽しい、仲の良い保育園生活をおくる。」ことの大切さについて考えさせて、まとめとして、40分間の保育は終了した。
- *「人権を尊重する保育」の究極の目標は、集団生活での温かい人間関係作りと仲間意識作りにあると考える。

6 「人権を尊重する保育」推進の今後への展望と課題

児童憲章の前文には、「人として尊ばれる。」とあり、児童の権利に関する条約、日本国憲法にも、人権の尊重については明記してある。各保育園においては、「保育の質を高め、児童の最善の利益を保持する。」責務が課せられているのである。

我々保育関係者が「人権を尊重する保育」の推進は、保育の原点であると認識して、日常の保育にあたるべきだと考える。そのためには、各保育現場では、どのように「人権を尊重する保育」を具体化していけばいいのかについて、共通理解されねばならないと考え、下記の3点を提起したい。

① 保育者自身が、自分なりの「人権保育観」を確立すること

「観」とは、「見方なり考え方」であり、自分なりの哲学をもつことである。「人権を尊重する保育」に対する確乎たる信念の元に保育に当たることが大切であると考え。

② 保育園内の言語環境をチェックし、整備すること

保育関係者の園児に対する言葉かけや保育関係者相互の言葉遣いに園児の人格を傷つけたり、人権を阻害する発言はないかをみんなで、点検し合って、注意しあって、不適切な発言がないように留意する。また、保護者向けに発行する「園便り」「クラス便り」の文章表現や内容の文言に「人権」の視点から見て、不適切な記述はないかを点検する。

③ 「一日の保育の流れ」の随所に、「人権を尊重する保育」の指導の場があることを共通理解して保育にあたる。一別添資料② 信頼関係を育むための先生と園児のふれ合いのとかかわり方 参照

7 むすび

「保育所保育指針」の保育のねらいおよび内容には、次のように記述してある。…「人間関係」の領域では、第1章（総則）3 保育の原理(1)保育の目標「(ウ) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに、自主、自立及び強調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと」とある。

保育園生活の全分野において、「人権を尊重する保育」を推進することによって、園児一人一人に人権意識を基盤を身につけさせる、内面化し、発達段階に応じた態度化にまで高めていかねばならないと考える。

これからも、我々保育者は、「我が保育園では、人権を尊重する保育を実践しています。」と声高らかに、自信を持って主張していきたい。

5. 予想される子どもの活動と保育者の配慮		保育者の配慮および留意点
時間	予想される子どもの活動	
10:30	<p>1 ことばから受ける感じを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ありがとう ・ごめんね ・だいいじょうぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な場面を設定して考えさせる。 *うれしかった言葉 *悔しかった言葉 *悲しかった言葉
10:35	<p>2 作品「わるぐち」を読んで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作者の優しい心が表れているところ ・作者の願いについて ・「ばか」「まぬけ」と言われたときの気持ち 	<ul style="list-style-type: none"> ・作者の「わるぐち」の作品にこめられた優しさを見つけて出させて、自分の考えと重ね合わせる。 *この作品で一番好きなどころについて考えさせる。 *作者の願いについてもじっくりと考え、気づかせたい。 *「ばか、まぬけ」の言葉について各自で考えさせる。
10:45	<p>3 相手の心を気遣う言葉について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手が泣いている時 ・相手が困っている時 ・相手が喜んでいる時 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりやいつくしみの心がなければとげとげしい言葉や人に不快感をあたえるような言葉が、出てしまふことに気づかせる。 ・乱暴な言葉は、乱暴な行動にもつながる原因になることにの気づかせていきたい。
11:00	<p>4. これまでの言葉づかいについて反省し、気をつけたいことについて話しする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・優しい言葉づかいは ・これから自分が気をつけること 	<ul style="list-style-type: none"> ・日ごろから温かくて思いやりのある言葉を交わすようお願い、保育園でのいろいろな集団生活の場面で、一人一人が心がけていこうとする意欲を喚起するようにまとめたい

5歳ふじ組 [男児20名、女児28名] 計48名

保育指導案

平成23年7月21日(木)
指導者(大神 敬一)

1. 主な活動

毎日の言葉遣いから気持ちの良いことばについて、考えよう。

2. ねらい

保育園での言葉遣いを振り返り、相手の心を思いやる優しい言葉遣いが明るくて楽しい人間関係を作るのに大切であることを理解させる

3. 子どもの実態と課題

5歳児は、基本的な生活習慣がある程度身に付き、運動機能は益々伸び仲間と共に活発に遊ぶ時期である。

この時期の子どもは、目的に向かって集団で行動する場面が多くなってくるのである。

この時期になると、遊びになると、自分たちの遊びを發展させ、より一層楽しくするために、自分たちでも決まりを作ったりすることも出来るようになる。

さらには、集団生活場面において自分なりに考えて判断したり、批判する力が少しずつ身に付く時期でもある。しかし、ささいなことで口論になったり、けんかになったりすることも多々目につくこともあるが、逆にけんかを自分たちで解決しようとする気持ちも芽生えてくるのである。

集団生活を円滑にするためには、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりとといった社会生活に必要な基本的な力を身につけさせることはきわめて大切なことである。

そこで、身近な日常生活の中の言葉づかいに着目させて、児童の作品「わるぐち」を元に、相手の心を気遣う優しい言葉は、周りの人の心にもうおのをもたしてくれることに気づかせたい。

児童の言語活動は、日常生活と密接な関連があるので、毎日の生活の中で実践を深めるために、家庭との連携を深めながら家庭でも相手の気持ちをおもいやる言葉づかいができようように仕向けたいと考える。

(別添資料②) 信頼関係を育むための先生と園児のふれあいの場とかかわり方

場面	目の前の園児を最優先	園児を肯定的に見る	積極的な関心	心を開き誠実な態度
朝の出会い あいさつを交わしながら	* 先生の所に来て話しかけたら、手をやすめてしっかり聴く。	* 明るい挨拶がクラスの中で広がるよう指導・援助する。	* 先生自ら、明るい挨拶をする。	* 先生自ら、温かい言葉をかける。
朝のお喋り さわやかな一日のスタートになるように	* 出欠確認、健康チェック等の過程で園児一人一人と温かいまなごしを交わす。 * 気分がすぐれない子、機嫌がよくない子、体調がすぐれない子に気をつける。	* 園児一人一人の自己実現ができように話し相手になってやる。 * 自己実現の場を設定する。	* 目当てとして、遊び用具の始末トイレの履物の整頓等に気が回るように仕向ける。	* あかるく、やさしく、たくましく、の保育目標を念頭において、楽しい園生活が過ごせるように、常に目配り、気配りを怠らない。
クラスごとの保育 遊びが学習の基本をふまえながら、園児の立場に立って	* 一人一人の遊びの工夫や活動の独自性を大切にする。 * 園児一人一人の些細な発言やつぶやきにも耳を傾け、最後まで聞き届ける。 * いつも自分を先生が見守ってくれているという安心感を持たせる。	* 園児一人一人に活動の場を多く与え園児一人一人の思いや願いを実現させるように配慮する。 * 一人一人の活動の成果を認め、クラス全体で称讃してあげる。	* 個別指導に重点をおき一人一人の状況に応じて支援、援助して温かく対応する。 * 園児の興味や関心を高めるように環境構成や教材教具を工夫する。	* 園児一人一人をじっくり観察しながら、温かい言葉掛けを心がける。
食事をする たのしく おいしく	* 楽しく食事ができるように、座席のつくり方やグループ構成等を工夫する。触れ合って食事ができるように配慮する食欲の有無にも配慮する。	* 自分たちのできる準備を後始末などの活動を大切ににする。	* 好きな人とばかりで食べるのではなくて、だれとでも仲よく食べられるように仲間作りを指導する。	* 園児の興味、関心のある話題をなげかけて、楽しい雰囲気づくりに心がける。
自由遊びをする だれとでも なかよく たのしく	* 危険がないように、安全確保に気をつけて、一人一人の遊びに、目配りと気配りをする。	* 園児同士の個人的なトラブルやグループ相互の対立等が発生したときには、双方の言い分をしっかりと聴いてあげる。	* お部屋や園庭の片隅で、一人で遊んでいる園児がいたら、声をかけて、友達との遊びの輪の中に入れてあげる。	* みんなで、楽しく安全に、そして、仲よく遊べるように、いろいろな工夫やはたらきかけをする。
お帰りのお集まり 園生活の一日を ふりかえる。	* 一日の保育園の生活をふりかえり、遊びのことやお友だちのことについて考えさせる。	* おりこうさんのお友だちについて紹介し、みんなで称讃してあげる。	* 親切な行為、思いやりにみちた言動をみんなで出し合い、認め合う。	* 「今日も保育園に来て楽しかった」「明日も、保育園に来るのが楽しみだ」と園児一人一人が満足感、充足感をもって帰宅できるようにする。
登園・降園の送迎 車での送迎、自転車等での送迎	* 個別に「お早うございます、さようなら」と声をかける。	* 挨拶がしっかりとできるように園児を励ます。	* 挨拶を交わすことの大切さについてわからせる。	* いつでも、だれでも、挨拶ができるようにする。

(別添資料③)

わ る ぐ ち

「ばか、あほ。」

「まぬけ。」

こんなことばは いやだな。

なんで こんなことばが あるの。

わたしは きらいだな。

もっと おともだちを (やさしく)

してあげたいな。

(いやな) ことばは、おそらに

とんでいくと いいな。

課題研究① 人との関わり

「子どもは親の信を感じて成長を始める」

大分県・寒田ひめやま保育園 渡辺 太郎

1. 朝から寝転がるAに何が

Aは今日も朝から元気がない。8時前後の登園。送迎は殆ど父親。別れる時、言葉のやり取りもタッチもしない。「おはよう」と呼びかけても元気のいい挨拶が返ってくることは殆どない。

9時からクラス毎の活動が始まる。友だちと輪になって手を繋ぎ、挨拶をしたり、歌ったり体操したりする。Aは始めから最後まで仲間と一緒に活動することは殆どなく、部屋の片隅にうずくまっている時間が長い。メインの活動が始まると参加はするが長続きしない。20分位経つと体が斜めになり、ついに横になってしまう。部屋に居ることに疲れてくると、隣の芝生（共用物を置いてある多目的スペース）に行って寝転がる。このような時でも周りの状況は把握しており、眠り込んだりすることはない。

ブロック遊びやゲームは好むが、集団での遊び特に汗が出るような遊びは好きではない。理解力があり、集団活動への呼びかけには応じるが、即行動に移すことは困難である。

食は細く給食にも時間がかかる。途中で疲れてくると椅子から下り、床に寝転がることもある。美味しそうに食べている姿はあまり見かけない。

（筆者は）触診と称して子どもの体に触ることがある。繰り返す中に、Aの骨が弱々しいことに気づいた。これは睡眠と関係しているのではないかとの思いが湧いてきた。抱えたついでにくすぐることもあるが、声を立てて笑わないことも発見した。

Aの心や体に何か起きてきている。心配になってきた。4歳児クラスまでの生育歴を中心に、気がかりなことや今後に向けての対応のし方を考えてみたい。

2. 仮設

朝から寝転がり活動に集中できないのは、睡眠不足が原因となっており、その背景に親子関係があるのではないか。

お便り帳の記述や送迎時の様子等から、Aはすることなすことに母親から注文がつき、自信を無くしているのではないか。親（母親）から認められていない、自己肯定感が低い等、精神的欲求不満が潜在的にあるのではないか。そのことが睡眠不足を常態化し、今日の生活を招いているのではないかと推定した。

3. 問題点の所在を探る

(1) 家族構成

- (2) 健康の記録
- (3) 保育記録
- (4) 視診・問診・触診
- (5) アセスメントシート
- (6) エピソード記録
- (7) ギルバーグの判断基準

【検証】

(1) 家族構成

父親(自営業)、母親(会社員)、本人(5歳)、弟(2歳)の4人。4歳時の送迎は殆ど父親。

(2) 健康の記録

- ①身長・体重・頭囲等は順調に生育。
- ②歯科検診の記録にも特記事項なし。
- ③定期検診及び1歳半・3歳児検診ともに異常なしの診断。
- ④4歳児検診(発達障がい児巡回専門員派遣事業・希望園)で指摘事項あり。※後述

(3) 保育記録(抜粋)

□21年6月(2歳10ヵ月)

- ・自分の話に夢中になり、保育士の話を聞かない。
- ・目を見て話を聞こうとせず、すねてすぐ床に寝転んだりする。家庭でも同じらしい。

□22年3月(3歳7ヵ月)

- ・午睡は時間一杯眠り機嫌よく目覚めるが、暫くはボーッとしていて行動に移すことができない。
- ・弟が生まれるという不安や寂しさからか甘えが酷くなり、夜泣きすることもある。

□22年5月(2歳9ヵ月)

[保育園] ⇒Aが3歳児クラスに上がるのに併せて、専任フリー保育士を配置した。活動に時間がかかる、こだわる。園庭に出洩る等の傾向が一層強くなったこともあり、クラス担任の負担を考えこのような園内人事に踏み切った。

- ・ますます集団行動が苦手になり、気が進まないで行動に移すことができない。
- ・母親に対してのみ過剰反応を取ることが多い。母もそうなったらお手上げという。
- ・何事にも時間がかかり、歯磨きに30分かかることもある。

[保育園] ⇒保育園からの勧めを受け入れ市立保健センターへ出向いたが、保健師や臨床心理士のアドバイスを受け入れようとしなかった。それ以降一回も出向いていない。

□23年4月(4歳8ヵ月)

- ・一日を通して床にゴロゴロしていることが多い。朝の活動（挨拶・歌・体操等）や帰りの活動（持ち物の整頓や準備等）にも時間がかかり、自力でできないこともある。
- ・自分の中で嫌なことがあると、顔を伏せて暫く泣き続ける。

□24年3月（5歳7ヵ月）

- ・室内でふらふらして友だちや壁にぶち当たることがある。傷を見つけ、「その傷、壁に当たってできたの」と尋ねると、「打ったかもしれんー」と答えたこともある。
- ・4歳時検診の結果を母親に伝えると、このときは前向きに受け止めてくれた。その直後から暫くAが生き生きと生活する姿が見受けられた。
- ・生活発表会の後は（心配していたより）上手くいったので喜んだ。ご褒美にヒーローものの玩具を買って貰った。親子とも緊張感から解放された優しい表情を見せた。

□24年5月（5歳9ヵ月）

- ・友だち、担任、部屋が変わったにも拘わらず自分から適応しようとする姿勢が感じられるようになってきた。
- ・体を使った集団遊びはあまり見られないが、一つ一つの活動に年長さんとしての自覚が芽生えつつあるように感じられる。寝転がる回数も少なくなりつつある。

（4）視診・問診・触診—筆者の体験より

子どもの心身の状態を把握しておきたいとの思いから、出合い頭に挨拶をするよう心がけている。子どもの顔色や歩き方を観察する。睡眠の状態や朝食の有無は歩き方にも現れる。「〇〇ちゃんおはよう」「朝ごはん食べた？」等と声をかける。返事から朝の生活や親子関係まである程度窺える。トイレの行き帰りや自由時間には子どもの体にタッチすることもある。ハンドタッチ、ボディタッチ、抱きかかえる、くすぐるまで発展することもある。繰り返す中に、ある子どもに共通する問題点を発見した。Aにも当てはまる。未満児の時期に、精神的ストレスを感じたに違いないと思われる子どもたちだ。

〈〈発見！骨が小さい〉〉

- ・体の大きさに比べて骨が小さい。四肢をはじめ背景に至るまで全ての骨が弱々しい。
- ・体の軸がしっかりしていない。骨の周りに着いている筋肉も薄く弱い。筋肉を鍛える運動をしていないということが考えられる。
- ・頬の筋肉が着いていない。顔面が青白いことも共通点だ。

〈〈ストレスによる睡眠不足が原因？〉〉

- ・骨の成長は、肉体活動を休止し、重力から解放される睡眠中に行われる。睡眠時間（または深い睡眠）が充分に取れてなかったことが考えられる。
- ・入眠できるためには、安全・安心の環境が保証されていることが前提となる。入眠・覚醒の儀式が不十分なため、質の高い睡眠が取れてなかったことが考えられる。

⇒父親の話によると、9時頃入浴、兄弟で玩具遊びをし、催促されて10時頃床に入るが

寝付くのは11時から12時頃だという。

〈〈笑い筋が育っていない〉〉

- ・くすぐっても笑わない。多少身をよじることはあるが声を出して笑うことはない。笑う行為は心を開いている時である。自分は愛されているという幼児期の最も大切な学習が未完成のままに終わっているようにも思われる。
- ・声を出して歌おうとしないことも共通している。声は内面をさらけ出す行為である。
⇒お便り帳などによると、夜寝る前にも玩具の奪い合いや就寝時刻のことで叱られることが多く、朝も食事から登園準備のことでがみがみ叱られているという。入眠前後の大切な時間帯が疎かにされているのではないかと推察される。

※④ 4歳時検診の結果：市立保健センターの臨床心理士・保健師による診断。(24.1)

◆下半身が弱いようである ◇手先は器用である ◆支援が必要である。

[保育園] ⇒個別懇談(24.3)の歳に4歳時検診の結果を伝える。母親は結果を受け入れることができず、「自分の子どもがおかしいと言われている気がする。」「勝手に検診され、結果を言われてもありがた迷惑」と不快の表情を見せた。取り敢えず保健師さんには連絡を入れますとの約束をし懇談を終えた。

[保育園] ⇒数日後(24.3)、母親が保健師さんと話すことができ、3月に一度療育センターに行くことが決まった。活動中に横になったり部屋出ていくことはあったが、保育士との受け答えはしっかりしていた。母親からのお便りにも、「困った困った…」から「絶好調…」との内容が増えた。母親の情緒が安定しているように感じられた。

□24年3月(5歳7ヵ月)

- ・療育センターからの帰りの車の中で、「ママががみがみ言わない方がいいって言われたよ」というと、「ほら、やっぱりがみがみ言わんでといったやろ」とすかさずAから言われましたという母親からの報告があった。その後暫くは母親もAも以前より表情が明るくなった。しかしそう長続きはしなかった。母親もAへの対応を変えようとしているようには見えなかった。

[保育園] ⇒4歳児クラス最後の個別懇談会(24.3)で、Aに対して、保育園がこれまで心がけたこと、お願いしたいことを伝えた。

- ① 環境が変わる前に、個別に状況を知らせていくようにしました。
- ② 理解力はあるので視覚的な情報を提示し、活動に見通しを持てるようにしました。
- ③ 自らの意志で活動して貰えるよう、選択肢を提示し決定権を渡すよう配慮しました。
- ④ 睡眠が充分に取れてないと体に力が入らず集中力も生まれにくい。早寝・早起き・朝ごはんの習慣をつけましょう。入眠の際に優しい言葉がけをすると良く眠れます。

(5) アセスメントシート(母親記入 24.4月 5歳8ヵ月)

- ・朝、なかなか目が覚めないで、早寝早起きができるように生活習慣をきちんとして

いきたい。

- ・運動神経はよいが疲れ易いので、縄跳びや自転車こぎ等でインナーマッスルを鍛える運動をさせて欲しい。
- ・友だちと協力していろんなことに挑戦し、達成感を味わい自身を付けて欲しい。
- ・自分が思ったこと感じたことを言えるようになって欲しい。
- ・泣いてもよいからきちんと話せるようになって欲しい。

(6) エピソード記録：専任フリー保育士の記録より

◇添い寝をして会話をしている時、Aの口から気になる言葉がこぼれてきた。(23.5)

～～ママ、ぼくのこと あんまり好きじゃない～～

「弟のBくんかわいい?」「うんかわいいよ」「ママもBくんのことかわいいうっていう?」

「うん いうよ」「Aくんのこともかわいいうっていうでしょ」「ママ ぼくのことあんまり好きじゃない…」

[保育園] ⇒これはAの心の奥底に響いているかもしれない極めて重い言葉である。母親に近づき褒めて貰いたいのに叱られ、弟から母を奪われている。「そんなことないよ」「ママはAくんのことと同じくらい好きだよ」と言ってAを抱きしめた。

◇添い寝をしている時、こんな言葉も聞かれた。(24.1)

～～あんな してみようと思ってるんやけど できんに。何でか分からん～～

[保育園] ⇒信頼する人にしか打ち明けられないAの本音と受け止めた。頭では分かっているが、次の行動にすぐ移ることができない、Aの今の姿であろう。保育士は、Aと一定の距離を保ちつつ、分かり易い行動目標を提案することが大切と考えた。

(7) ギルバーグ及びサトマリの診断

A母子は2度にわたり専門機関を訊ねたが正式な診断を受けるまでには至らなかった。保育園では専任フリー保育士を中心に園内検討委員会で2度にわたり診断を試みた。

ギルバーグの診断基準		H23.6	H24.6
A	社会性の欠陥（極端な自己中心性）	4項目中 2つ該当	2つ該当
B	興味・関心の狭さ	3項目中 2つ該当	2つ該当
C	決まりや興味・関心の押しつけ	2項目中 2つ該当	2つ該当
D	話し言葉と言語の特質	5項目中 2つ該当	2つ該当
E	非言語コミュニケーションの問題	5項目中 2つ該当	2つ該当
F	運動の不器用さ・神経発達の検査成績が低い	2項目中 1つ該当	1つ該当

サトマリの診断基準

H23.6

H24.6

A	社会的孤立	4項目中 2つ該当	2つ該当
B	社会的相互作用の欠陥	5項目中 5つ該当	4つ該当
C	非言語コミュニケーションの欠陥	7項目中 4つ該当	3つ該当
D	話し言葉と言語の特質	6項目中 2つ該当	2つ該当

4. 考察

- ① Aが生き生きとした場面があった。療育センターに出向いた時である。自分を正當に評価してくれる人に、出会える日を待っていたように思われる。自分に対する母の態度が改まることを期待しているようにも思われる。母親がAと向き合おうとしている時、Aには安らぎの時間が流れる。
- ② 専門機関による正式な診断を受ける機会はまだに実現していない。保育園での総合的な判断（上記診断を含む）では、アスペルガー障がい疑いを持っている。
- ③ 目覚めが悪く朝ごはんから登園支度に時間がかかる。毎日のように母親から叱られた状態で登園しているので、Aは落ち込んだまま一日を過ごすことが多い。
- ④ 保育園でも寝転がり集中できない状況が常態化している。専門書によると、骨や体の成長は、ノン・レム睡眠に入った直後に発射される成長ホルモンと深く関わっているという。医学的な知見を得た訳ではないが、睡眠不足が原因の一つであるに違いない、睡眠時間の確保と共に、入眠及び覚醒の前後を心穏やかに過ごすことが、質の高い睡眠に繋がってくるものと考えられる。
- ⑤ アセスメントシートの記入には、母親のAに対する期待感が見られる。しかし、一方的な願いに終始し、反省や具体的な改善策等は見られない。保育園の勧めで専門機関に出向きはしたが助言を聞こうとはしなかった。
- ⑥ 親に反発するAに救いがある。Aなりに克服していこうとする姿勢が少しずつではあるが見られるようになってきている。

5. 今後の課題

- 母親がAの真の姿に気づき認めることが出発点だ。難しい課題だが克服したい。
- 園での様子を丁寧に伝え、Aの成長に係わる子育てのヒントを提供していきたい。
- どのような行動にも必ずAなりの理由がある。さらに細かく行動を観察・理解し、Aが自己肯定感を高めていけるよう、支援し続けることが指導者に求められる。

参考文献

- 眠りは心と身体と頭脳の栄養：神山 潤 著
- ガイドブック アスペルガー症候群：トニー・アトウッド 富田真紀 他訳
- よくわかる発達障害：小野次郎・上野一彦・藤田継道 編

課題研究② 遊びと学び 「木製手作り玩具」

東京都・キッズタウンにしおおい 桑 健太郎

〈はじめに〉

キッズタウンにしおおい保育園では、園にはまだない、魅力的な玩具を、男性職員で作ろうという話が持ち上がり、その玩具によって子ども達の遊びの幅が広がれば良いと考えた。作る玩具の条件としては以下のことに重点を置いた。

1. 壊れにくい。
2. 今まで園には無かった種類の玩具。
3. 複数名で楽しめる。
4. 安全性の高いもの。

以上の4点を挙げ、討論を繰り返した後、素材には、壊れにくく温かみのある「木」を選び、保育教材書を参考にして、半円状の土台の上に円柱を載せていく、木製のバランスゲームを制作した。

〈木製玩具の製作〉

玩具は教材書を参考に作ることにした。

まず、教材書の写真を見ながら、掲載されていた商品の、実物大相当の図面を制作し、ホームセンターに行ってそれに会う平板や円柱の棒を購入した。

保育園には工具は少ないため、各自家から持ち寄ったり、隣に併設されているシルバーセンターの職員の方に工具を借りながら進めていった。

バランスの重りは、すべて円柱だが太さや重さを変えて3種類用意した(図a 円柱)。

途中、土台(図c 土台)となる平板と上にのせる円柱の角は5歳児の子どもと共に、5歳児の子どもと共にのこぎりや紙やすりを使って完成させた。

作る過程に子ども達が参加したことは、出来上がりを楽しみにし、木製玩具により親しみきっかけになった。

〈遊びの方法と結果〉

完成した玩具を2歳～5歳児のクラスの玩具の棚に五日間ずつ置いた。

5歳児は玩具を見るとすぐに、自分たちで遊び方を考え、バランスを取りながら遊び始めていた。(写真1)の写真では5歳児4名で全ての円柱をつみ終わった画像である。4歳児は、その遊んでいる姿を見ていたので同様に行っていた。

4・5歳児の遊びの違いは、5歳児は、バランスの仕組みを理解して、崩さないことを楽しんでいた。

4歳児は、崩れることを楽しんでいた。

3歳児では、保育士がクラスに玩具を持ち込んだ時点で、一人の女児が他の友だちに遊び方を伝えた。この女児の姉が5歳クラスにいて、その遊びの姿を見て知っていた。他の遊び方としては、(写真2)のように台を無視して円柱を上積みして行くというものなどがあつた。

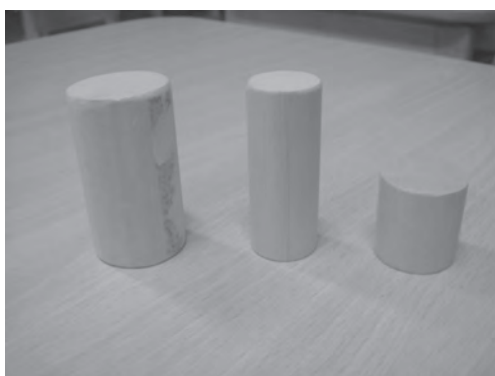


図 a



図 c



写真1



写真2

2歳児は、玩具を置いた初日から、何人かの子どもが興味を持ち手に取ったがすでに園にある通常の積み木と同じように、円柱だけを並べて電車や船を作る見立て遊びをしたり、ドミノのように並べる遊びが見られた。その後も、円柱と台を別々におままごとの中で遊んだり、(写真3)を見ると分かる通り土台を逆さにして鉄砲にして、戦いごっこをしたり、積む・転がすなどの姿が見られた。

その後、保育士が子どもたちに遊び方を知らせると、4、5歳児では、子ども達で考え合いながら遊んでいた事に加え、円柱を最後の一本まで積みきった後に、土台を倒さないように円柱を取っていくという新しい遊び方を編み出した。その『取っていく』遊びの中では、前述の通り、バランスを考えて取っていく子どももいれば、取りたい箇所を取っていく子どももいた。(写真4)では、保育士と5歳児が土台から円柱を取っている写真だ

か保育士が意図的に片側のみ円柱を取ってバランスを崩すと子どもたちは、逆を取ってバランスを保とうとした。

3歳児は子どもたち全員に遊びを知らせると、それまで遊ぼうとしなかった子どもも興味を持ち、はじめは取り合いになる姿もあったが、意欲的に遊ぶようになった。遊び方がわかってからは少しずつ遊びが発展して行った。

2歳児は新しいものが好きな子どもやパズルなど卓上遊びに興味がある子どもが積極的にバランス棒を手にとっていった。一人が遊び始めると興味を持つ子どもが増え、みんなでやろうとする。しかし、友達に置かれたり触られるのが嫌で言い合いになってしまうことが多く複数人であそぶ事が出来なかった。

そして、基本的に長く遊ぶ子どもはおらず、すぐに飽きてしまっていた。重りが倒れる時に発生する大きな音が出ることを楽しんでいった。



写真3



写真4

〈遊びの結果〉

遊んでみた結果から

1. 安全面では、土台、円柱をどの部分も角を取ったことで、手になじみ遊べた。
2. 検証した2～5歳の各クラスで、遊び方に違いはあるが、興味を持って遊ぶ姿が見られ、どの年齢でも子どもたちの集中は約10分程であった。
3. 円柱を積む時やゲーム中はどの年齢でも静かになり、下の年齢ほど、崩れると喜び、上の年齢に行くほど崩れて落胆するという姿があった。
4. 土台に安定感があり、本来目指していた「一つ置くごとにグラグラと揺れる」遊び方が満足できていない

という結論が生れた。

〈玩具の修正〉

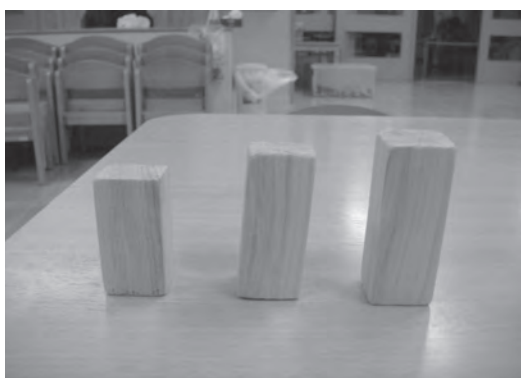
上記結果4を受けて、「土台のバランス」が課題として残った。この課題をクリアするための方法を討論すると、大きく分けて2点が挙げられた。

1. 土台の底を削り、より不安定にすることで「一つ置ただけでグラグラと揺れる」状態を目指す。
2. 円柱以外にも置くもののバリエーションを増やし、その「上に乗せるもの」の形や重量からより以上のアンバランスを目指す。

1では、やすりで土台の底を削りなおす作業を行い、少し削っては平らな床に置き、実験を繰り返した。ひたすら鉄やすりと紙やすりで削っていき、出来るだけ地面との接地面積を減らしていった。

だが、職員が想定した「左右に振り子のように等間隔に揺れる」状態には行き当たらず、また深追いして揺れが完全に失われることを恐れ、ある程度の所で削るのをやめた。どこかぎこちなさを残すが、削りなおす前よりは不安定になったと言える。制作しながら職員は、このバランスゲームの肝の部分は物理法則であり、そういった知識を得ることも課題だと感じた。

2においては、新たに重りの種類を、三角柱、四角柱と増やせば、様々な積み方ができ、よりスリリングな展開が期待できると考えた（図b 四角柱）。



図b

〈遊びの対象年齢を拡げる〉

第一回では、2歳から5歳の子どもたちに玩具を提供したので、次は、1歳児と、保育園2階にある高齢者の介護付き住宅のケアホーム西大井に持って行き、住んでいるご利用者の方々にまで対象を拡げ、この木製玩具で遊んでもらい、遊びの様子を観察してみることにした。これは、2歳児も興味を持って取り組んだ遊びに、1歳児はどう反応するかという反応を見る事と高齢者の遊びの形として、「指先」を動かすものが好まれていることを受けて、年齢範囲を広げる事を考えた。

〈遊んでみて〉

1歳児クラスで遊んでみると、(写真5)や(写真6)のように、おもりを静かに置くのが難しく、すぐに土台に触ったり、強く置いて倒してしまうことが多かった。中には土台を押しえながら積んだり、バランスが崩れてくると手で抑えて戻す姿もあった。一方で、崩れる音には多くの子どもが興味を持ち、倒れるたびに大喜びする姿が見られた。



写真5



写真6

遊びの持続はできず、短い時間で飽きてしまい、(写真7)を見て分かるように、おもりだけを積み木のように積んだり、土台や円柱をままごとコーナーに持っていき、すいかに見立てて遊び始めていた(写真8)。



写真7



写真8

ケアホーム西大井に持って行き、ご利用者Tさん(女性・83歳)、Sさん(女性・92歳)に、遊び方を簡単に伝えると、Tさんは「難しいねえ」「全部積むの?」「四角いのも使うの?」と話しながら、ゆっくりと積んでいた。またTさんは、手で土台を掴みながら積んだり、おもりを入れるかごを土台の支えに使ったり、1歳児クラスでも見られた遊び方を行っていた。これは私達が予想していない結果であった。ケアホーム西大井の職員の呼びかけでやる気になったSさんは、「どれを置いたらいいかわからない」と、迷いつつも遊びを始め、おもりが崩れた時点で遊びを終え、「色ごとに置いていくのだったら、もっと

わかりやすいかもね」と、ご意見を下さった。ほか、数名のご利用者の中には、掴むという動作自体が難しい方もおり、遊びが中断された場面もあった（写真9）。



写真9

その後、2歳から5歳にも修正をして新しくなったバランスゲームを提供すると「年齢が低いほど崩れた時に喜び、年齢が高いほど積み上げることに喜びを持つ」という傾向は変わらなかった。ただ、高齢者や1歳児も繰り返して遊んでいるうちに積みという事を楽しむようになった。

（写真10）や（写真11）のように、4、5歳児は、集中力も高く2人、もしくは複数人で交互に積んだり、対戦形式で遊ぶ様子が見られた。



写真10



写真11

3歳児では、新たに用意した四角柱を使わず、円柱のみ積んで遊んでいた（写真12、13）。遊ぶ姿には、「こっちに置いた方がいいよ」「そこは崩れるよ」など周り居る友だちにアドバイスをする姿があった。

2歳児クラスの（写真14、15）では、四角柱を土台の上に横ではなく縦に置き積み上がっていく遊びが見られた。



写真12



写真13



写真14



写真15

〈考察〉

土台を修正したことで、前回制作時に比べて土台が不安定になり、崩れることも増えるが、繰り返し遊ぶうちに工夫して遊ぼうとする姿も見られた。

1歳児では、夏過ぎより、積み木遊びを取り入れていたため、玩具を見ると台とおもりを別々に遊ぶ事が多く見られた。遊ぶ前に必ずルール（遊び方）を知らせるが、すべてをすぐに理解し、意識して遊ぶことが出来なかったため、ゲームのルールより、積み木遊びのように手で土台を押えながら積んでしまったのだと考えられる。

2歳児では、新たに加えた四角柱を円柱と一緒に使って遊ばず、別々に使って遊んでいた。バランスを考えて遊ぶことが難しく土台に手を添えて倒れないようにしていたが、崩れないようにするための工夫であったと考えられる。バランスゲームを通して、他児と関わって遊ぶことも見られるようになった。

3・4・5歳児では、前回まで、おもりが円柱のみで遊んでいた子どもたちにとっては、四角柱を増やしたことによって、興味を持っていたが、四角柱を率先して使う子どもはそれほど多くなく、消極的な子どもの方が多く見られた。転がらない四角柱より、バランス

が崩れてくると転がる円柱の方が子どもたちにとっては魅力的であると考えられる。崩さずにバランスをとろうと考え、工夫し、試す姿が見られた。これは、考えて遊ぶ知育玩具に近づけたのではないかと考えられる。

このことから、種類は増やさなくても、円柱が一番適しているのではないかという考察に行き着いた。

ケアホーム西大井の高齢者の方々にとっては、見た目のこと（色が無い）で、そこまで意欲的に取り組めない部分があったと考えられる。視力が低下している高齢者にとっては、土台、おもりともに色分けされていた方が、遊びの敷居は低くなると言えるだろう。

同じく、子どもたちにとっても色や模様が付いていると興味が高まり、色が大切ではないかと考えた。また、ご利用者の身体的な状況によっては、おもりを掴むことが難しいということも見えてきた。

〈まとめ〉

遊びの中に緊張と緩和のハラハラ、ドキドキ感があり、子ども達の目をひく魅力があったと考えられる。バランスの加減を再考すれば、より子どもたちに興味をもってもらえると感じた。また、子どもたちのコミュニケーションのツールとなった。

壊れにくいという意味では、木は玩具の素材として有用と思われる。しかし、バランスを考え設計するなどの面では知識不足なところもあった。また、前回より土台の不安定さが増すように調整してきたが、まだ安定が取れてしまうこともあるため、まだ改善しなければならない。

子どもたちが玩具を作るという工程から携わったことにより、より遊びに期待を持ち製作できた。また、完成の喜びを分かち合うことが出来た。

1歳児クラスとケアホーム西大井の高齢者の方々では「土台を押さえながらおもりをのせていく」という共通点が見られた。乳児と高齢者が同じ遊び方に行きついたという微笑ましいことがらがあった。

子どもたちが試したり、工夫したり、友達と一緒に遊ぶことの出来る「知育玩具」として、作って良かったと思う。

課題研究② 遊びと学び

「未満児における遊びと保育環境について ～実践から見えてきた子どもの育ち～」

沖縄県・第2愛心保育園 知念 幸江

1. はじめに

子どもの健全な心身を育んでいく上で、遊びと環境（人的、物的）はとても大切である。保育園においても、一人ひとりの発達段階をしっかりと捉え「保育環境」をどのように提供できるのか、日々考えてはいるものの、自己評価において「子どもの自発性を育てているか」の問いに対して、また、保育内容がマンネリ化していないか、子どもが主体となり、子どもの目の高さの環境設定になっているのかと振り返った時に、物的な「保育環境」については弱い部分（課題）があることに改めて気づかされた。そこで、保育内容を見直し、保育中も子ども達の興味や関心のあることは何だろう？と常に心に留め、試行錯誤しながら進めてきた実践研究を紹介したいと思う。

2. 保育園の概要

待機児童解消のため、愛心保育園・分園（定員40名）として沖縄県で初めて設置されたが、更なる待機児童解消のため園舎を増築し、平成19年度、第2愛心保育園（定員90名）として設置認可を受ける。当園は、交通量の多い国道から少し中に入った静かな住宅街に設置されており、近くには国場川が流れるその川沿いを子ども達は散歩コースとして様々な小動物や自然に触れ、楽しんでいる。

施設名	社会福祉法人 玉重福祉会 第2愛心保育園
所在地	那覇市字国場251-1
設立年月日	平成13年4月1日・愛心保育園 分園 平成19年4月1日・第2愛心保育園
面積・建物	敷地（784.72㎡）・建物（686.69㎡）鉄筋コンクリート造3階建
定員・現員	105名（現員116名）

平成24年11月1日現在

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	計
定員	16名	18名	18名	20名	20名	17名	105名
現員	16名	21名	19名	22名	19名	19名	116名

職員構成	園長1名・副園長1名・主任保育士1名・保育士21名 調理員3名（パート1名含む）用務員1名……計28名
特別保育事業	乳児保育・障がい児保育・一時保育・延長保育（午後8時まで）

3. 研究の動機

保育士の自己評価において、「子どもの自発性を育む保育環境に対して適切に配慮してあげているか」という項目に対して、疑問を抱く保育士も多く、また年齢が低ければ低いほど、保育士が物的環境を整えてあげる必要性があると感じたため。

4. 研究の目的

- (1) 子どもの発達段階を捉えた保育内容（環境）を充実させる。
- (2) 子ども一人ひとりの自発性を育てるような環境作りをする。
- (3) コーナー遊びを通して子ども同士の関わりを深める。

5. 研究方法

☆研究テーマについて、クラスリーダーを中心に保育環境についての話し合いを持ち、実践に向け全職員で取り組む。

- * 0歳児……生活と遊びの空間を工夫
- * 1歳児……自発的な遊びができるような環境作り
- * 2歳児……子ども同士の関わりが深められるような環境作り

☆年間計画を基に月案、週案、個人支援計画の立案において、子どもの様子を見ながら臨機応変に見直しをする。

6. 実践

事例1…〔0歳児クラス・苺組〕

(ねらい) 保育士との関わりの中で、個々に合った成長過程を捉え、情緒の安定を図る。




実践方法 月齢や個々によって発達・運動における差が大きい0歳児、遊び方も月齢の高い子・低い子では全く違う。そこで、苺グループ：月齢の高い子（4月生～7月生：8名）、プチ苺グループ：月齢の低い子（9月生～12月生：8名）に分かれて過ごす（図1参照）。

活動内容（図1）

	月	火	水	木	金
苺グループ (高月齢)	全身運動 (階段登り)	園庭遊び	製作 (ぶどう)	コンビカー 遊び	小麦粉粘土
プチ苺グループ (低月齢)	ベビー マッサージ	散歩	楽器遊び	ふれあい遊び (わらべ歌)	手先遊び(チ ラシを使って)

※職員配置（担任6名）は日ごとにローテーションをしていき、朝の集いの後に活動内容や職員配置について、担任間で確認を行った。

(子どもの姿)

<p>苺グループ (高月齢児)</p>	<p>○全身運動 (階段登り) 保育士が見守る中で、全身を使っ ての階段登りに挑戦をしていた。 時折、保育士の姿を確認しながら 登る子もいた。</p> 	<p>○園庭遊び 園庭で砂遊びをしていると、砂を 口に入れようとする子もいたが、 保育士の声かけにより、遊び方を 知り、砂の感触を楽しんだり、滑 り台や鉄棒にぶら下がって遊ぶこ とを喜んでいた。</p> 
<p>プチ苺グループ (低月齢児)</p>	<p>ベビーマッサージ 音楽が流れる中、ベビーマッサ ージをしてもらい、ぐずり泣いてい た子も安心して眠りにつく子もい た。</p> 	<p>散歩 抱っこされての散歩では気持ちよ くなり、帰る頃にはウトウト居眠 りをする子や、犬や猫を見つけれ るとじっと見ている子など、子ども 一人ひとりとの会話のかけあいを 楽しむことができた。</p>

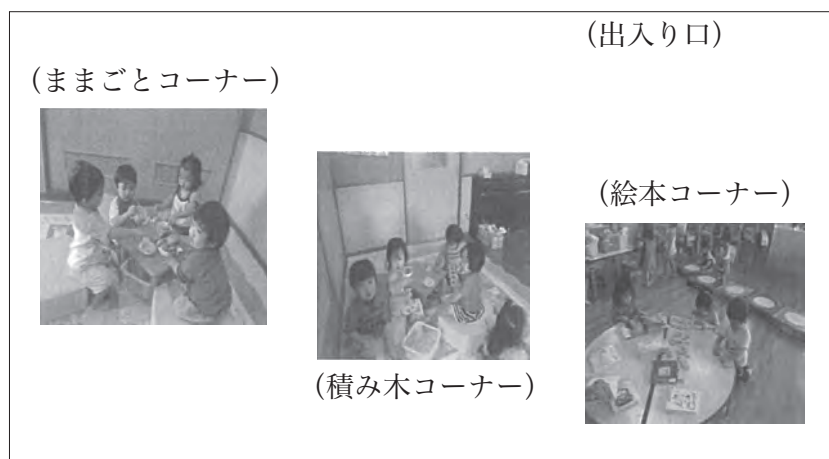
(結果・考察)

これまでは月齢の高い子、または月齢の低い子のどちらかに合わせた保育内容になっている部分もあり、子ども達の中で物足りなさを感じていないかという思いもあった。実践を通して見えてきたことは、2グループに分けたことで、それぞれにあった遊びを行うことができ、遊びの幅も広がり、充実感を味わっている様子が伺えた。また、保育士もゆったり関わることができ、子ども達も生理的欲求が以前よりも満たされたことで、より一層落ち着いて過ごせるようになってきた。更に保育士が少ない人数を見ることで、子どもの行動をじっくり観察することができ、連絡帳の記入や降園時の保護者との会話の中で、細かい部分まで伝えられるという利点があり、生活面においても食事・トイレトレーニング・歯磨き指導など無理なく進めることができた。そして、職員間でも子どもの育ちについて、話し合う場や共通理解など、以前にも増してできるようになったことはよかったと思う。

事例2…〔1歳児クラス・桜組〕

(ねらい) 子どもが安定した生活の中で、自発的に遊びを見つけ楽しむとともに新しい環境に慣れ親しめるようなコーナー作り。

実践方法 登園後、すぐに活動ができるようにコーナーを設定した。各コーナーにテーブルと椅子を置いて、落ち着いて楽しめるようにしたり、ままごとコーナーでは、家庭的な雰囲気を出すために、小さな畳を敷きじゅうたんやソファを設置した。



(子どもの姿)

子ども達は興味を持ち、各コーナーで積極的に遊び始める子も多かったが、慣れない環境に母子分離がうまくできずにいる子もいた。しかし、保育士の言葉かけによってスムーズに母子分離できるようになり、遊びを楽しむ姿が見られてきた。月齢の低い子は、各コーナーへと移動しながら満足している様子が伺えた。また、月齢の高い子はブロックを組み立てて見立て遊びをするなど、一つのコーナーでじっくり遊んだり、一人遊びを楽しんでいる姿が多く見られた。

コーナー遊びに慣れてくると、一人遊びからお互いに玩具の貸し借りをしたりなど、友だちへの興味や関心が出て、関わりが広がってきた。

(結果・考察)

コーナー作りの設定を通して、月齢が低ければ低いほど、保育士が環境を整えていくことが重要になり、その中で子ども達の興味や関心を把握しながら、遊びの展開の見通しをもった環境作りの必要性を感じた。コーナーでの遊びを継続することにより、子どもの育ちが見え、自ら環境に関わりあってみたいという自発性が現れた。選択できる環境設定の重要性、また、子どもの目線で部屋のセッティングや整理の仕方が大切になってくることを実感した。

事例3…〔2歳児クラス・菊組〕

(ねらい) 遊びの空間を通して友だちとの関わりを深める。

実践方法 一人遊びから友だちと関わる楽しさ、会話をする面白さを体験できるよう、設定時間だけに捉われず、1日を見通して、時間・教材・空間を工夫した環境作り（ブロック、パズル、音楽など）を行う。

(子どもの姿)

〈ブロック遊び〉

人気ある遊びで5～6人の子が集まり遊び始める。一人が乗り物を作ると同じように作ろうとする。その中で、ブロックの形や色にこだわる子も見られ、取り合いになりトラブルが起こる。保育士が仲立ちとなって「貸してって言おうね」や、「一緒に遊ぼう」などと言葉を補足しながらお互いの遊びが続けられるように見守り、関わるのが楽しいと感じられるように言葉かけを繰り返し行う中で、子ども自身もイメージした乗り物や鉄砲、剣などを上手に作れるようになって、お互いで見せ合い喜ぶ姿が多く見られた。



〈パズル遊び〉



4月の頃は2～3人の子が興味を示し遊び始めていたパズル遊びだったが、次第にパズルの遊び方を知り、自分でもやってみたいという子が次々と増えてきた。一つのパズルを数人の子で、「これはここだよ」と言いながらピースをはめ込み完成させることができるようになってきた。

〈音楽遊び〉

ソファやテーブルを設置し、おもちゃのマイクを数本用意することにより、自然に3～4人の子が集まってお互いに名前を聞いてみたり、好きな歌を歌い始めていた。そこに保育士が入っていくと、保育士にインタビューをする子や恥ずかしがって黙ってしまう子もいたが、楽しい雰囲気が伝わっていた。

(結果・考察)

2歳児の発達の特徴として、模倣することがあげられる。友だちがしていることに興味や関心を示し、刺激を受け、“やってみたい、やってみよう”という自発性が芽生えてきたように感じられた。遊びの空間においては、同じものだけではなく、時折、設定や玩具等を変えながら遊びの空間を設けることで、「どんなふうにして遊ぶのだろう」という好奇心を引き出せるようにしたことも良かったと思う。

事例4…〔異年齢児交流1歳児、2歳児クラス〕

(ねらい) 共通の遊びを通して異年齢での関わりを深める

実践方法 部屋の仕切りをなくし、運動遊びの場を1歳児の部屋、コーナー遊びを2歳児の部屋に設置する(図3参照)。

・1歳児の部屋(運動遊び)

・2歳児の部屋(コーナー遊び)

(図3)

(すべり台) (ジャンピングクッション) (フラフープ)	(ままごと) (積み木) (ブロック)
------------------------------------	---------------------------

日ごろは1歳児の部屋と2歳児の部屋の間をロッカーで区切り、それぞれで活動をしているのだが、この日はロッカーを壁側に寄せ、子ども達が自由に行き来できるスペースを作った。

(子どもの姿)

1歳児：滑り台では、いつも自分が先だと割り込んでトラブルになりがちな1歳児だが、順番を待ち、一列に並んでいる2歳児の姿を見ることで、真似て並んで待つことができた。ジャンピングマットも一人で独占したいと言い張る子も見られず、一方向にスムーズに流れて楽しんでいた。また、友だちに何か言われた時など、普段は相手の思いを受け入れられず、トラブルになりそうなことも、素直に聞き入っていた。

2歳児：年上という思いがあり、1歳児に「順番だよ、ここからだよ」と言葉で伝えてあげる姿が見られた。ままごとコーナーでは、鞆を片手に持ち、手を繋ぎ嬉しそうにしている姿や、1歳児を誘い、並んでご飯を作ったりと嬉しそうなお表情を見せていた。また、普段玩具の貸し借りをする姿があまり見られない自己主張の強い男の子が、この日は譲って遊ぶ姿もあり、優しい一面を見せてくれた。

(結果・考察)

同じ空間で共通の遊びを通して、子ども同士互いに興味や関心を持ち、異年齢間での関係の結びつきが深くなった。互いに相手を見ながら“遊び方を真似る”＝“学ぶ”というように習得していったのではないかと思われる。2歳児においては、自分より1つだけだが、年下だとわかり優しく接する姿に、小さい子をかawaiiがり思いやる気持ちが芽生えてきたように感じた。

(まとめ)

遊びや生活における環境設定の重要性はわかっているつもりだったが、今回実践研究を行うにあたり、物的環境への配慮が子ども達にとっていかに大切かをより深く知ることができた。遊びは、「個」の遊びから集団（仲間）への遊びに変化していくように、子ども自身も“自己中心”から“周囲に目を向ける”ようになる等、心身の発達も現れてくる。そのような子どもの発達過程において、保育士の役割は何か。きちんと見つめ直せる機会となった。未満児は、自分の思いを十分に伝えることができない。だからこそよけいに子ども達が、“今やりたいことは、何だろう？何に興味を示しているのか”と洞察し、子どもの自主性・自発性を伸ばしていかなければならない。整えられた遊びの環境の中で、子ども達は安心して遊びを楽しむことができる。それが意図的に設置したものであっても、そこから遊びの幅を広げながら自ら考え・学び・行動する姿が見られる。そこには、友だちとの関わりや保育士の存在が重要で、その中で考える力、相手を思う気持ち、そして言葉や心身の発達が育まれ、成長へとつながっていくのである。環境の見直しから、ひとつの遊びの幅が広がることや友だちとのふれあいがいかに学びの種をまいているのか、感じとることができた。物的環境・人的環境が、遊びにおいて重要な位置にあることを常に意識しながら、これからも子ども達の健全な心身の発達を図るために、五感を刺激し、学びと遊びの環境の工夫や充実に努め、様々な体験をさせていきたいと思う。

(課題)

- ・子どもたちが作った物を利用し、遊びに発展させながら遊びの幅を広げていく。
- ・1日の生活の中で、異年齢でも関われる機会を増やしていく。

実践報告 「自立を育む楽しいキャンプ」

福岡県・筑水保育園 宮田 芳子

日 時 平成24年 7月14日16時～7月15日 8時30まで
 参加者 年長組 9名
 職員数 7名
 テーマ 自立を育む楽しいキャンプ
 ねらい ・いろいろな活動をとおして、友だちと協力しあい、つながりを深める。
 ・家族からはなれ生活することで、自立心と自信をもたせる。

当日までの計画

- (1) 食育をとおしての菜園づくり
- (2) グループ作り (6月27日)
- (3) 出しもの練習 (7月2日)
- (4) 夕食献立話し合い (7月4日)
- (5) 自分のはしをつくる (7月10日)
- (6) くわがた・かぶと虫とり仕掛作り (7月12日)
- (7) 事前職員会議
 - ・おとまり保育のスケジュールについて共通理解及び内容の理解
 - ・職員の役割り分担、担当決め

キャンプ前の活動の実際

- (1) 食育をとおしての菜園づくり (年間をとおして)

きゅうり・なす・とまと・すいか・ピーまん・じゃがいも・たまねぎ等、筑水保育園菜園作りは下記のとおりです。



夏は汗ぶるぶるになり虫にさされながらも草取りをしたり、谷川から水をくんで水やりしながら畑の世話をしています。収穫はなにより嬉しいです。

スイカは谷川で冷やしクッキングでフルーツポンチに、大根は冬の冷たい谷川で自分の家に持ち帰る分は洗います。今回のキャンプでの野菜は取れたての、とまと・きゅうり・すいか・ピーまん・なすをつかいました。

(2) グループ作り (6月27日)

・好きな友達でグループを作る。

(グループ名 うさぎグループ (4人)・たこグループ (5人) に決定)

・グループの旗作り (旗は自分たちのテントの入り口にたてるため共同で作る。)

・バッチは、仲間意識を持たせるためうさぎ・たこの絵を各個人でつくる。

(3) 出しもの練習 (7月2日)

皆で楽しむための出しもの話し合い

人形劇・影絵に決定 (兄妹がいるところは、体験談を聞いていた子もいたり、先輩にしてもらった事があるため。)

(4) 夕食献立話し合い

ラーメン・焼肉・すき焼きなどの意見が出た。園で採れた野菜で何ができるか話し合い、カレー・サラダ・バーベキュー作りに決定

(5) 自分の箸を作る

・春に見た、たけのこが大きくなったことを知らせその竹でお箸をつくる。

・正しい小刀の使い方を一人一人きちんと知らせる。

・孟宗竹を小刀で削る 削る前と後に竹の感触知る。

・削った後すりをかけると感触がかわるので「わ〜ツルツルなった〜!! 本物のお箸やん」と感動していた。

(6) くわがた・かぶと虫とり仕掛作り

ペットボトルで作る仕掛作りは各グループごとに絵を描いたりする。



(7) 休憩時間などを利用して役割分担などミニ会議でこまめにしていく。

職員の事前準備

- ・頑張った子どもたちへのプレゼント作り
- ・天狗からの贈り物作り（今年は、ふくろう）
- ・虫取り仕掛に入れるかぶと虫の飼育
（昨年のかぶと虫が卵を産んだのを卵から飼育）
- ・麦わらで虫かご作り。（持ち帰りのかぶと虫をいれるため）
- ・子どもが入村する前に職員で雰囲気づくり（テントを張る・キャンプ村の看板をあげる・木に枝や蔓を園庭につけたり結ぶ。）

キャンプのスケジュール

1日目

- | | | |
|-------|-------|--|
| 16:00 | 開村式 | ・村長あいさつ |
| | 夕食準備 | ・飯盒で米を洗い炊く
・収穫した野菜でカレーとサラダとバーベキュー作り |
| 18:00 | 夕食 | |
| | | 片付け |
| 19:00 | お楽しみ会 | ・スイカ割り（保育園で収穫したスイカ）
・各グループでのだしもの 影絵・人形劇
・キャンドルの集い
・きもだめし（カタカタと下駄の音がして天狗からの手紙が投げ込まれる。） |
| 20:45 | 入浴 | |
| 21:00 | 就寝 | 就寝前虫取り仕掛の準備（仕掛にゼリーを入れて木の枝に吊るす） |

2日目

- | | | |
|------|------|--|
| 6:00 | 起床 | ・虫取り仕掛の中に気付く（仕掛の中に沢山入っているので大喜び）
・朝のさんぽ（昨夜天狗さんからの手紙を受け取った地図をめあてに宝探しへ。） |
| 7:00 | 朝ごはん | |
| | | 片付け |
| 8:00 | 閉村式 | |
| 8:30 | 解散 | |

キャンプの実際

開村式 ・村長（園長）より皆で協力して楽しいキャンプにしようとするグループの旗をリーダーに渡す。2グループのリーダーがジャンケンしてテントを選び、テントの前に旗をたてた。

夕食の準備及び夕食

- ・飯盒でのご飯炊きは初めての子ばかりだったが米をこぼさず上手に洗っていた。薪での炊飯は、何でこれで出来るのか不思議がっていたが、ぶくぶくと炊き上がる様子を見て、出来上がると感動していた。
- ・サラダにつかう野菜を取穫し洗い包丁で切り準備（包丁の使い方は毎月のクッキングで慣れている。）
- ・自分で作った箸を自慢げに園長・保育士に「これで食べて」と持って来て、カレー・サラダ・バーベキューを美味しく食べた。いつもあまり食べない子が沢山食べた。

お楽しみ会

- ・たこ・うさぎグループで数日前から練習していた影絵・人形劇が上手に出来全員盛り上がった。子どもの笑顔が自慢げだった。
- ・スイカ割りも大声をはりあげ職員全員も、盛り上がった。
- ・キャンドルは、火の女神様から火を分けてもらい火の大切さを村長から教えてもらう。（毎年、キャンプファイヤーだが今年は仮設園舎の為、近所の民家に配慮してキャンドルのつどいとした。）

毎年恒例のきもだめし

- ・かたかたかたと下駄の音。ポーンと手紙が保育園に投げ込まれた。「何か飛んできた」と気づく子。
- ・早速全員で読む
「今から隣の小学校の運動場の旗の所まで勇気ある子は手紙を取りに来い」
- ・暗い道を全員で歩く。怖いのか皆よりそい手をつないで歩いて行った。怖くなった子がいて泣き出す子がいた。
- ・グループごとに取りに行く。泣く子の手をひいてあげる子がいた。無事手紙を取りにいった。
- ・帰りは皆友だち同士、手も繋がず生き生きと歩く姿は達成感にあふれた姿だった。
- ・手紙の内容は「明日朝千光寺まで宝を取りに来い」と言う内容だった。早速翌日、地図を頼りにでかけた。（保育士はいつさい口も手も出さず、見守る。日頃行き着けた散歩コースなので安全）地図をひとりじめにする子がいたので、「○○君ばかり持たんで～」と言う子がいた。そっとグループの皆に見えるように

していた。

- ・見つけた子の弾んだ声が印象的だ。
- ・「天狗さんありがとう」と山にむかって大声でお礼を言っていた。

かぶと虫・くわがた虫とり仕掛

- ・ここがいい、あそこがいい、と皆で決めた。翌朝を楽しみに就寝。
- ・朝一番に起きた子は早速、かぶと虫がかかっているか見に行った。いっぱい入っていたので眠っている子を大声で起こしに行っていた。
- ・食後は、かぶと虫と遊び、大にぎわいだった。皆で分け持って帰った

宝探し

- ・全員起床後、天狗さんの2つの地図をもとに、グループごとに出かける。
- ・上手に見つけるグループとなかなか見つからないグループがあった。見つからないグループは木の根っこまで友だちと一緒に根気よく探した。見つけた後、早速プレゼントを開き喜んでいた。

キャンプ後の子どもの変容

- 今回の活動をとおして、保育園のすぐそばの山には天狗がすんでいることをすっかり信じ込んだ子どもたち。「いつまでも泣いていたら山の天狗さんに連れていかれるよ。」の言葉がすっかり信じられるようになったようだ。小さいクラスの子が泣いていると「天狗がくるよ」と本気で言ってます。
- 自分で作ったお箸を家に持ち帰り「おにいちゃんが保育園の時作ったお箸を今も使っているからぼくもずーっと使うよ」と自分が苦労して作ったものを大切にしようとする気持ちをもてる子もいる。
- 虫取り仕掛けを家でも作ってみたいと家族の協力で作ったT君、かぶと虫がかかるとの何日も待ったとのこと。(保護者からのおたより)あまりかからないので、保育園で飼育したかぶと虫を夜、本人に知れないよう仕掛の中に入れてもらうよう保護者にあげる。翌日、仕掛に虫が入っていたことが嬉しくすごい勢いで当園し友達に自慢していた。このことを友達に報告したので、何人もの友だちが同じように作ったとのこと。グループでの活動での仲間意識が強くなりました。

保護者の反応

- 始めは泊まりたくないと言っていましたが、ニコニコ顔で帰ってきて、いろいろ楽しそうに話したので安心しました。
- 竹箸が上手に出来ていてパパが感心していました。
- 天狗からの手紙を、暗い中子どもたちだけで、取りに行ったことを興奮して伝えるわが子に感動しました。

- 虫を触るのが苦手な子がキャンプで持って帰ったかぶと虫だけは自分でお世話をしています。
- キャンプで作ったカレーを家でも作ってみせました。
- 保護者が「飯盒でご飯を炊いたんですね。わたしは飯盒のご飯食べたことがないんです。」家でもやってみたいです。

など

反省・評価

当日は筑後地方に大雨注意報が出ていて、父親の腰まで水につかり車が動かない子もいました。どうしても楽しみにしていたお泊り保育に参加させたいとのことで、途中までおんぶし、タクシーにのってきて参加した子もいました。

当園は山手なので水はけがよく、子どもたちの期待どおり機会を逃したくなく実行しました。その後、天候は回復し計画どおり実施することが出来ました。すっかり雨もあがり、実施できよかったと思います。自然相手の決断は難しいが、天気予報をパソコンでチェックしながらの決断でした。

お泊り保育はその場ですぐできるものではありません。年間保育計画を逆算しながら計画をしていきました。

菜園作りなど、お泊り保育に使うためにはいつごろ種まき、苗の植え付けは収穫する日を考えて実施するなど考えていきました。今年は例年にない大雨が降り、病気が入った野菜も多かったです。又今年は、園舎改築の為仮園舎での行事で、職員間の話し合いを念密にしていきました。毎年お泊り保育が近づく頃、箸作りのため、子どもへ小刀を持たせています。正しい使い方を知らせる事によりだれもけがをする子がいません。危ない危ないと経験させないでいるより、正しい使い方を知らせ経験させることが私たち保育士の役割りではないかと思ひます。

又、日頃何気なくご飯をたべているけど、飯盒炊爨^{はんごうすいさん}を体験でき、こんなふうにしてご飯が炊けるんだと経験できたことも大きな収穫になったのではないかと思ひます。

園長が麦わらで虫かごを作っていると、何を作っているのか興味深く見に来る子が多かったです。子どもの前で、編んで見せ出来ると不思議がっていました。こんな伝承物をいつか、「こんな事もしてもらったことがある」と懐かしがってくれることがあればいいなと思ひます。



さあ！キャンプ村の出来上がり！



小刀を使って
キャンプで使うマイ箸作り



うわあ～ 飯盒でごはんができたあ



天狗さんからのお手紙が・・・
「なんて書いてあるのかなあ」



かぶと虫 すごいでしょう



麦わらで作った虫かご。これに入れて持って帰ります

2. 総評及び作品別講評

総 評 委員長 野 坂 勉

作品別講評 委 員 藤 澤 良 知

小 林 芳 文

井 桁 容 子

酒 井 かず子

日 吉 輝 幸

渋谷 一 美

不安定な社会情勢のもとにあっても、子どもを支える保育現場からの報告は、力強いものがあつた。

〈応募状況〉

応募状況として、まず課題研究と実践報告が各6本とタイであつた。第1課題・「人との関わり」には福岡・大神啓一(「人権を尊重する保育」)、大分・渡辺太郎(「与える親の信頼と子の成長」)、東京・伊能恵子(「保護者の養育能力向上」)が報告された。第2課題の「遊びと学び」に東京・糸健太郎(「手づくり玩具と遊び」)、沖縄・知念幸江(「未満児の保育環境」)、鹿児島・杉本正和(「アナログ保育とデジタル保育の融和」)から報告があつた。

実践報告は保育の理論化に関わる鹿児島・小倉裕子(「トレーニング適期と排泄自立」)東京・向井敦子(「リスクマネジメントとして組織化」)、山梨・石田幸美(「エピソード記述」)、保育の実際についての福井・中屋裕子(「飼育・観察と劇化」)、福岡・宮田芳子(「キャンプ」)長野・半田睦枝(「遊びの多元化と構成」)からの報告がなされた。

第7回報告の特徴として、(1)食育研究が全面的に撤退した事 (2)課題研究が基準性をもつ保育指針に規定される事から、保育所全体とする対応がはかられ、施設長自身(多々良、昭島ナオミ、寒田ひめやま、つるみねの各保育園)、主任研究者としてリーダーシップをとつた報告がみられた事である。

〈審査〉

(1) 評定

自由度を得てか、実践報告の評定結果が高かつた。これに対し、課題研究は保育指針に準拠する事を意識してか、やや硬直的で基準としての段階評価も、割れる事はなかつた。

(2) 選評

課題研究部門は、保育のねらい、保育の計画策定、保育方法の案出、保育の実施、保育用具・用材の工夫などを軸に判定、基準値を措置、吟味する事になる。押しなべて課題部門報告は、奨励賞に止まるとされた。これは「人との関わり」では、外部への発表として、表記、表現方法とも配慮すべき点が多いとの指摘によるものであつた。「遊びと学び」では、設定保育か自由保育かという保育原理にかかわるだけに、保育用具、用材研究、あるいは内容研究にするのか、先行研究の検索と、その知見を合せての研究報告が求められるとした。実践報告部門では、秋和保育園・半田報告(「遊びの中で育つもの」)が優秀報告賞とされた。これは保育者としての役割が、その取得ならびに実技とも明確に記述され、保育記録としても高く評価された事による。

〈おわりに〉

保育所はこれまでややもすると、利用施設の側面において取り上げられるきらいがあつた。それが現在、政策動向として乳幼児養育家庭の支援を強化すべきだとする意見に固まりつつある。このようなハードからソフト移行は保育所保育の在り方に、決定的な影響を与えるであろう。今後の現場報告が注目されるところである。

研究奨励賞（課題研究部門）

課題研究② 遊びと学び

「アナログ保育とデジタル保育による遊びと学びの融合！

未来のアトム創造プロジェクトで興味関心意欲を育てたい」

杉本 正和（つるみね保育園・鹿児島県支部）

講評：小林 芳文

正直なところ、私は、「この保育園を見学してみたい」と、この研究報告を通して強く感じました。「遊びと学び」の課題は、今、子どもの成長、発達に非常に重要であるにも関わらず、具体的な切り込みがないため、方法論も不足しているからです。杉本さんが、「はじめに」のところで述べている「子どもは遊びながら学び、学びながら遊ぶ」、「遊びと学びを融合させた保育を創造できれば、子どもたちの発達段階に応じた取り組みが展開できるのではないか」という研究仮説を挙げて、今回の研究課題を設定したこと大変嬉しく思いました。

このような研究の取り組みは、保育のすばらしさを広く社会に認識していただくためにも、遊びの価値を色々な分野の方に理解していただくためにも、必要であるからです。幼児期に質の高い遊びをする（経験できる）ことが、将来、豊かな感性を持った社会人として、創造的な思考を備えた柔軟な前向きな生き方の出来る人、人との幅の広いコミュニケーションスキルの発揮が出来る人、これらが柔軟な暖かな生きる力につながっていくからです。

この研究では、「保育環境の創造」の重要性を挙げています。そのために自然との関わりを実に巧みに工夫されています。報告の写真を拝見して、この保育園が99%重視していると言っているアナログ保育としての環境に、広い遊び場、多様な遊具群、ミカン狩り、芋掘りなど子どもの全ての感覚機能が参加出来る豊かな自然環境を使った保育に、そのことが良く伝わって来ました。デジタル保育と呼んでいる保育も、その保育内容の多さにすばらしさを感じました。仮説の検証として、「驚きや好奇心など、興味関心、意欲が表情に満ちあふれるようになっていく」ことが、何らかの形（データ、感想、意見など）で解りやすい記録が添えられていましたらと、さらに良くなる研究と感じました。今後の課題としてあげられているように、「遊びと学びの融合」を色々な形で実践検証していただきたいと願っています。

本実践研究を行ったつるみね保育園では、アナログ保育を「園庭や室内での遊び、読み聞かせ、わらべ歌、手遊びなど、ふれあったり交流したり汗を流したりする普段の伝統的な保育」としており、デジタル保育を「タブレット機器、DVD、CD、TV、パソコンなどのデジタル機器を利用して、子どもの五感に刺激を与える先進的な保育」と独自の定義付けをしている。そのうえで、アナログ保育とデジタル保育によって、遊びと学びを融合させようというのである。デジタル機器が身の回りに溢れている現代社会に暮らす者にとっては、至極当たり前のことかも知れないが、それらを積極的に保育に取り入れるということは、まだまだ斬新であると言えるのかもしれない。

保育環境においては、園長が考える理想を具現化すべく構成されていることが伺え、同じ保育者として羨ましく思えた。また、アナログ保育の一環として行われている「科学タイム」の様子は、大人でもワクワクしてしまうような試みを10年以上にもわたって継続されており、賞賛に値するものであると思えた。しかし、同じアナログ保育の一環として行っており、外国人との交流目的で行っている「イングリッシュタイム」と、デジタル保育の一環として行っているとされる、「音声アプリ」を使用した英語の発音の効果については、「まるで、外国人が、その場にいるような感覚で使える」などと言及しており、少々違和感を覚えた。どちらがネイティブ・スピーカーとして有効であるかと、優劣をつけること自体がナンセンスなのかも知れないが、あくまでもデジタル機器から発せられるものはバーチャルであることを踏まえておく必要がある。加えて「絵本アプリ」の記述についても同様の感覚を覚えた。

実践研究報告書の中で触れられているように、つるみね保育園ではあくまでアナログ保育を重視し「99%のアナログ保育、1%のデジタル保育」を全職員の合言葉とされている。筆者は決してデジタル保育を否定するものではないが、誤った1%が99%を台無しにしてしまう場合もあるということ、これからも忘れないでいただきたいと願うものである。そのうえで、先進的な取り組みを今後も続けられ、研究者が言われているように「アナログ保育からアナログ教育へ、デジタル保育からデジタル教育へ系統的に発展させたい」というビジョンを実現された暁には、改めて興味深い実践報告をしていただくことを期待したい。

優秀報告賞（実践報告部門）

実践報告

『「遊びの中で育つもの」—ドキドキ、わくわく、今日の遊びはなんだろう—』

半田 睦枝（秋和保育園・長野県支部）

講評：小林 芳文

この実践報告は、今、子どもたちを巡って取り組まれている「遊び力の弱い子ども」「遊び保育のあり方」「遊びでの学び」等に、その入り口となるヒントを与えてくれる研究として読ませていただきました。細かな子どもの発達をきちんと抑えて、保育の力を上手に活かして奥のある取り組みをされていること、そして家庭との繋がりを持って進めてきた精力的な関わりの実践のすばらしさを感じました。

研究方法であげている「家庭の意識調査」に基づいて、家庭での子どもの遊びの見直しに、保育園での遊びをヒントにというねらいでこの実践研究が行われたことすばらしいですね。

事例1、事例2と子どもの生き生きとした姿が伝わって来ました。遊びに意欲を示せない子どもたちが多くいると言われる現在、「～したい」という子どもの意欲、気持ちを大切に、そのきっかけ作りに事例2での「水鉄砲を作る」ことに目が向けられました。事例3での「みんなでつくろう」から、事例4、事例5と親子の関わりに発展し展開が生まれたこと、その過程での多くの事が子どもの学びとなっていくこと、そして実践での取り組みのねらいでもある事例6が取り上げられ考察されています。すばらしい展開で実践報告に重みがつきました。

半田さんらの実践報告は、保育園を挙げて日頃の遊びの中での子どもの声を拾い、そこから保育士は何をすべきか、家庭生活との連続性を保育園から発信することなどの遊びのもつ意味、遊びから育つものが沢山あることを示してくれました。すばらしい実践研究となり敬意を表します。今後のご活躍を期待します。

自然豊かな環境の中でのびのびと遊ぶ子どもたち。一見平和に見える光景も、子どもたちの会話に耳を傾けた時に聞こえてくるテレビやゲームなどの影響を受けた攻撃的で思いやりを欠けた言葉に心を痛めた保育者の葛藤と遊びとは何か、その言葉の持つ意味を考察するために原点に戻り改めて、軌道修正しながら積み上げて行った取り組みの記録。

子どもたちの将来を危惧し、子どもたちに寄り添い、自主性を導き出し、意欲と心の成長を育んで行った経緯には学ばせていただくことが多々ありました。

豊かな時代に育った子どもたち。物があるのが普通と言う思いの中、あえて1本の水鉄砲で順番を守ると言うルールと新しい玩具に対する興味、経験を積み重ねていくことによって身についていく自信と思いやり。その輪は、子どもたちのみならず、保護者をも巻き込み、参観日での手作り玩具作りに発展、使いなれない道具を使わなければならない経験不足から生じる不安や不満の声を耳にしながらも毅然とした姿勢で臨む保育者の姿に経験を積んだ保育者ならではの自信を感じました。

結果ではなく、そのプロセスや背景にあるものに目を向け、現実をとらえながら今後の在り方を考察していく。保育者の揺らぎ無い姿勢に保護者の理解と信頼が育まれていく。

記録もデーターも適切であり、これから次なるチャレンジが待ち遠しいとさえ感じる報告でした。

実践奨励賞

実践報告

「感染症対策委員会を立ち上げて」

向井 敦子（宮園保育園・東京都支部）

講評：藤澤 良知

感染症の問題は、抵抗力の弱い乳幼児を預かる集団保育の場である保育園においては極めて大切な問題です。ところが、感染症の問題はどうも看護師の仕事といった考え方が多いことに違和感をもち、看護師である向井さんご自身が、保育園の職員全体の意識の改革・向上と、対応の強化を図るべく、「感染症対策委員会」を立ち上げて、取り組みをされていることは素晴らしいことです。もちろん、看護師と保育士の業務の専門性は異なりますが、保育の現場にあっては、現場の抱える問題に目をむけ、関係者が相互理解のもと、どう対応するかは大変重要なことと思います。

「感染症対策委員会」として、いままで取り組んだこととしては嘔吐処理の際の手袋のはずしたときの手の汚染状況の実験、子どもと一緒に石鹸を作りそれを使った手洗いの指導、手洗い、うがい、エチケットなどの劇など、また、衛生チェック表の活用、おむつ交換マニュアル作りなど、なかなかユニークな取り組みをされています。

園児が主体的に子どもなりの発育発達段階に応じて、劇などを通じて健康の大切さ、手洗いの大切さを園児にわかりやすく、体験的に指導する。また、子ども達の目線で考え、つくりあげる取り組みは素晴らしいことです。特に本年度は、子どもたちが試行錯誤しながら作り上げた「ばい菌のカード」を使った子どもが考える簡単な劇など、子ども達の自主性の芽生えとして素晴らしいことだと思います。

また、保育目標として、掲げられている、自主性のある子、想像力の豊かな子、誰にも挨拶が出来る子、思いやりのある子、なんでも食べる元気な子、なかなか素晴らしい具体性のある目標だと思います。「感染症対策委員会」として、取り上げた貴重な体験をもとに、今後とも、保育目標の達成に向けて頑張ってください。

看護師の立場から職員の意識改革に立ち上がり、体制づくりをしたことは素晴らしいと思いました。保育園における感染症対策は保育園全体として組織的に対応することが望ましく、看護師一人では十分な対応は難しいと考えます。

感染症対策委員会を立ち上げて3年目を迎えての報告の中で、その経過が手に取るように分かり、一つ一つがとても新鮮でした。嘔吐処理後の汚れをブラックライトで確認したり、石鹸を子ども達と一緒に作り、手洗いに興味が持てるようにしたり、エチケットマンの劇を作ったり、衛生チェック表やおむつ交換マニュアルと、委員から出たアイデアを上手に取り上げ、職員全員で取り組んでいる様子がとても良いと思いました。特に、それぞれのクラスの担任は年齢によって悩みが違い、それを出し合い、その年齢にあった対策と環境整備を進め、それにより感染症の流行を最小限に食い止めたことは、委員を始め、職員全員の自信につながったことでしょう。感染症は手洗い、うがいに始まり、手洗い、うがいに終わると言われるほど、日頃の手洗い、うがいが大事で、もちろんそこにも焦点を当て、いい加減にやっていたことを、どのようにしたらしっかり出来るようになるのかを種々の方法を試みていることには、今後、どのように展開され、定着していくのか、大変に興味があります。

園児は長時間集団で生活するために園児同士が濃厚な接触をしているので感染しやすい環境にいること。そして、からだのあらゆる器官が未完成で、しかもその機能が未熟であるために、特に感染症予防が必要であると考えます。報告の中で、これからも引き続き活動をしていきたいと記載されていましたが、大いに期待したいと思います。

実践奨励賞

実践報告

『「エピソード記述」を通しての保育の質の向上の経過』

石田 幸美（菜の花保育園・山梨県支部）

講評：井桁 容子

本報告は、エピソード記述が保育者の記述力、保護者対応、子どもの対する観察力、対応威力の向上につながるという視点による平成20年から24年までの実践報告であり、読み応えのあるしっかりとした内容になっていた。

第1期の平成20年では、大学ノートへの自由記述にしたが提出にムラがでたり、負担感が感じられるという保育者の反応から、エピソード記述の意義を文献を利用して学び合い情報を共有化し、さらに記述のフォームの工夫を行い、保育者の意識の変化をアンケートで確認して振り返りを行っている。

第2期の平成21年においては、エピソード提出率が上がるという向上が確認され、さらに内容が「読み手にも解りやすい記述」と「情報の共有化」を目的としたことが、保育者の記述に確実に反映されていた。さらに、会議のなかでの検討も振り返りがしっかりとなされながら、子どもへのまなざしの偏りは、エピソード記述した子どもは名簿にチェックすること、パート職員をふくめた情報の共有が難しいことは、コピーでクラス回覧という形で工夫するなど改善されていった。さらに、保育者の意識化もアンケートによって高く変化していることを検証している。

第3期の平成23年では「新たな気づきを共有すること」を目的とし、実践が確実に進化をとげていることが、目的の中にも表れている。さらに、エピソード検討のなかにはありがちな共感的意見だけでは質の向上にはつながらないと気づき、異論が自然に出し合える工夫によって、エピソードを記述した保育者が子どもとのかかわりに反映していく考察の変化がみられ、新たな展開にと発展している。

この実践報告は、保育の質の向上を目指すうえで大変参考になるものである。欲をいえば、具体的な実践の様子や資料の可視化の工夫があるとさらに伝わりやすい内容になったであろう。

講演会をきっかけとして「エピソード記述」に取り組まれたことに興味を持ちました。講演を聴き、数冊の本を読み、自園で実施したいという強い思いを園長先生や保育士に伝え、保育園として組織的に保育士全員で取り組むまでには時間がかかった事と想像します。しかし、その強い思いが実現し、思っていたような成果が出てくると、その感動と満足感は大きな自信につながったことでしょう。その行動力と組織力に敬意を表します。

さて、その「エピソード記録」ですが、確かに保育士の業務は多く、いつ記録するのかということにおいては、どうしても時間外を当てにせざるを得ない状況で、それでも「やってみよう」という保育士の意気込みに支えられてのスタートから5年が経過し、その間の展開が分かりやすく記載されていました。エピソード記録をすることにより、保育士の視点が定まり、子どもの育ちが客観的にとらえることが出来、また、エピソード記録を職員全員で共有し、同じ視点で保育に臨むことが出来る等、保育の質の向上につながった事は大きな成果だと思います。そして記述業務の見直しでは、保育日誌として記載することにより質の高い内容の保育日誌に移行出来たことは評価すべき事と思います。加えて、この「エピソード記録」を実施したことにより、「子どもがどのように変化をしていったのかという子どもの姿」が記載されていると、保育の質の向上の様子が目に見えるように分かり、もっと良かったのではないかと思います。

実践奨励賞

実践報告

「アゲハ蝶の飼育・観察から劇あそびへ！」

中屋 裕子（浪花保育園・福井県支部）

講評：井桁 容子

本報告は、保育士歴2年目の保育者の年長児クラスの実践報告であるが、子どものことばや様子が手に取るように伝わってくる表現になっており、さらにその実践内容は保育者2年目とは思えない子ども一人ひとりに丁寧な目を向けた素晴らしい展開となっている。「2. あそびの入り口」においては、さなぎの様子をよく観察していることが、子どもたちの遊びの中に自然発生的に表れていく。そこには保育者のかかわり、援助やリードの見事さがうかがえる。「3. 劇化するにあたり」では、子どもの表現力の課題を見つけ、否定や指導的かかわりではなく、その子らしい表現をうまく引き出す働きかけや保育者の仕掛けに、子どもたちが見事に応えている。さらに劇化するための脚本は、イメージを膨らませるために絵本や紙芝居を活用し、子どもたちの自然に出てくるつぶやきが生かされたかたちで仕上がっていく。「4. 個の育ち」「5. 集団の育ち」では、表現の苦手な子どもへの気づきと振り返りが丁寧な配慮となって、子ども一人ひとりの育ちに感動する保育者の思いが伝わり、集団としては、他者の思いを尊重する子どもの育ちの様子からこの実践の意義が明確にされた。素晴らしい実践でありながらも、保育者の自分自身の振り返りもきちんとなさされていて、今後の保育力に活かされるに違いない。時間経過と子どもたちの遊びがもう少し整理されてわかりやすくまとまっていたら、と惜まれる。

子どもたちが大好きな虫や蝶。幼虫からの飼育。幼虫の観察から劇遊びへ。直接体験と間接体験を通して子どもたちの想像力を育み、表現することの喜び、楽しさ。生命あるものを守り、育み、慈しむ心の成長。

子どもたちの興味を大切に受け止め、見守り、次へとつなげていく。ともすれば力の注ぎ具合の差はあれども、数多くの保育現場で行われていることですが、丁寧に子どもたちの思いを受け止め、一年を通してステップアップさせていく。移り気な子どもたちにこの気持ちを継続させていく労力はかなりのものです。

小さな生命を大切に思う思いやりの心から、自発的にさなぎの位置を知らせる札を作成し、さなぎの所に貼り、園全体で見守っていく。たどたどしい文字に子どもたちの小さな生命を守るんだと言う強い意志を感じました。継続して紙芝居や劇遊びへと発展させていく細やかな観察力と記録。遊びから学びとる多くの事柄を実践し、報告していただきました。

クラスでの取り組みとして、報告されていますが、それを陰で見守る園長先生はじめ、多くの職員の方々の理解と協力があればこそその実践だったことでしょう。園全体での相互理解がなければ、不可能だったのではと思います。

同じ目的に向かってクラスの子どもたちがひとつになって行った事により、紙芝居の制作や劇遊びにステップアップしたときにクラスの協調性が意味をなしていったことでしょう。

また、劇遊びへと発展させていく折には、保護者の協力と共に個々の性格を十分に把握し、細やかな配慮があったからこそ苦手な事を克服し、共に認め合い、励まし合い、相手を思いやる心、固定観念にとらわれない自由な発想が育まれていったのでしょう。

これからも共に認め合い、共に高め合い、学び合う姿勢を大切にしていきたいと思っています。

実践奨励賞

実践報告

「おむつはずしについて考える

～子どものペースに合わせたおむつはずしのチャンス～

小倉 裕子（建昌保育園・鹿児島県支部）

講評：井桁 容子

本報告は、保護者の子育てストレスを軽減することと子どもの発達に合わせた視点でオムツがはずれるまでの援助の在り方を大変面白い視点で実践研究していることが高く評価される。論旨にブレがなくできる限り結果を可視化していることによって説得力もある。ただ、対象人数が少ないためにグラフによっては多少無理があるものもあった。

一般的に「オムツはずし」を考える時に、“できる”“できない”の結果や、習慣化という大人側の働きかけに注目しがちだが、この実践は、一人ひとりの生理的身体機能の成長発達のデータをとりながら排尿間隔を把握し、無理強いせず、成功を認め、失敗を叱らない、他の子どもと比較しないことを職員間で共通理解して自然に自律できる援助をめざしていることが興味深い。また、家庭の実態調査や応答的やり取りの中で結果を急がず、個人差などについて意識関心を高めるといふ家庭との連携の姿勢によって、保護者の育児負担感の軽減もみてとれる。さらにトイレトレーニングが完了した段階で、子どもの園生活の変化の1～2カ月前を言語の発達、遊びの変化、社会性、運動・操作能力、排尿行動をさかのぼって調査することで、子どもからの発信を生活全体からキャッチし予告できるタイミングを保護者に客観的に伝えることができている。資料も十分にそろえられていた。ついつい情緒的捉え方や経験的視点に陥りがちな実践の研究を、きちんと科学的根拠をもって捉えたことが素晴らしい。念のために乳幼児にとって排泄は生活の一部であり、豊かな遊びや自由な表現が保障されていく中で、保育者間、保護者と園全体の共通理解をベースに無理なく進められることであることを再度確認しておきたい。

おむつはずしはどこの保育園でも課題として挙がる内容で、この課題に正面から取り組み、しかも、トイレトレーニング完了後の変化まで研究されたことに大変興味を持ちました。

職員の資質向上を目的として「実践研究委員会」を発足させ、テーマを選定する際に、先ず0・1・2歳児に絞り、次に保護者の悩みに着目し、保護者と保育士がともに排泄の発達を共通理解し、子どものペースに合わせた「おむつはずし」をめざして研究をスタートされたことは、保護者、保育士の双方に関心がある為、取り組みやすく、テーマの選び方が良かったと思いました。進めていくに当たり、あくまでも主役は子どもであることを忘れずに、子どもの生まれ持った発達の力が十分に出し切れるようにお手伝いをしていくという姿勢で臨まれ、先ず、子どもと家庭の実態把握を実施、同時に保育園での排泄状況の把握を実施。その結果を3つのパターンに分類し個別に把握。そして次年度にも実態調査を行い、その経過を個別にとらえていき、その結果、保護者と保育士が同じペースで進めていくと、「おしっこ」と言える「排尿予告」が急に増える時期がある。この時期をしっかりと押さえることが出来ると、無理なく完了まで進めることが出来る。これはとても興味深い事です。加えて、トレーニング完了後の子どもの変化として、言語・遊び・社会性・運動等の急激な自立への成長につながっていることを改めて確認することが出来ました。子どもにとって、小さな事が一つ一つ自分でできるようになることが、次への成長のステップとなり、大きな成長となっていくことを、もう一度見直し、ゆっくり、丁寧に対応していくことの必要性を感じました。最後に、実態を正確に把握するためには沢山のデータが必要であることを報告していましたが、これは地道で手間のかかる事ですが、是非続けていただきたいと思いました。

報告奨励賞

課題研究① 人との関わり

「子どもと保護者との関係をつなぐ、保護者養育力向上をめざして」

伊能 恵子（昭島ナオミ保育園・東京都支部）

講評：小林 芳文

この研究は、家庭養育力の低下や保護者による子どもへの虐待問題などが叫ばれている今日の世情に対して、保育所が工夫し家庭とのつなぎ役となれば、保護者の子どもへの理解が高まりこれらの課題に少しでも寄り添えるという仮説で取り組んだ研究と受けとめました。方法は独自の様式で考えたルーブリックという手法を分析しまとめたものです。

大変意義のある研究でした。ルーブリックを活用した方法で、保護者が子どもの育ちを理解でき、日案、週案、月案の全て、そして子どもの日々の様子、成長、発達が、分かりやすく保護者と保育士が共有出来たこと、子どもを巡る保育士と保護者との健全な関係が構築され、養育力が向上したことが解り、興味を持って見させていただきました。

研究報告の作り方に少し提案をします。「保護者用保育要望録」「家庭養育力育成計画表・経過録」「某ママの保護者用保育要望録」の資料がついていましたが、直接の記入例がはっきりして読み取れなく、また記入の書き込み不足のため、細かく評価が出来ませんでした。つまり事例としてあげられた研究記録表の重要性が読み取れず残念でした。データの付け方、表の付け方に今後は配慮して下さい。研究結果の資料がきちんと付けられて発表されることを希望しています。

しかし、この研究でどうすれば、保護者が子どもを良く理解し、それを取り囲む全職員などが、関係性をバランス保ち続けられるかが、このような手法で進めることも解ったとのこと、今後の取り組みを期待しています。

課題研究として、子どもと保護者との関係性を築くためにひとつの方法としてルーブリックを用い、保護者と保育士が同じ視点で子どもの健全育成を願い、要望していくことにより、保護者の我が子へ向かう養育姿勢が健全になり、さらに保護者の養育力向上が期待でき、さらに保育士側からは子どもと保護者との健全な関係性構築のプロセスを知ることが可能となる研究をされ、その成果として、子ども・保護者・保育士の三者により保たれている保育実践の質をも向上させることになったと結ばれていた。ひとつの方法としてルーブリックを用いたのは理解できるが、その項目のチェックの数やコメントだけで判断するのは危険であるように思われる。ルーブリックを進めていく過程で、保護者と保育士のたくさんの温もりのあるやり取りがあったと想像しますが、その部分が記載されていなかったことは大変に残念に思います。また、A君の様子についても当初は体に傷があったり食事は昼食だけといった異常な状況から少しずつ改善されていく様子についても、A君と保護者のやり取りの様子や、A君と保育士や他の園児との日常の保育の中での生活の様子を記載し、改善されていく姿が見られたらもっと理解に繋がったと感じました。そして今後の課題として、「常に子どもとの健全なる関係性をいかに築き続けていくか…」ということに向かい、今後も子どもと人との関係性を築く保育所保育の質の向上を目指して励んでいきたいと結ばれていました。常に保護者と保育士とともに、子どもの最善の利益のために、たゆまぬ努力をされていこうとする姿にエールを送りたいと思います。是非、子どもたちが生き生きと豊かに成長していくよう、温もりのある関係の構築に期待いたします。

報告奨励賞

課題研究① 人との関わり

「人との関わりを通して、人権を尊重する心を育てる保育を推進するために」

大神 敬一（多々良保育園・福岡市支部）

講評：藤澤 良知

保育所保育指針では、子どもの人権尊重は、社会的責任として謳われていますが、確かに、人権を大切にされた保育そして人間愛を基本とした保育は、保育の原点であるように思います。幼児期から、人を思いやる心など、しっかり身につけてあげるような環境を作ってあげたいものです。

保育を通じた、人との関わりの中で、人に対する愛情や信頼感、そして人権を大切にする心を育て、道徳心の芽生えを培うことは素晴らしいことです。

本報告では、保育指針に示す養護と教育の一体化の視点に立って、特に情緒の安定、健康安全、人間関係、言葉の領域に重点をおいた検討をされていますが大切なことと思います。しかし、現実としては、多様な保育計画を進める上で、人権という視点で具体的な成果を挙げるには、どう対応したらよいか、評価はどうするかなどの検討も大切のように感じます。

報告書の別添資料①の「保育指導案における、予想される子どもの活動と保育者の配慮」の内容。また、別添資料②の「信頼関係を育むための先生と園児のふれあいの場とかかわり方」など検討されていますが、具体的に保育の場で実践し成果を挙げるのは容易なことではないと思います。

確かに、研究報告に見られるように、子どもは、大人に愛され、信頼されることによって自尊感情を持ち、ひいては人を愛し信頼していく心も養われると思います。また、幼児期から正義感、倫理観等の豊かな体験を重ね、人間性豊かな人として成長させるためにも、保育計画に、具体的に位置付けることの出来る人権的視点に配慮した活動の具体化に向けて益々の進展に期待するものです。

保育所保育指針第一章4の(1)で、保育所の社会的責任として求められている「子どもの人権の配慮、人格の尊重」という言葉については、1989年の国連総会において採択され、1994年に日本も批准している『子どもの権利条約』の影響があると筆者は考えている。子どもの権利条約では、子どもを「保護の対象」としてではなく「権利の主体」としている。よって、大人や社会には子どもを健全に育成する「義務」があり、子どもには「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」があることを認識しなければならない。

本実践研究は、前述した保育所保育指針に明記されている「子どもの人権の配慮、人格の尊重」に注目しているとともに、平成24年4月に福岡市こども未来局長から通知された「福岡市人権保育指針」に基づいた人権保育の実践をとおして論じられている。多々良保育園では、子どもの日常会話から発せられる言葉について振り返り、いくつかの言葉から受ける感じを発表しあったり、相手を気遣う言葉について話し合ったりする機会を設けている。これらからは、相手を思いやる心を育むことを意図して、具体的な事例を挙げて子どもたちにもわかりやすく人権保育を行っている様子が伺われた。子どもの頃から人権について意識していくことは、生涯にわたって人と人とのコミュニケーションの基本となるものであり、とても大切なことであると改めて感じさせられた。

なお、筆者の個人的な思いではあるが、本実践研究では「人権」のとらえ方について、広義の人権（他者への配慮）について言及されているが、保育所で保育される子ども自身の人権についても言及していただきたかった。子どもと共に人権について考え、他者の人権を尊重する気持ちを育むことももちろん大切ではあるが、当の多々良保育園で保育されている子どもたちの人権が、保育所保育指針や福岡市人権保育指針に則してどのように配慮され、一人一人の人格がどのように尊重されているかということ、詳細に論じていただきたかった。独自の人権保育指針を策定するなど、行政区としても高い人権意識を持っている地区の保育所で、園長を始めとする全職員が保育所として日々子どもたちにどのように関わっているのかが興味深いため、是非とも次の機会で実践報告をしていただきたいと願うものである。

報告奨励賞

課題研究① 人との関わり

「子どもは親の信を感じて成長を始める」

渡辺 太郎（寒田ひめやま保育園・大分県支部）

講評：藤澤 良知

ご意見のように、集団保育に当たっては、朝から寝ころがる子ども（現5歳児）、3歳児クラスから集団行動についていけないで、個別対応が必要な子どもなど見られ、本当に大変だと思います。家庭の育児環境に問題を抱える家庭も多く、このような家庭では子どもなりに、親子関係の問題から子どもが欲求不満や無力感を感じており、その対応には苦慮されておられることでしょう。

本報告では、朝から寝ころがる子にいったい何がそうさせているのか。朝から元気がない、送迎は父親、分かれるとき言葉のやり取りもタッチもしない、おはようと声をかけてもよい返事がない、仲間と一緒に行動が出来ない、食事は細く給食も時間がかかる、声を立てて笑わない。いったいこの子どもの心や体に何が起こっているのかについて、問題点の所在を探るための努力、本当にご苦労様です。また、母親から認められていないのではないかと、潜在的な精神的、欲求不満がそうさせているのではないかと、問題点の所在を探るための健康記録のチェック、保育記録、視診・問診・蝕診、アセスメントシートなどにより、検討を重ねられています。エピソード記録のなかにある、「…ママ、僕のことあんまり好きじゃない。」という言葉はショッキングな言葉ですね。専門機関での診断も旨く行かず、園内でギルバーグ等の診断基準で診断するなど努力されています。

記述に見られるように、子どもの反発行動の裏には、それなりの理由があることを理解し、更に細かく行動を観察・理解し、本人の自己肯定感を高める支援をしたいとしていますが、まさにそのとおりだと思います。育児における親の愛情の大切さを実感する報告です。ご苦労様です。

保育所で保育を行ううえで、特別な配慮を必要とする子どもへの関わりについては、各保育所でそれぞれ工夫されていると思われる。専門機関に相談をしたり、指導を受けたりしている保育所も多いと聞く。加えて、保護者対応の難しさも合わせ聞くところであるが、保育所保育指針には「家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ(中略)」とあり、子どもの健やかな育ちのためには、家庭との連携を欠かすことができないのである。

本実践研究は、いつも朝から元気がなく、集団遊びも苦手で、部屋の片隅でうずくまったり寝転んだりしているなど、日常的に特別な配慮を必要とする子ども（4歳児）への関わりについて、本児の4歳児までの生育暦を中心に記述し、考察されている。ところで、寒田ひめやま保育園では園長自らが、子どもの心身の状況を把握したいとの思いから、子どもへの挨拶を心がけ、子どもの顔色や歩き方を観察したうえで、ハンドタッチ、ボディータッチ、抱く、くすぐるなどのスキンシップを通じて、子どもとのコミュニケーションや体躯の成長確認を行っている。それらを経て、骨格や笑い筋なるものの成長不良の要因について、園長独自と思われる理論に当てはめて言及されているところが興味深かった。是非ともまた次の機会で、更に詳細に実践報告をしていただきたいと願うものである。

なお、筆者が報告書を査読した際に、とても気になった件があった。それは、4. 考察の項で記述されていた「〇〇が生き生きとした場面があった。療育センターに出向いた時である。自分を正当に評価してくれる人に、出会える日を待っていたように思われる」という件である。厳しい言い方かもしれないが、当該児童にとって寒田ひめやま保育園には、自分を正当に評価してくれる人がいなかったのか、また、そのような場所ではなかったのかとの疑問を持たざるを得ないのである。今回の実践研究は、「子どもは親の信を感じて成長を始める」をテーマとされている。もちろん子どもの健やかな成長のためには、親子の信頼関係や愛着関係が確立されることが第一義であることに疑いの余地はないが、今回の事例のように親の関わりが適切でない場合には、保育所を始めとした周りの大人が子どもとの信頼関係や愛着関係を結んでいかなければならないはずであろう。いうなれば、「子どもは大人の信を感じて成長を始める」と定義付けたうえで、当該児童への関わりを深化させる必要があると筆者は考える。

最後に、今回のような実践研究はとてもデリケートな問題であるため、報告書には実名を記載されないよう配慮していただきたいと申し添え、寒田ひめやま保育園の、今後の活発な保育実践に期待するものである。

報告奨励賞

課題研究② 遊びと学び

「木製手作り玩具」

糸 健太郎（キッズタウンにしおおい・東京都支部）

講評：小林 芳文

「遊びと学び」の糸さんらの研究に、大変興味を持って拝見しました。このテーマは、「保育という仕事」がいかにかに子どもの生きる力に大切か、遊びがなぜ保育の軸に必要なかについての答えを出してくれる研究であるからです。糸さんらがこの課題をどのように切り込んでいくのか、その実践と理論的展開をどのように連携するのか等、期待を込めて読ませていただきました。

研究の動機によると、新しい開園2年の園には、グループで遊べる玩具がないこと、壊れにくく、幅の広い年齢で遊べること等のねらいをクリアするために、男性職員が発案し新たに玩具を作ろうという話し合いで「木製手作り玩具」が生まれたという。研究では幾つかの試作の「玩具」を作ったこと、それで子どもの遊びを観察したことで、今回の研究対象の木製玩具の制作に至ったことが記述してあり、子どもの興味に寄り添う重みが伝わってきました。

制作玩具を1、2歳児から5歳児のクラスにおいて、年齢ごとの子どもでどのように遊んでいるのかを分析したという研究手法がすばらしかったですね。

それぞれの使い方（遊び方）の課程で、学びの姿を整理しています。たとえば、年長児では転がらない四角柱の遊具よりバランスを崩して転がる円柱に興味を示す、どうすれば崩さずにバランスをとって形を維持出来るかななどの思考が展開している様子から、「遊びにおける学び」を分析しています。研究のまとめとして、「この遊びの中に緊張と緩和のハラハラ、ドキドキ感があり、子どもたちの目を引く魅力があったと考える」と書かれていました。この事が現代では決して十分でなく少し不足しています。今後もこのような研究をもっともっと進めて知的な揺さぶりを支えて下さい。私は、子どもの発達には、このことが重要と考えるからです。

この報告は、自園の玩具を見直し、遊びの幅を広げるために保育教材に掲載されていた玩具を参考に手作りした木製玩具「バランスゲーム」を通して子どもたちの反応を記録しながら、より完成度の高いものへと手をくわえていった遊びと学びの研究報告です。

個々の遊びから複数、グループでの遊びへの発展を目指して、子どもたちの反応を見ながら、職員間で話し合いを重ね、さらに手を加えていく。職員間の共通理解の基、子どもたちのためにと協力し合う、保育士の温かいまなざしの感じられる事例でした。

シンプルなひとつの玩具でも、年齢や発達過程によって遊び方も異なり、その難易度も増していく。バランスをとるためには、どのようにしたらよいかを考え工夫していく力を子どもたち自らが習得し、他児とのコミュニケーション能力も向上していく様を見守り、職員間で話し合いを重ねていくことにより、携わった職員にとって大きな達成感を得られる機会になったことでしょう。

内容的には、各年齢ごとの遊びの形態、子どものみならず高齢者のリハビリテーションへの活用等、幅広い面も窺えたものの、視点がぼやけてしまった感もありました。記録の仕方等にもうひと工夫欲しかった感があります。

子どもたちのワクワクドキドキする様子や玩具作りに携わった年長児の様子にもスポットを当てて、子どもの目線、子どもの側から感じられる玩具への思いとしてみるとより一層、内容的にも充実したものとなったことでしょう。

報告の中の記述にもありましたが、パーツに色をつけてみた時に示す子どもたちの反応や色をつけない木の風合いを生かした素材のままのパーツとの興味の比較等、まだまだこれから学びの場は広がっていくことでしょう。これからも子どもたちの目線で見て感じたたくさんの気づきを大切にして世界にひとつしかないオリジナル玩具を作成し、遊びと学びに生かしていただきたいと思います。

報告奨励賞**課題研究② 遊びと学び****「未満児における遊びと保育環境について ～実践から見えてきた子どもの育ち～」****知念 幸江（第2 愛心保育園・沖縄県支部）****講評：井桁 容子**

本研究は、保育者の自己評価に見えた「子どもの自発性を育む保育環境に対して適切に配慮できているとはいえない」という振り返りを課題とし研究テーマにとりあげている視点は、本来あるべき実践者の研究として実践の質を高めていくための研究というスタンスであり高く評価したい。形式も読みやすく整理されていた。ただ残念なことは、問題提起が素晴らしいのに、論旨にずれがあることだ。つまり、保育者の気づきが“子どもの自発性を育む保育環境になっていない”と自己評価があったにもかかわらず、挙げられている実践の内容が、保育者主導になっていることだ。たとえば0歳児の保育実践では、全身運動、園庭遊び、ベビーマッサージ、散歩など活動内容や保育者の行為は見えてくるが、子ども一人ひとりがどのようにうけとめ、その中でどのような時に自発性が育まれるのかへの視点が表されていない。個人差の大きい3歳未満児の保育は、一人ひとりの発達過程を見通すことや、一人ひとりの最善の利益を保障するいねいな視点こそが環境設定や遊び、関わりの工夫に反映される。結果と考察においては、重要な気づきがみられるだけに残念だ。

この報告は、第三者評価受審と言うひとつの機会に園全体で自らの保育を振り返り、環境についてひとつひとつ見直し、人的環境と共に心地よい空間づくりについて下記の点に重点を置き、取り組んだ報告です。

1. 3歳未満児に焦点をあて、乳児クラスを発達に応じてグループに分け、担当制を導入する。

2. 1・2歳児の保育室に遊びのコーナーを作り、自ら主体的に活動できる場を設定する。

子どもの目線で保育室を観察し、子どもの動線を考慮し環境を変えていくことにより、子どもたちが安心して遊びに集中できる場を設定する。昨今、実践されている園も多くなっていることと思います。伝え聞くのみならず実践したことにより改めて、その良さを実感されたことでしょうか。ひとりひとりを大切にしたい保育を心掛けている様子が伺えました。ともするとクラス担任にとって全体把握が薄れてくる可能性があります。相互間で連携しつつ、補っているようですが、常にお互い声を掛け合い情報を共有できる体制を作っておくことが求められてきます。

ゆったりと過ごす時間の中での関わりは、心の成長にとっても大きな役割を担っていることと思います。この度の事例は、3歳未満児における遊びと保育環境についてと言う報告であったため、未満児のみの関わりでしたが、3歳以上児との関わりはどのようなものなのか、興味をそそられます。これからの課題として、ふたつの事柄が掲げられていますが、これからこの課題とどのように向き合っていくのか職員の方々の今後に期待したいと思います。

報告奨励賞

実践報告

「自立を育む楽しいキャンプ」

宮田 芳子（筑水保育園・福岡県支部）

講評：藤澤 良知

この報告は、地域の特性を活かして、毎年年長組みの子ども達がお泊り保育を通じて、親もとを離れて、子ども同士が協力しながら、自信と自立心を育むことを願って実施している体験活動です。子ども達はこの日のために友達とアイデアを出し合ったり、話し合いを何回もしたりしています。当日は、自分たちで作った野菜を使ったカレー作り、サラダ作り、バーベキュー、きもだめし、スイカ割り、キャンドルの集い、お楽しみ会など多彩な取り組みをされておられます。保護者からも自分の子どもの成長の姿を見て感動されるなど、好評で結構なことです。キャンプ前の活動としては、年間の食育としての菜園づくり（きゅうり、なす、トマト、スイカ、ピーマン、ジャガイモ、たまねぎ等）、お泊り保育の実施計画の話し合いなど綿密な計画のもとに実施されています。また、自分の箸づくりといった特色ある活動では、春に見たたけのこが大きく育つたことを知り、そこで正しい小刀の使い方の指導のもと自分の「マイ箸」づくりをされています。なかには、自分でつくったお箸を家に持ちかえり「お兄ちゃんが保育園のとき作ったお箸をいまも使っているから僕もずーっと使うよ」といった自分が苦勞して作ったものを大切にする気持ちが持てる子どもがいるとの言葉は、幼児期の体験活動のあり方のすばらしさを実感する言葉だと思います。また、飯盒で始めてのご飯づくりなど貴重な体験だと思います。

幼児期における学習の基本は、体験することが出発点です。自然体験、家事体験、調理体験などしっかり身につけることによって子どもも大きく成長することになりましょう。益々のご発展を願っています。

筑水保育園から提出された実践報告書からは、保育所が立地する自然豊かな環境が脳裏に浮かぶような感じがした。そのような環境の中で、一晩限りとはいえ、親元を離れて子ども同士が協力し合って過ごしたり、身の回りのことを自分で行ったりするなど、自信と自立心を持たせることを意図して、毎年キャンプを行っていることが報告されていた。

実際のキャンプの様子として、まず夕食の準備から食事の様子について記述されていた。飯ごうを使っただけの初めてのご飯炊きから、サラダに使う野菜の収穫から下準備のすべてを子どもたち自身が行い、それを食べるという一連の活動から得られた成果は、いつもはあまり食べない子どもがたくさん食べたという事実が如実に現れていると筆者は考える。また、お楽しみ会では、影絵や人形劇が上手にできたこと、スイカ割りが職員も一体になって盛り上がったこと、キャンドルの集いでは、火の女神様から火を分けてもらい、火の大切さを教えてもらったこと等々、限られた時間の中で盛りだくさんの内容であったことが伺われた。更には、毎年恒例だというきもだめしで、近くの山に住む天狗からの手紙に従って暗い夜道を歩いたことなどの記述も、臨場感溢れる報告であると感じた。これらのように、非日常的なキャンプの中で、子どもに様々な経験をさせることで、本事業の目的である自信と自立心を持たせようとしていることに加え、キャンドルの集いではファンタジーの世界に浸り、きもだめしでは天狗の存在を信じさせたりすることが、子どもの豊かな感性の育ちにつながるであろうと推察された。キャンプ後の子どもの変容の記述からも、泣いている年少児に対して「天狗が来るよ」と言ったり、自分で作った箸を家に持ち帰ったりするなど、自分が作ったものを大切にしようとする子どもがいたなどの成果が報告されている。また、保護者からも最初は不安がっていた子どもが、キャンプを終えて笑顔で帰宅し、楽しかったことを話してくれた、キャンプで作ったカレーを家でも作って見せてくれたなどの、喜ばしい評価をいただいたことが記述されており、とても微笑ましく思えた。

子どもたちにとってかけがえのない経験で、まさに実践報告書のテーマどおり、「自立を育む楽しいキャンプ」となったことが伝わってきた。今後も、子どもたちの健やかな成長を願う筑水保育園のキャンプ活動が、子どもたちの笑顔とともに継続していかれることを期待するものである。

第7回 保育所保育実践研究・報告集

平成25年3月31日

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5丁目53番1号

TEL 03-3486-4412 (代)

FAX 03-3486-4415

(700)